

筑波大学博士(言語学)学位請求論文

形式名詞と結合する助詞「を」の研究
—「中を」「のを」「ところを」を中心に—

申 義植

2016年度

【目次】

第1章 序論

1. 本研究の背景と目的	1
2. 本研究の対象	3
3. 本論文の構成及び各章の概要	5

第2章 先行研究と問題の所在

1. 格助詞「を」の特徴と機能について	8
1.1 格助詞「を」の用法について	8
1.2 格助詞「を」の機能における必須度の問題	11
2. 格助詞「を」の特徴を中心とした研究	13
2.1 「中を」における格助詞「を」について	13
2.1.1 杉本(1986、1993、2009)	13
2.1.2 加藤(2006)	15
2.1.3 天野(2007、2011)	17
2.2 「のを」における格助詞「を」について	18
2.2.1 天野(2010、2011)	18
3. 他の特徴に関する研究	20
3.1 「中を」	20
3.1.1 佐伯(2013)	20
3.2 「のを」	22
3.2.1 レー(1988)	22
3.2.2 加藤(2006)	25
3.3 「ところを」	27
3.3.1 森田・松木(1989)	27
3.3.2 田中(1996)	28
4. 問題の所在と本研究の立場	29

第3章 移動格の「を」と「中を」形式におけるずれと機能変化について

1. はじめに	33
2. 先行研究と問題の所在	35
2.1 期間を表す「を」	35
2.2 状況を表す「中を」	36
2.3 問題の所在と「中を」の用法区分	38
3. 移動格の「を」と空間ナカヲのずれ	39
3.1 空間ナカヲと経路の「を」における類似性	39
3.2 経路の「を」と空間ナカヲのずれ	41
3.2.1 出来事性+形式名詞「中」の組み合わせと空間の捉え方のずれ	41
3.2.2 共起動詞のずれ	42
3.2.3 二重ヲ格の許容と空間ナカヲの文法機能	44
3.2.4 移動格と空間ナカヲの連続性	46
4. 時間ナカヲについて	47
4.1 時間ナカヲにおける生起条件	47
4.2 「ている」形と共起する場合	48
4.3 副詞成分により「展開プロセス」が読みとられる場合	50
4.4 複数の動詞による動きの連続で「展開プロセス」が読みとられる場合	51
4.5 語彙的な意味により「展開プロセス」が読みとられる場合	53
4.6 「展開プロセス」の特徴のまとめ	54
5. 期間ヲと時間ナカヲにおける連続とずれ	55
5.1 必須格としての期間ヲ①と副詞格としての期間ヲ②について	55
5.2 「戦う」類の動詞と共起する期間ヲ②と時間ナカヲにおける共通点と相違点	60
5.3 時間ナカヲと期間ヲ②における格助詞としての性質と機能のずれ	62
6. 移動格「を」と「中を」のずれにおける格助詞「を」の機能変化	67
7. まとめ	68

第4章 複合助詞ノヲにおける格助詞用法と接続助詞用法の連続性について

1. はじめに	69
2. 先行研究	70
2.1 接続助詞としての「を」	70
2.2 「対象」を表す格助詞「を」	71
2.3 問題の所在	72
3. 接続ノヲ文における「対抗動作性」が表す他動関係について	73
4. 「対比関係」を表す接続ノヲ文について	76
4.1 「継起的対比」を表す接続ノヲ文	76
4.2 「同時的対比」を表す接続ノヲ文	79
5. 複合助詞ノヲの格助詞用法から接続助詞用法へ	82
6. まとめ	84

第5章 接続助詞として機能する「ところを」について

1. はじめに	85
2. 先行研究	86
3. 接続トコロヲ節の意味的な特徴	90
3.1 節内における「当為性」と「事態未成立」について	90
3.2 接続トコロヲ節内が形容詞になっている場合	94
4. 「ところを」の接続助詞的な機能へ	96
4.1 文末形式の「ところを」との類似性	96
4.2 格助詞「を」の性質について	99
5. まとめ	100

第6章 格助詞「を」の性質の希薄化の程度性について

1. はじめに	102
2. 問題の所在	103
2.1 複合形式における格助詞「を」の性質の希薄化の程度性	103
2.2 複合助詞化について	106
3. 構造的な位置づけによる格助詞「を」の性質の希薄化について	107

4. 各形式における名詞性の喪失の程度性について	109
5. 節の独立性について	112
6. 格助詞「を」の性質の希薄化の程度性と複合助詞化について	117
7. まとめ	119
 第7章 結論	
1. 各章のまとめ	121
2. 本研究の意義と今後の課題	123
 参考文献	125
各章と既発表論文との関係	130

第1章 序論

1. 本研究の背景と目的

本研究では、次のように、形式名詞と「を」が結合した「中を」、「のを」、「ところを」形式について、文中における意味的な特徴と機能を検討する。

(1) a 太郎が雨の中をさまよった。 (杉本 2009)

b ちょうど人が額に手をあてて遠くを眺めるといったふうに、淡い六の月光の中を、向こうの谷をしげしげ見つめているのにあった。

[国語総合 教育出版株式会社 2006]

(2) a 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにや住所の控えはあるから」 (レー 1988)

b この時の保健大臣だったフラビエール氏も、IRRM(国際農村復興運動)という主に地域開発の活動をしているNGOの代表だったのを、ラモス大統領によって任命されたばかりだった。

[火曜日はマーシーの日 2002]

(3) もう少しで優勝するところを、ミスして負けました。(森田・松木 1989)

これらの形式の中でも、(1)の「中を」、(2)の「のを」に関する従来の研究では、主に格助詞「を」を中心とした分析により、格助詞としての性質が捉えられていた。一方、(3)の「ところを」に関しては、接続助詞としての用法が記述

され、主に複合助詞(複合辞)としての観点で捉えている研究(森田・松本 1989、田中 1996)もある。ただし、これらの形式が用いられる文には、単純に格助詞「を」の意味・機能だけでは説明できないものが存在している。つまり、これらの形式における助詞「を」は、形式名詞との結合や、それぞれの要因などにより、格助詞としての性質が希薄化したものと考えられる。

本来の格助詞「を」は、(4)のように動詞との文法関係を示すマーカーとして機能しているものである。(4)におけるそれぞれの「を」は、他動詞、移動動詞と共起し、括弧に示した文法的な関係を表している。

- (4) a 太郎が皿を割った。 (対格の「を」)
b 太郎が公園を歩いた。 (移動格の「を」)
c 太郎が雨の中をさまよった。 (状況の「を」) (杉本 2009)

この内、(4c)の状況の「を」は「中を」という形式を取りながら、移動動詞だけではなく、「探す」などの何らかの移動を伴う動作を表す動詞(杉本 1993)との共起が可能になっている¹。

- (5) 吹雪の中を山小屋を探した。 (杉本 1993)

ただし、この「中を」の形式は、(5)を含め、(6)のように、動詞「探す」、「さまよう」の要求する項ではない点で、(4a、b)のような動詞との文法的関係を示すといった本来の格助詞「を」の機能から逸脱している特殊なものであると思われる。

- (6) 太郎が雨の中を繁華街をさまよった。

¹ 後述するが、杉本(1993)では、状況の「を」が「何らかの移動を伴う動作を表す動詞」としか共起しない点をもって、移動格の一種であると捉えられている。次のように、動詞「読む」は語彙的な意味として移動が含まれていないので、状況の「を」とは共起できない。

i) *暗闇の中を本を読んだ。

上記の「中を」を含めて、(1b)、(2b)、(3)のような文における「中を」、「のを」、「ところを」形式には、次のように動詞との文法関係を表示する本来の格助詞「を」の機能について、再考を要するものが存在している。以下、(1b)、(2b)、(3)の用例を再掲する。

- (7) ちょうど人が額に手をあてて遠くを眺めるといったふうに、淡い六日の月光の中を、向こうの谷をしげしげ見つめているのにあった。

[国語総合 教育出版株式会社 2006]

- (8) この時の保健大臣だったフラビエール氏も、IRRM(国際農村復興運動)という主に地域開発の活動をしているNGOの代表だったのを、ラモス大統領によって任命されたばかりだった。 [火曜日はマーシーの日 2002]

- (9) もう少しで優勝するところを、ミスして負けました。(森田・松木 1989)

(7)の文において、動詞「見つめる」は(5)、(6)の「さまよう」、「探す」などとは異なって、動詞の語彙的な意味としての移動性が含まれておらず、「中を」形式は動詞「見つめる」と直接関係していない。また、(8)、(9)の「のを」、「ところを」には、共起する他動詞が存在しない。つまり、上記の用例における「を」は、形式名詞と複合した形で、主節の動詞と直接関係しない(つまり、(4a、b)のような文法関係を示さない)という特徴を持ち、意味的・機能的に格助詞「を」の本質から逸脱していると思われる。

以上を踏まえ、本研究では、(1)～(3)の文における「中を」、「のを」、「ところを」の文中における振る舞いと意味的な特徴を検討し、各形式における「を」の格助詞としての性質がどのように希薄化し、その機能が変化するかを分析する。

2. 本研究の対象

「中を」、「のを」、「ところを」の形式は、構文における用い方により、それぞれの形式における「を」が格助詞として機能するものと、(1)～(3)のように形式名詞と複合した「を」の形で格助詞の性質が希薄化し、他の機能として現れると思われるものが存在している。ここでは、まず、以下のように、先行研究

を参考にし、それぞれの形式の名称と用例をまとめた。また、【 】にも、先行研究を参考に、文中における機能を示した。

(10) a 「中を」

状況の「を」①：

暗闇の中を洞窟をさまよった。 【移動格の一種²】

状況の「を」②：

ある峠でマイナス9度の中をトイレ休憩のために15分間立っていたが、…
【移動格の時間的な用法³】

b 「のを」

内容節：太郎が走っているのを見た。 【目的語⁴】

主要部内在型関係節：警察は泥棒が逃げようとするのを捕まえた。
【目的語⁴】

接続助詞的な「を」：

二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって
【接続助詞的・対格⁵】

c 「ところを」

ところ補部：警察は泥棒が逃げようとするところを捕まえた。 【目的語⁶】

泥棒は逃げようとするところを捕まった⁷。 【目的語⁶】

接続助詞用法の複合辞：

もう少しで優勝するところを、ミスして負けました。 【接続助詞⁸】

² 第2章の2.1.1節を参照。

³ 杉本(2009)では、「激動の時代を生きた」の文における「を」のように、移動格(経路)「を」の時間的な用法と捉えられている。

⁴ 黒田(2005)では、動詞との格一致現象により、内在節を動詞の項として捉えている。詳細は、黒田(2005)を参照。

⁵ 天野(2010)では、「AがBヲV」の構文型における他動性に基づく分析により、接続助詞的な「を」の対格としての性質を捉えている。詳細は、天野(2010)を参照。

⁶ 杉本(1994)では、トコロ構文におけるトコロ補部を目的語として捉えている。詳細は、杉本(1994)を参照。

⁷ 杉本(1991)によると「捕まる」、「見つかる」などは、他動詞が受動化した「受動詞」であり、目的語をとる特殊な自動詞であると指摘されている。

⁸ 森田・松木(1989)では、逆接条件の確定を示す「ところを」の接続助詞用法が記述されている。

本研究では、状況の「を」①②⁹の「中を」、接続助詞的な「を」の「のを」、接続助詞用法の「ところを」(それぞれ太字で表示)の形式を対象にし、形式全体としての文中における振る舞いを検討し、各形式ごとにおける助詞「を」の希薄化を分析する。ここで、対象になる各形式における【 】の機能は、先行研究で述べられているものを示しているが、この詳細については、第2章で概観する。本研究では、研究対象になる「中を」、「のを」、「ところを」の形式において、格助詞「を」に関する先行研究の指摘を参考にしながらも、形式名詞との結合や格助詞性質の希薄化などの要因を考慮し、複合助詞化について議論する。

3. 本論文の構成及び各章の概要

本論文は、全7章から構成される。

第1章 序論

第2章 先行研究と問題の所在

第3章 移動格の「を」と「中を」形式における生起条件のずれと機能変化について

第4章 複合助詞「のを」における格助詞用法と接続助詞用法の連続性について

第5章 接続助詞として機能する「ところを」の分析

第6章 格助詞「を」の性質の希薄化の程度性について

第7章 結論

第1章、序論では、本研究の目的及び本研究の対象について述べる。

第2章では、先行研究を概観し、問題点の指摘及び本研究の立場について述べる。

第3章では、移動格の「を」と「中を」形式における生起条件のずれと機能変化について考える。この節では、「中を」形式を、生起条件の違いにより、空間的状况を表すもの(「空間ナカヲ」)と時間的状况(「時間ナカヲ」)を表すものと

⁹ このように、「中を」を区分した理由については、3章で述べる。

区分する。具体的には、空間ナカヲは移動動詞あるいは移動性動詞の語彙的な意味の「移動性」により生起する副詞格として、時間ナカヲは後続節の「展開プロセス」（抽象的な移動性）という意味により生起する状況成分¹⁰として捉えられる可能性を検討する。このような議論に基づいて、それぞれの「中を」形式と移動格の「を」は、「移動性」という意味的な性質を共有しながらも、形式名詞「中」との結合により、文法的な性質を異にすることを指摘する。

第4章では、複合助詞「のを」が用いられる接続助詞的な「を」文（「接続ノヲ文」）のタイプを、ノヲ節と後続節における接続関係に基づいて、「対抗動作」型、「継起的対比」型、「同時的対比」型の3つに分ける。また、それぞれのタイプの文におけるノヲ節と後続節は、他動的な意味である「対抗動作性」が含まれて結び付けられているが、「継起的対比」型、「同時的対比」型においては、他動性が弱められ、「対比」を表す接続関係により結び付けられるようになっていることを指摘する。このような議論から、複合助詞ノヲにおいては、「他動性の強弱」を基準とした節の連結関係が捉えられ、格助詞用法と接続助詞用法が連続していることを主張する。

第5章では、「ところを」が接続助詞として機能する場合の意味的な特徴を検討する。その特徴として接続トコロヲ節内の「当為性」、「事態未成立」といった特徴が存在することを指摘し、これがモダリティ的な特徴であることを明らかにする。更に、接続トコロヲ節における特徴が、反事実を表す文末形式「ところだった」の意味的な特徴と共通していることを確認し、両者の「ところ」は同一なものであることを議論する。また、モダリティ的な特徴を持つ「ところ」は名詞性を喪失したものであり、後続する「を」は格関係表示機能が希薄化したものと捉えられ、これらが複合した形で、接続助詞機能を持つことを示す。

第6章では、「空間・時間ナカヲ」、「複合助詞ノヲ」、「接続トコロヲ」における各形式、各用法ごとに格助詞「を」機能の希薄化の程度性が見られることを検討する。これら形式における格助詞「を」の希薄化の検討のために、名詞性

¹⁰ 益岡(1995)では、格助詞を持たない時間表現「10年前」などについて、時を「設定」する表現であり、事態のあり方を限定するのではなく、事態の叙述に必要な前提的（予備的）情報を提示する機能を持つ表現要素「状況成分」とであると述べられている。本研究では、このような指摘を参考にし、「時間ナカヲ」の分析を行う。

の喪失、構造的な位置づけ、文的な性質の存在などの現象での各形式の振る舞いを検討し、格助詞の「を」の希薄化がどれだけ進んでいるかを明らかにする。このような議論に基づいて、本研究で扱っている形式の内、格助詞として機能しないものについては、複合助詞として認められると主張する。

第7章の結論では、本研究の成果をまとめ、今後の課題と展望について述べる。

第2章 先行研究と問題の所在

1. 格助詞「を」の特徴と機能について

ここでは、「中を」、「のを」、「ところを」の形式の分析に先立って、格助詞「を」の各用法における文法的な特徴・機能の詳細について、先行研究の分析を概観する。上記の形式における「を」と格助詞「を」との相違点を検討するためには、格助詞「を」の本来の用法・機能に関する従来の研究を確認する必要があると思われる。

1.1 格助詞「を」の用法について

第1章では、杉本(2009)の研究を参考にし、格助詞「を」に、「対格」、「移動格」、「状況の「を」」の3種類の用法があることを確認した。杉本(2009)によると、この「を」について、同一の形態を持つ一方、文法関係の表示では機能を異にする点が指摘されている。例えば、対格の「を」は、他動詞によって付与される構造格(文法格)であり、目的語としての文法関係をマークする機能を持っているが、移動格の「を」は、内在格(意味格)である一方、移動動詞の要求する項として機能している¹。また、状況の「を」に関しては、杉本(1993)においては、(1)のように何らかの移動を伴う動作を表す動詞としか共起しないことを指摘し、杉本(2009)では、(2a)のように移動を伴う動作が想定できない場合でも、(2b)のような移動格(経路)の「を」の時間的用法として考えられることを指摘してい

¹ ここで「構造格」、「内在格」の用語は、研究者により「文法格」、「意味格」とも呼ばれる。また、後述するが、仁田(1993)では、「共演成分」、「付加成分」などの用語も用いられている。

る。

- (1) a *太郎は友人の制止の中を次郎に殴った。
b 太郎は友人の制止の中を次郎に殴りかかった。 (杉本 1993)
- (2) a ある峠でマイナス9度の中をトイレ休憩のため15分間立っていたが、
手袋無しで写真が撮れた。
b 楽しい時を過ごした。 (杉本 2009)

上記のような議論から、杉本(2009)では、状況の「を」と移動格の「を」を同一なものとみなしている。

一方、杉本(2009)では、移動格の「を」について、数量詞遊離、目的語主格化、「の」の前での削除の現象に基づいて、対格の「を」との共通性を認めた上で、他動性の点から移動格の「を」と対格の「を」を連続的なものと捉えた杉本(1986)の議論を再検討している。杉本(2009)によると、次のような使役文における対格の「を」、移動格の「を」の振る舞いの違いにより、移動格の「を」と対格の「を」は、文法機能上、非連続的で異なるものとして捉えられている。

- (3) a 次郎が帰った
b 太郎が次郎に帰らせた。
c 太郎が次郎を帰らせた。
- (4) a 次郎が手紙を書いた。
b 太郎が次郎に手紙を書かせた。
c *太郎が次郎を手紙を書かせた。
- (5) a 次郎が急な崖に登った。
b 太郎が次郎に急な崖に登らせた。
c 太郎が次郎を(無理やり)急な崖に登らせた。 (杉本 2009)

使役文における被使役主「次郎」は、(3)の自動詞文では「に」と「を」がとれる一方、(4)の他動詞文では「に」だけがとれる。一方、(5)のように移動格の「を」をとる動詞の使役文では、被使役主は「に」と「を」の両方がとれる。

更に、(5c)の文では、二重ヲ格の共起が可能な点で、移動格の「を」は対格の「を」と文法的性質が異なっていることが確認される。杉本(2009)では、このように、対格の「を」と移動格の「を」は同形態を持ちながら、文法機能の異なりにより非連続的であることを指摘している。

一方、加藤(2006)では、杉本(2009)の分析とは異なって、格助詞「を」の用法における対象格と場所格の連続性について議論している。加藤(2006)によると、両者は、必須格になる項を導く用法であり、次のように連続性が捉えられると指摘されている。

(6) 花子は教習所で教習車をもう何度も運転している。

(7) 花子は教習所で練習コースをもう何度も運転している。 (加藤 2006)

加藤(2006)においては、(6)の「教習車」は対象として捉えられるが、(7)の「練習コース」は場所のように見えており、対象をどう考えるかを問題点としている。また、(7)のような文における「第三ゲート」は、対象と場所の両方の解釈が可能であり、そこには有境界性を必要としている。

(8) 第三ゲートを突破する。 (加藤 2006)

ここで、有境界性とは、「道を歩く」、「国道を走る」とは違って、(8)の「第三ゲート」のように始点と終点といった境界が明確であることを示す。加藤(2006)では、場所が対象として客体化されるには、この有境界性が必要であると示し、対象格と場所格との連続性を捉えている。

上記の先行研究は、対象格の「を」、移動格の「を」の文法機能の異なり、意味的な連続性に基づいて、両者を非連続的に区分するか、連続性を認めるかの立場に分けられる。本研究では、両者の連続性に関する詳細には立ち入らないが、加藤(2006)の議論と杉本(2009)における文法機能を参考にしながら、移動格の「を」が動詞の要求する項であると判断する²。

² 後述するが、この移動格の「を」について、仁田(1993)では動詞の意味的な要求に基づく必須度の違いが見られるとし、必須的なものと非必須的なものを区分している。

1.2 格助詞「を」の機能における必須度の問題

一方、格助詞「を」の文法機能を、必須格、非必須格という観点から、分析している先行研究も取り上げたい。寺村(1982)によると、「あるコトの表現において、言い換えればある述語にとって、それがなければそのコトの描写が不完全であると感じられるような補語を、「必須補語」(primary complement)、そうでないものを「副次補語」(secondary complement)と呼ぶことにする。」と記述されている。つまり、述語にとって、それとかかわる名詞の格の重要度に程度の差があるということである。また、寺村(1982)では、補語の必須度を判断するために、次の反問誘発の可能性が取り上げられる。

- [illegible]

(9)のように、その要素がなければ不完全な表現になるといったものが必須補語になるわけである。一方、寺村(1982)では、(10)のような文が、必ずしも(11)の反問を誘発するとは限らないと指摘し、述語の下位分類にとっての意味が大きいとされる「誰と」のような補語を「準必須補語」と捉えている。

- (10) 兄ハ5年前ニ結婚シテ、イマ九州ニ住ンデイル (寺村 1982)
- (11) 誰ト結婚シタ? (寺村 1982)

この点に関して、日本語の格における機能を必須度により、区分している研究として、城田(1993)、仁田(1993)、森田(2002)が取り上げられる。

まず、城田(1993)では、格助詞「を」について、副詞格助詞と区別し、文法格助詞としている。また、この文法格助詞の「を」には、「言語の文法構造によって定められ支えられる一次機能」と、「用いられる場であらわれ、語彙的環境によって支えられる二次機能」が存在していると捉えられている。城田(1993)では、他動詞と共起する直接補語を表示するのが文法格としての一次機能であり、意味論的な意味を持って、道筋・起点・持続時間を表して用言を修飾するのが副詞格

としての二次機能であると捉えられている。

城田(1993)の定義によると、道筋・起点(本研究で言う移動格)の「を」を含め、持続時間の「を」は、二次機能としての副詞格になる。これらの二次機能を示す「を」は、意味論的な意味を有し、具体的・語義的なことを表し、副詞に近いと捉えられている。

(12) ユックリ行ク — 山を行ク — 家ヲ出ル (城田 1993)

城田(1993)では、副詞「ゆっくり」は動詞「行く」の様態を限定し、「山を」は行く道筋を、「家を」は出発点をそれぞれ規定する点で、内容的に副詞に近づいていることが捉えられている。また、(13)のような持続時間を示す「を」では、更に副詞性がはっきりしてくることも指摘されている。

(13) 2時間ガンバリ通ス — 2時間ヲガンバリ通ス (城田 1993)

「2時間」と「2時間を」は、共に「頑張り通す」の時間的規定であり、両者の違いは「を」の存否だけである。城田(1993)では、文法格助詞「を」における二次機能の副詞格の存在を認めながらも、これが文法格と副詞の中間に位置付けられることが指摘されている。

一方、仁田(1993)においても、日本語の格を捉えるにあたって、述語との依存関係を中心とした必須度に基づく分析を行っている。仁田(1993)では、文の成立に当たって、動詞が自らの表す動き・状態・関係を実現・完成するために必須的・選択的に要求する成分を「共演成分」、動詞の表す動き・状態・関係の実現・完成にとって、非必須・付加的な成分を「付加成分」として区分している³。

仁田(1993)では、更に、共演成分と付加成分の中間に位置付けられるものについて、動詞からの必須度・要求度の違いに応じて、共演成分の中にも、「主要共演成分」と「副次的共演成分」の区分けを設定している。例えば、(14)と(15)の

³ 仁田(1993)では、当の名詞句が、動詞にあらかじめその生起を指定された共演成分であるかを見極めるテストとして、①主題化、②連体修飾節の主要語化、③分裂分の焦点部化、④付加・削除の制約と取り上げている。詳細は、仁田(1993)を参照。

「を」格名詞は、連体修飾節の主名詞になることができる点で、共に共演成分であると見られる。

(14) 子供達ガ吊り橋ヲ渡ッタ。← 子供達ガ渡った吊り橋

(15) 子供達ガ運動場ヲ走ッテイル。← 子供達ガ走ッテイル運動場

(仁田 1993)

ただし、仁田(1993)では、(14)の「吊り橋」は「子供達が渡った」の不完全さにより「主要共演成分」とし、(15)の「運動場を」は「子供達が走っている」だけで意味的に充足しているので、「副次的共演成分」と捉えている。

以上の研究は、格助詞「を」の用法について、動詞の意味的な要求を考慮した必須度の問題を取り上げて分析を行っている。これらの研究においては、対格の「を」に対する必須度には異論がないが、移動格の「を」などについては必須度の分析においては違いが見られる。この点は、杉本(2009)の指摘のように、移動格の「を」は、構造的・文法機能的に内在格の位置を占めながら、動詞の項として機能することによると思われる。

2. 格助詞「を」の特徴を中心とした研究

ここで、本研究の主な対象である形式名詞と結合する「を」に関する先行研究を概観する。本研究の対象形式の内「中を」、「のを」については、主に杉本(1993)、天野(2007、2010、2011)のように、格助詞の特性を中心とした分析が取り上げられる。一方、「ところを」形式については、格助詞「を」に関する研究が見当たらず複合辞としての観点で研究されているものがあるので3.3で概観する。

2.1 「中を」における格助詞「を」について

2.1.1 杉本(1986、1993、2009)

「中を」形式は、杉本(1986)において、いわゆる状況の「を」として、格助詞「を」の3用法の一つとして位置付けられているものである。

(16) 吹雪の中を山中をさまよった。

(杉本 1993)

杉本(1993)では、状況の「を」(状況補語)に関して、以下のような特徴により、移動格の「を」(移動補語)との類似性が挙げられている。

- (17) i) 状況補語は、何らかの移動を伴う動作を表す動詞としか共起しない。
- ii) 状況補語と移動補語とで曖昧な場合がある。
- iii) 状況補語は、「中」などによって場所化される必要がある。

(杉本 1993)

i)に関しては、状況の「を」の場合、移動格の「を」とは異なり、純粋な移動動詞ではなくても共起できるが、両方の「を」には語彙的な移動性が関与しているという共通点がある。例えば、次の動詞「殴る」は移動動詞ではないので、状況の「を」との共起ができないが、(18b)のように「かかる」によって移動性が付与される場合は、状況の「を」との共起が可能になる。

- (18) a *太郎は友人の制止の中を次郎を殴った。

b 太郎は友人の制止の中を次郎に殴りかかった。 (杉本 1993)

次に、ii)に関しては、(19a)のような「吹雪の中を」が状況の「を」であるか移動格の「を」であるか決定できない場合があるとされている。

- (19) a 桜吹雪の中を歩いた。

b 桜吹雪の中を道を歩いた。 (杉本 1993)

また、iii)では、次のように、「中」という名詞によって状況が場所化されている点を取り上げられる。

- (20) a *吹雪を山小屋を探した。

b 吹雪の中を山小屋を探した。 (杉本 1993)

以上の特徴により、杉本(1993)では、状況の「を」と移動格の「を」を区別す

る必要がなく、状況の「を」が移動格の一種であることを示している。

また、杉本(2009)においては、次のように、移動を伴う動作を想定できない用例についても検討している。

(21) ある峠でマイナス9度の中をトイレ休憩のため15分間立っていたが、…
(毎日00/1/7朝刊)

(22) 値下げによる消耗戦や専門店の攻勢の中を生き抜くには、…
(毎日00/5/5朝刊)

杉本(2009)では、上記の用例について、(23)のような時間の「を」とされる用法との類似性を取り上げ、(21)、(22)の用例は、一種の時間的な移動を表すものと考えている。

(23) a 楽しい時を過ごした。
b 激動の時代を生きた。(杉本 2009)

以上で、杉本(1993、2009)の一連の研究は、状況の「を」(本研究で言う「中を」)を移動格と同一のものと捉えていることが確認される。

2.1.2 加藤(2006)

加藤(2006)では、日本語の「を」格について、格助詞としての用法の記述と分析を行っているが、その内、状況補語の用法(杉本(1993)で言う「状況の「を」」)については、次の3点を検討している。

- (24) ①「吹雪」「雨」など単独では場所性を持たず、場所名詞と解釈されない名詞に「の中」をつけることで、場所性を帯びさせていると見られること。
②対象格や場所格の用法の「を」と共起できる場合があること。
③逆接の意味合いを持つこともあるが、接続助詞的な用法ほど明確ではなく義務的でもないこと。
(加藤 2006:140)

①の指摘に関して、状況補語用法は、(24)のように<出来事性>のある名詞に「の中」を付加することで<場所性>が付与された状況を示すものとし、場所を表す「を」格の用法と連続的であると捉えられている。この点に関しては、(25)、(26)における「雪」は、(25)の「吹き付ける」なら出来事解釈になるが、(26)のように「凍った雪の中を」とすると「凍結した雪の層の内部」という場所解釈になることから確認できる。

(25) 吹き付ける雪の中をひと気の無い一本道を進んでいた。(加藤 2006)

(26) 極地調査隊は、凍った雪の中を進んだ。(加藤 2006)

また、加藤(2006)では、次のように、「を」と「で」の置き換えが可能な点を挙げ、背景的状况を示すと捉えられている。

(27) a 吹雪の中を、東京行きの最終便が富山空港を離陸した。(加藤 2006)

b 吹雪の中で、東京行きの最終便が富山空港を離陸した。(加藤 2006)

この点は、②の特徴に関係していると思われる。加藤(2006)は、背景的状况を示す「中を」は「副詞句に近く、「を」の格助詞の用法から遠ざかっていると考えるのが妥当だろう(加藤 2006:141)」とし、後続する動詞の必須格になっていないと判断している。この点により、(28)の「夕闇が迫る中を」は、経路に存在する状況の叙述になり、場所格の「を」(杉本(2009)で言う移動格の「を」)との共起が可能であると捉えられる。また、加藤(2006)は、場所格名詞句のない(29)の「中を」においても、「移動経路と対照される状況とする解釈はそれほど明確でないであろう。しかし、かといって、場所解釈が行われて、「帰る」という動詞と直接的な意味関係を結ぶ必須格になっているとは言えない(加藤 2006:141)」と指摘している。

(28) 夕闇が迫る中を太郎は一人ひと気の無い一本道を帰った。(加藤 2006)

(29) 夕闇が迫る中を太郎は一人帰った。(加藤 2006)

次に、加藤(2006)では、③については、次のような用例から、接続上中立的な点(逆接の意味合いがない点)を挙げ、状況補語は接続助詞用法と区分され、第三のカテゴリー⁴を想定することを提案している。

- (30) 東京行きの始発便は、そよ風の中を気持ちよさそうに新千歳空港を飛び立った。
(加藤 2006)

2.1.3 天野(2007、2011)

天野(2007、2011)による一連の研究は、「中を」(天野(2011)では、状況ヲ句)について、現代日本語の「AガBヲV」型文が持つ構文的な意味⁵に基づく分析を行っている。

天野(2011)では、状況ヲ句の文について、①直接結びつく他動詞が不在と見える場合がある、②二重ヲ句を許容する、③不自然さを伴うといった逸脱的な特徴を持つため、周辺の現象とみなされてきたことを分析の背景として指摘している。天野(2011)は、次のように、状況ヲ句と「デ」との相違点、「にもかかわらず」との相違点を指摘し、この状況ヲ句が、背景状況格としての機能(加藤 2006)、逆接の意味合いと異なることを示している。

- (31) a 桜の花が舞い散る中で、社長は練習通りに演説した。
b *桜の花が舞い散る中を、社長は練習通りに演説した。(天野 2011)
- (32) a 懸命に思い出そうとするにもかかわらず、社長はとうとう何も思い出せなかった。
b ??懸命に思い出そうとする中を、社長はとうとう何も思い出せなかった。
(天野 2011)

ここで、「AガBヲV」型構文類型に属する文において、「突破する・突き進む・

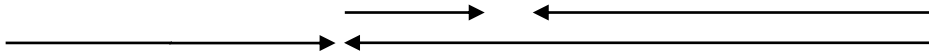
⁴ 加藤(2006)では、状況補語(本研究で言う状況の「を」)を、格助詞的なものでありながらも、動詞の要求する項を導く必須格ではない点で、「非必須格」、「背景状況格」と位置付けている。

⁵ 天野(2011)では、「突破する」などの他動詞を述語とする他動構文型に基づいて、分析を行っている。

詞「を」の範囲にあると捉えている。

- (34) 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、
「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにゃ住所の控えはあるから」
(レー 1988)

例えば、(34)の文においては、「AがBヲV」型文の内、「やめる、遮る、制止する」のような方向性制御系の述語をとる構文型(「AがBを遮る」)を基にする推論が行われ、臨時的な<他動性>の意味解釈ができるようになると指摘している。その結果、(35)のように、動詞句②には臨時的な他動詞「遮る」の解釈が生じ、「のを」句(対象②)は対象のような解釈ができるようになる。

- (35) [手帳に写し取ろうとするのを[手を(対象①) ふった(語彙的意味<フル>) 動詞①]]

(対象<方向>②) (拡張意味<遮ル>)動詞句②

(天野 2011)

ここで、動詞句②を「遮る」と解釈するためには、語用論的な意味「対抗動作性」が必要であるが、これは推論による拡張他動性に基づく意味である。この「対抗動作性」とは、自然な方向性を持つ事態、つまり放置していれば実現できる「を」句の状態へ向かう方向性に意図的に力を加え、その方向性を止めたり、変えたりするという、後続する動詞句における行為を表している。その結果として、(34)の文は(35)で示したように、「Aが Bノヲ(対象②)遮ル(動詞句②)」構文型になり、意味的には「手帳に写し取ろうとするのを」句における事態の進展を「手をふった」の動詞句の事態が「遮る」ことになる。このように、「AがBヲ遮る」構文が持っている他動性に基づいた意味「対抗動作性」により、以下のように、後続動詞句に他動性がないところにも「事態の自然な方向性」と意図的な「対抗動作性」が読みとられるようになる。

- (36) 伸子が「いえ、私は一」と断ろうとするのを、柳は構わずにグラスを満たした。〈断る事態が成立する方向性〉→←〈断らせない〉（天野 2011）
- (37) そのまま出て行こうとするのを、延津賀が、「いいんですよ。おはいんなさいな、まあ。ちっともかまわないんですから。」「いえまた…略…」
 〈そのまま出て行く事態が成立する方向性〉→←〈出て行かせない〉
 （天野 2011）

したがって、天野(2011)では、このような分析により状況ヲ句と同様に、ここでの「のを」は対象としての格助詞「を」の性質を失っていないと捉えられている。

3. 他の特徴に関する研究

ここでは、「中を」、「のを」、「ところを」に関する先行研究の内、格助詞「を」の性質以外の特徴を検討したものを概観する。

3.1 「中を」

3.1.1 佐伯(2013)

佐伯(2013)では、主に「～(の)中を」、「～(の)中」について、コーパスの実例に基づいて分析を行っている。この内「中を」に関しては、「空間的状況」、「時間的状況」という観点から、移動・非移動動詞との共起関係、前件と後件の逆接関係を考慮し、分析を行っている。

まず、「空間的状況」については、以下のように共起する移動動詞を規定し、共起する用例を観察している。

(38) 移動動詞の規定

(a) 格助詞へ/ニを伴う「行く、来る、帰る、戻る」など	(d) 格助詞ヲを伴い起点を表す「離れる」など
(b) 格助詞ヲを伴い経路を表す「歩く」など	(e) 格助詞ヲを伴い到着点を表す「訪れる」など
(c) 格助詞ヲを伴い経由点を表す「過ぎる」など	(f) 格助詞ニを伴い到着点を表す「着く」など
	(g) 上記以外の移動の意味を含む動詞

（佐伯 2013）

ここでの(38)の(g)は「往診する」などのように純粋な移動動詞ではないものを言っている。また、佐伯(2013)は、「生きる」、「頑張る(=生き抜く)」、「しのぐ(切り抜ける)」、「光る」、「響く」のようなものを抽象的な移動を表す動詞と言って、次のような用例を挙げている。

(39) 夕方、薄暗い中を無音で光る赤色灯が、故人を送るともしびのように見えた。 (佐伯 2013)

(40) 戦中、戦後と貧しい食生活の中を生きてきました。 (佐伯 2013)

また、「空間的状况」の場合は、「[前件]にもかかわらず[後件]」と捉えられる逆接の意味合いのように、「[好ましくない状況]にもかかわらず」と解釈されない用例が存在することを示されている。

(41) 式の後、親類たちに見送られ、五色の紙テープを握りしめながら、連絡船のドラが鳴る中を出発しました。 (佐伯 2013)

このように、「～(の)中を」において、「空間的状况」に視点がある場合は、基本的に移動動詞と共起し、逆接関係には限られないという特徴が見られる。

一方、佐伯(2013)では、奥田(1983)の指摘した「移動性でないもの」が共起している次のような文を取り上げ、非移動動詞と共起する理由についても考えている。

(42) ……子供をあずけにいった千代子がこの雨のなかをどんな思いでいるのかと、杉本はぼんやりととおくのおもかげを追っていた。 (奥田 1983)

(42)の「いる」を含めて、次のような用例においては、(43)の「～ずにいる」、(44)の「～ている」が用いられている。

(43) 暑い中を扇風機も付けずにいた。/暑い中を水も飲まずにいた。 (佐伯 2013)

(44) こんな雨の中を彼はテントで一人眠っていたのだ。(佐伯 2013)

佐伯(2013)は、上記の用例を取り上げ、本動詞または補助動詞「いる」は例外的に「～(の)中を」と共起することがあるとし、この場合の「～(の)中を」の状況は、「時間的状況」に視点が置かれていることを指摘している。佐伯(2013)では、(43)、(44)の「中を」の文に「いる」が用いられていることは、「それぞれの状態が持続することを表し、示された状況の間ずっとその状態が続いていたと解釈できる(佐伯 2013:62)」と述べられている。

また、(45)のように「時間的状況」の方に視点があっても、前件と後件が逆接関係にない場合には、「～(の)中を」が使いにくいことも指摘されている。

(45) 子育ての重要性が叫ばれる{中の/*中を}、「学童保育の充実」を選挙公約に掲げる首長も多く、公設学童保育は増加傾向にある。(佐伯 2013)

以上で、佐伯(2013)では、「時間的状況」に視点が置かれている場合は、本動詞・補助動詞「いる」との共起、逆接関係が現れるという特徴が見られると捉えられている。

3.2 「のを」

3.2.1 レー(1988)

レー(1988)の研究は、主に連体修飾節としての「の」節の分析を行っているものであるが、その内、本研究の対象となる「のを」に関しては、「対比関係の連体節」として分類している。

レー(1988)では、「の」節の分類にあたって、(46)のように名詞化における「の」、「こと」の併用の可能性(波線表示)、「の」節内の「が-の交替規則」(下線表示)などの現象を検討し⁷、「補語としての連体節」と「事態顕述の連体節」を分けている。

⁷ レー(1988)では、更に二つの「の節」が助詞「と」によって結び付けられるか、「まで」のような副助詞によって取り立てられるかというテストを行って、「補語としての連体節」と「事態顕著の連体節」の違いを見ている。詳細は、レー(1988)を参照。

(46) a また雑文欄に春山行夫/が/?の/『峰の小舎の生活』という随筆を書いている/の/*こと/を読んだ。

b また雑文欄に春山行夫/が/の/『峰の小舎の生活』という随筆を書いている/の/こと/を思いだした(知らせてもらった)。

(レー 1988、下線、波線は筆者)

レー(1988)では、(46b)の文は「補語としての連体節」文であり、「か-の交替」が可能であり、波線の「の」(また「こと」)は、実質的な名詞と同様に振る舞っている。一方、(46a)のような「事態顕述の連体節」文における波線の「の」は、「が-の交替」ができず、名詞としての性質(名詞性)が低くなっていると捉えられている。

この「事態顕述の連体節」は、更に「縁合関係の連体節⁸」と「対比関係の連体節」に分類されるが、本研究の対象になる「の」節は、「対比関係の連体節」における「のを」を伴う場合である。次の用例を見られたい。

(47) 二人がそれを写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにゃ住所の控えはあるから」

(レー 1988)

レー(1988)は、上記の「対比関係の連体節」の文において、先行の底部⁹がいわば「無形化」しているので、この場合の「を」は、格関係表示機能より、「の」と結合して「のを」という形で接続助詞に近い機能を持つと捉えている。また、

⁸ レー(1988)は、縁合関係の連体節について、「主文と連結的に関係づけられ、主文で叙述される(先行の)底部が表すものごとを、特定の一局面の中で、つまり静在的ではなく動態的に捉えるという言語主体の表現姿勢を反映する機能を持つものである(レー 1988:70)」と記述している。縁合関係の連体節は更に、i)のような「描写関係の連体節」とii)の「伝達関係の連体節」と分けられる。詳細は、レー(1988)を参照。

i) 子供があとからついてこようとするのを、彼女は叱った。

ii) 当時、大本営報道部にいた将校が戦後、発表のウソを認めて「自分の前半生は罪万死に値する」と書いているのを読んだことがある。(レー 1988)

⁹ 主要部(Head)とも言う。例えば、「太郎は花子が昨日リンゴを皿の上に置いておいたのを取った。」のような文において、主節動詞「取る」の実質的な目的語である「リンゴ」が「の」節の主要部あるいは底部である。

(48)のような用例においては、「のを」の後ろに「気にせず」のような表現が省略されている可能性を考えながらも、そのような表現が必要ではないと指摘している。

(48) 素人では無理だと経営者が言うのを、真佐子が頼んでこの店に入れてくれたのだ。
(レー 1988)

このような「対比関係の連体節」における「のを」は主文と補文において、一種の対立関係を表示する機能を持つと考えられる。また、レー(1988)は、次のような「のに」の接続機能と、「のを」における接続機能の違いも検討している。

(49) また、七万二千五百円入りの札入れを前夜蒲団の下に自分が入れたのにそれがなくなっていたため、…
(レー 1988)

レー(1988)によると、「「のに」は「の節」を主文の叙述内容を包む成分へ係らせる接続の機能を働く^マのに対し、「のを」は「の節」を主文の叙述内容の述語へ係らせる接続の機能を果たすと言えよう(レー 1988:87)」と述べられている。例えば、レー(1988)では、(50a)で「のを」が「見習って」に係るのに対し、(50b)では「のに」が「という」に係ると指摘している。

(50) a こちらは、歩き方が早すぎるのではないかと反省しているのを、先方は見習って早く歩きたいという。
b こちらは、歩き方が早すぎるのではないかと反省しているのを、先方は見習って早く歩きたいという。
(レー 1988)

以上で、レー(1988)における「のを」の分析は、「の」節内の先行底部の無形化により、格関係表示機能と名詞性の喪失が起こって、「のを」が一種の対立関係を表す接続機能に近くなる点が主張されている。

3.2.2 加藤(2006)

加藤(2006)は、主に対象格・場所格の格助詞「を」について議論しているが、その内、「のを」、「ところを」形式に関しては、次のような用例を検討し、接続助詞用法を持つ複合辞として捉えている。

(51) 使い方がわからないのを適当にいじっていたら、ついに動かなくなってしまう。
(加藤 2006)

(52) 東も西もわからないのを気の向くままに歩いていったら、いつのまにか駅に出た。
(加藤 2006)

上記の文における「を」が接続助詞的であることは、次のように動詞句の項としての「を」格名詞句が共起することからも考える必要がある。

(53) 使い方がわからないのを適当に兄のパソコンをいじっていたら、ついに動かなくなってしまった。
(加藤 2006)

(54) 東も西もわからないのを気の向くままに大通りを歩いていたら、いつのまにか駅に出た。
(加藤 2006)

加藤(2006)は、(53)、(54)は若干の不自然さはあるが、不適格と言うほどではないと判断し、次のように連用修飾要素を長めにするとうる容度が上がることも指摘している。

(55) 使い方がわからないのを、手当たり次第にソフトを立ち上げるなどしていい加減に兄のパソコンをいじっていたら、ついに動かなくなってしまった。
(加藤 2006)

(56) 東も西もわからないのを、迷ってしまったら誰かに助けてもらえばいいだろうと足の向くまま気の向くままに大通りを歩いていったら、いつのまにか駅に出た。
(加藤 2006)

上記のように、二重ヲ格の共起については、「のを」の「を」と後の「を」が異

なる意味格¹⁰であっても両者が近い位置に存在すると、不自然さを免れないことで、(55)、(56)のように両者の「を」の間に距離を長めにした表現により、成立していることが確認できる。

加藤(2006)においては、このような文の成立から、この「のを」における「を」は、格助詞とみなすより、接続助詞として扱うのが妥当であるとし、更に以下の内容を検討している。

まず、加藤(2006)は、承接上の特性¹¹を取り上げて、接続助詞としての「を」は、節を名詞化する要素である「の」、「ところ」などの形式名詞を伴う一方、後続節との関係を示す「接続」機能があるという点を指摘している。

- (57) ものすごい強風が吹いているのを、東京行きの最終便が離陸しようとしている。
(加藤 2006)

加藤(2006)では、(57)の場合、「のを」が接続助詞「のに」、「にもかかわらず」と置き換え可能な意味になり、節と節との関係を提示していると見て、「接続」の機能を有していると判断している。また、「を」が接続助詞的に用いられる場合には、(58a)のように逆接の意味合いが生じる点も指摘している。

- (58) a 先方も、忙しいところを、わざわざこちらへ出向いてくれたんだ。
b???先方も、時間があるところを、わざわざこちらへ出向いてくれたんだ。
(加藤 2006)

加藤(2006)は、以上のことをまとめて、接続助詞としての「を」が逆接という機能を持つ一方、形式名詞に承接する点では、一般的な接続助詞とは異なり、「のを」、「ところを」のような複合辞としての接続助詞と判断している。

¹⁰ 加藤(2006)では、「同一の動詞句で同一の意味格が複数個存在することは、論理的に妥当性を欠くと考えられる(加藤 2006:137)」と述べられている。

¹¹ 加藤(2006)では、「太郎は有能だが」、「花子は優秀だから」などにおける接続助詞「が」や「から」は、終止形に接続すると指摘しながらも、構造上は節についていると見ている。一方、「を」は意味的に接続助詞に相当する働きを持っている場合でも終止形には承接せず、「の」、「もの」、「ところ」などの形式名詞を伴うことを指摘している。

3.3 「ところを」

本研究の対象である「ところを」については、複合辞の研究として意味と用法の記述が行われている森田・松木(1989)と、形式名詞「ところ」における意味を分析した田中(1996)がある。順に概観する。

3.3.1 森田・松木(1989)

森田・松木(1989)では、この「ところを」形式は、逆接条件を表す接続助詞の働きをするものと捉えられている。森田・松木(1989)によると、「ところを」は「活用語の終止形を受けて、成立寸前の事柄を表す前件が、その事態の自然な進展を何かに妨げられて、予期に反する事態を表す後件に結びついたことを示す。(森田・松木 1989:118)」と記述されている。森田・松木(1989)では、次の用例について、前件の状況のある時に後件の状況が重なったり、介入したりするものと捉えられている。

(59) 「郵便函を見に行って帰ってくる処を兄に見つけられたのです。」

(森田・松木 1989)

一方、(60)のように、前件の状況だけで後件が起こらないことになっている用例も挙げられている。

(60) 「きょうは、お忙しいところを、たいへんありがとうございました。」

(森田・松木 1989)

上記の用例に関しては、連続的であり、文末のアスペクトを表す「(する)ところ」との関連性も考えられることが指摘されている。

(61) ちょうど講演が始まるところでした。

(森田・松木 1989)

また、以下のような用例も取り上げられている。

(62) もうすこしで優勝するところを、ミスして負けました。

(63) がけから落ちるところを、運よく助かりました。 (森田・松木 1989)

3.3.2 田中(1996)

田中(1996)では、形式名詞「ところ」が文中に現れるいくつかのタイプについて、それらの持つ意味と機能を考察している。田中(1996)は、「ところ」の用法において、節末・句末成分として接続助詞に相当する<副詞節>的な用法¹²、<補文節¹³>の一成分(補文標識)として、形式名詞「こと」、「の」と類似する性格を持つものという大きな二つの用法を設定している。この内、本研究の対象になる「ところを」形式については、<補文節>としての「ところ」節として捉えている。ここで、更に「ところを」の用法を一次的用法の「トコロヲ①」と二次的用法の「トコロヲ②」と分類し、それぞれの特徴を検討している。「トコロヲ①」については、(64)のような用例で用いられ、田中(1996)によると、「特定の場面における「捕捉」「拘束」といった外発的な起因による「旧事態の中断的结果の呈示」という大枠の意味づけ(田中 1996:21)」がなされている。

(64) 理美は主人がホテルに若い女と入るところを見てしまった。(田中 1996)

この「トコロヲ①」は、動詞の目的語として機能するものであり、本研究の対象ではないため、詳細には立ち入らない。一方、「トコロヲ②」については、次のような用例が挙げられている。

(65) 目覚ましを7時にセットするところを9時にセットしてしまったために授業に遅刻してしまった。(田中 1996)

(66) 食前に飲むところを食後に飲んでしまったために薬が効かなかった。
(田中 1996)

¹² 田中(1996)では、「近づいてみたところ、それは小さな星の形をしていた。」や「改札口を出たところで、うしろから不意に声をかけられた」などのような用法が挙げられている。用法の分類については、田中(1996)を参照。

¹³ 田中(1996)においては、「<補文節>とは従属節の中で述語(の意味)を補う働きをするものと解釈する」と述べられている。

田中(1996)によると、この「トコロヲ②」では共通して「本来ならば当然～すべきであるのに」といった、逆接的な表現が意図されており、後件は「間違えて」、「うっかり」などの副詞的意味を含意し、過失などの原因が示されていると述べられている。また、この「トコロヲ②」が「～のに」、「～のが」と類似している点で、「接続助詞に近い性格が感じられる」とも指摘されている。

一方、ここでの「を」については、「XヲYニ」という「付帯状況的」な性格が見られると捉えている。

- (67) a 7時(にセットするの)を9時にセットする(ことにする)
b おおじしん(と読むの)をだいじしんと読む(ことにする) (田中 1996)

田中(1996)では、「トコロヲ②」の「を」は(67)の用例における「XコトヲYコトニスル」という枠組みの変種(「Yコトニスル」を省略したもの)と考えられ、目的格というより「屈折格」、「転移格」と称してもよい性格のものと捉えられている。また、対立的、対比的な事態を結果的に示すことで、節内に「本来」、「順調にいけば」などの副詞句を伴っている用例も取り上げられている。

- (68) 本来なら留学できるところを/が、親の反対で実現できなかった。
(69) 順調にいけば課長になるところを/が不祥事を起こして左遷された。
(田中 1996)

以上で、田中(1996)では、形式名詞「ところ」の文中での意味を捉えながら、「を」の性質も検討し、「ところを②」における接続助詞的な性質について述べられていることを確認した。

4. 問題の所在と本研究の立場

この節では、本研究の主な分析対象となる形式と用例を取り上げて、これまで概観した先行研究の問題点について検討し、本研究の立場を示す。

まず、それぞれの形式には、格助詞「を」の本来の機能として用いられず、他の機能で用いられるものが存在することを指摘したい。例えば、「中を」形式で

は、杉本(1993)で述べられた「何らかの移動を伴う動作を表す動詞」との共起するという特徴、天野(2011)による「逆境－移動・対抗動作性」という他動的な関係という解釈では捉えきれないものがある。

- (70) 二人の女性が感心して見つめる中を、ジョシュアは三皿も平らげてから椅子に反り返った。 [天使の自立 1996]

(70)の「中を」は、「平らげる」と「反り返る」のどちらにかかるかが不明であり、どちらの動詞も移動を含んだものではない点、また、「二人の女性が感心して見つめる中を」という状況が出来事・動作の実現を阻む<逆境>の意味になっていない点で、杉本(1993)での移動格、天野(2011)での対格としての性質が見られない。

また、次の「のを」節に関しては、天野(2011)が指摘した「AがBヲ遮る」という他動関係に基づく分析がどこまで有効なのかは検討の余地がある。

- (71) たとえば、ソニーがはじめてテレビに取り組んだとき、ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのを、うちだけはクロマトロン方式をとったのです。 [わが友本田宗一郎 1992]

(71)の「のを」については、後続節の事態が「のを」節事態を「遮る」という解釈が可能なのかという問題、「のを」節事態が一方的な働きかけ受けるかという問題があり、対象としての機能が疑わしいと考えられる。

以上の(70)の「中を」、(71)の「のを」は、格助詞としては機能せず、格助詞「を」の性質をもって分析を行った先行研究の捉え方では説明できないものである。したがって、形式全体が持つ意味的な特徴と機能に基づいて検討してから、後接する「を」の性質に関して分析を行うことが必要になる。

一方、本研究で扱う「ところを」節については、複合辞としての接続助詞用法と捉えた先行研究(森田・松木 1989)があった。また、「ところ」に後接する「を」については、「～を～にする」のような形式で「～にする」が省略されたと捉えた田中(1996)の指摘があった。

(72) おかげで陛下のご勘気にふれて、一時は二郎さまの御身もあやうくなる
ところを、太上老君があいだにはいつて事をおさめられたとか。

[乱紅の琵琶 2001]

しかし、(72)の「ところを」の後の省略したものを特定するのは簡単ではない。したがって、本研究では、(72)の「ところを」節内の特徴に注目しながら、後接する「を」に関しては格助詞機能の希薄化といった観点から分析する。

以上の問題点は、従来の分析では説明できない例外的な現象であると思われるが、このような例外的なものに分析を試みるに先立って、典型的な格助詞「を」について考えたい。

本研究では、格助詞の本質を名詞と動詞との文法的・意味的な関係を表すマーカーと捉え、「を」の格助詞としての機能は杉本(2009)で捉えられている「対格」、「移動格」を典型的なものとみなす。つまり、動詞の必須格(項)として機能する場合を格助詞「を」の典型的な使い方と捉える。また、城田(1993)で言われるところの格助詞「を」の二次機能である副詞格の存在を認める¹⁴。その理由としては、後述するが、二重ヲ格の共起が可能な場合が存在する点で、動詞との関係における必須度、機能の違いが見られる点が挙げられる。

一方、本研究の対象である形式名詞と結合する場合の「を」は、動詞との語彙的・文法的な関係だけでは捉えきれない点で、基本的に格助詞としての「を」の典型から逸脱しているものと考えられる。ただし、これらの形式においては、先行研究の指摘のように格助詞「を」の性質をもって分析可能なものと、(70)～(72)のように格助詞「を」の性質だけでは分析できないものがそれぞれ存在している。したがって、第3章～第5章では「中を」、「のを」、「ところを」における各用法の特徴と機能的な違いを分析し、格助詞用法と他の用法の区分けを試みる。

また、それぞれの形式で捉えた格助詞用法と他の用法では、次のような違いがあることも検討する。例えば、(73)の「のを」文は、「ガノ交替」現象¹⁵におい

¹⁴ ただし、本研究では、移動格「を」に関する城田(1993)の捉え方(二次機能としての副詞格)には従わない。なぜなら、移動格「を」は動詞の必須項として機能すると認められるためである。

¹⁵ 天野(2012)では、「ガノ交替」現象を検討し、i a)の「の」節には名詞性が存在し、i b)の副詞

て、(a)の文と(b)の文の「の」に名詞性の違いが見られる場合がある。

- (73) a 二人{が/?の}それを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、
b ソニー以外は世界中{が/*の}みなシャドウマスク方式だったのを、うちだけはクロマトロン方式をとったのです。

(73a)の「のを」節は、天野(2011)の指摘のように他動構文型における対象の解釈が可能なので、「の」節の名詞性も残存していることになるが、(73b)の「の」節は(73a)とは異なって、名詞性が低くなっている。つまり、両者の名詞性の違いにより、後続する「を」の格助詞性も違いがあることが予測される。第6章では、このような現象が、「中を」、「ところを」形式における各用法にも見られることを指摘し、各用法における格助詞「を」の性質の希薄化に程度性が存在することを議論する。

本研究では、以上のような観点から、格助詞「を」の典型から逸脱した形式名詞と「を」が結合した形式において、格助詞の希薄化の程度性が見られることを指摘した上で、格助詞性の希薄化が進んでおり、もやは格助詞機能をなくしている形式については複合助詞化したものと捉えられることを議論する。

節「ので」は名詞性が低いと判断している。

- i) a その日も、アドリアーナが/の送ってきてくれたのを、まだ時間があるから、このザッテレの川岸を散歩しようということになったのだった。
b その日も、アドリアーナが/??の送ってきたくれたので、夜道が怖くなかった。
(天野 2012)

第3章

移動格の「を」と「中を」形式におけるずれと機能変化について

1. はじめに

格助詞「を」には、移動動詞と共起し、移動場所を表す移動格「を」の用法がある。

(1) 太郎が公園を走った。

一方、格助詞「を」の用法には、(2)のように、「中を」という形式をとり、「走る」のような移動動詞と共起すると共に、「探す」のような非移動動詞とも共起するものがある。

(2) a 太郎が雨の中を走った。

b 吹雪の中を山小屋を探した。 (杉本 1993)

(2)の「中を」は、いわゆる状況の「を」であり、杉本(1993)では、何らかの移動を伴う動作を表す動詞(純粋な移動動作とは限らない)としか共起できないと指摘されているものである。この点により、(2b)のような純粋な移動動詞ではないが、動作自体に移動性が含まれている「探す」のような動詞とも共起できる。

また、次の用例も見られたい。

(3) *太郎は友人の制止の中を次郎に殴った。

(4) 太郎は友人の制止の中を次郎に殴りかかった。 (杉本 1993)

(3)において移動を含まない動作を表す動詞「殴る」は、(4)の「殴りかかる」のように移動を表す表現が加わると、状況の「を」と共起可能になる。このように、状況の「を」における共起制限は、共起動詞の「移動性」がかかわっていることになる。上記の移動格・状況の「を」の用法における共通点は、動詞(移動動詞、何らかの移動を伴う動作を表す動詞)による共起制限がかかわっているということである。

一方、移動格・状況の「を」の文には、次のような用例がある。

(5) 私は支援者が現れるまでの3年間を一人で検察と戦ってきた。

(高井 2012、下線は筆者による)

(6) 淡い六日の月光の中を、向こうの谷をしげしげ見つめているのにあった。

[国語総合 教育出版株式会社 2006]

(5)の「を」は、「2時間を過ごす」という文における「2時間を」とは異なり、動詞の語彙的な依存関係によって、生起するものではない。例えば、(5)では、「??3年間を戦う」であれば、文の許容度が低くなる点で、ここでの「を」の生起条件は、動詞「戦う」との関係だけではなく、他の要因があると思われる。また、(6)の「中を」と共起する動詞「見つめる」は、(2)と(4)における移動動詞・何らかの移動を伴う動作を表す動詞ではない。つまり、状況の「を」の成立条件として取り上げられる「何らかの移動を伴う動作を表す動詞」との共起なしで、文が成立している¹。

(5)の「を」と(6)の「中を」は、動詞との共起制限がかかわっておらず、移動格「を」の時間的用法と(2)の状況の「を」とは、生起条件が異なっていると

¹ ちなみに、本文の(6)の文は、「中を」と後続動詞句の関係が、第2章で述べた天野(2011)における「逆境—移動・対抗動作性」の意味にもなっていない。

考えられる。また、この点は(5)と(6)における助詞「を」が、別の機能を持つものとして捉えられる可能性も示唆する。

本章では、(2)と(6)の「中を」、また、(5)の時間的な移動を表す「を」の意味的な性質と文中での働きを検討し、(1)のような移動格「を」の用法とどのように異なっているかを議論したい。

2. 先行研究と問題の所在

2.1 期間を表す「を」

期間を表す「を」の文の用例は、次のようなものである。

(7) 楽しい時間を過ごした。 (益岡・田窪 1987)

(8) 海外での3年間を暮らす。 (森田 2002)

これらの「を」は、城田(1993)では、「持続時間」を表して用言を修飾する「を」格の二次機能としての副詞格²と捉えられているものである。

(9) 二年間ヲガンバリ通す。 (城田 1993)

一方、高井(2012)では、期間を表す「を」について、次のように、時間の経過を表す動詞以外にも共起可能な用例を取り上げ、その生起条件を検討している。

(10) ジョンは世間に認められるまでの十数年間をずっと両親に甘えていた。 (高井 2012)

高井(2012)では、期間ヲ句の生起条件として、「育つ」、「進む」のような共起動詞の「継続性³」だけではなく、(11b)のようにテクル形などのアスペクト要

² 城田(1993)では、格助詞「を」において、「文法格」として直接補語を示す一次機能、「副詞格」として道筋・起点・持続時間を示す二次機能があると述べられている。このような「副詞格」は、文法的関係ではなく、動詞との意味論的意味を持って、具体的・語義的であり、副詞に近くなっていると指摘されている。詳細は、城田(1993)を参照。

³ 高井(2012)によると、瞬間的な動作である「立つ」は、「継続性」を持たないため「??ジョンは

素の共起、(11b)、(12b)のように副詞成分などの介在が関係していることを指摘している⁴。

- (11) a ??親を亡くした子供達は戦後の混乱期を育った。
b 親を亡くした子供達は戦後の混乱期をこの町で育ってきた。
- (12) a ??兵士達は嵐のように爆撃が続く数時間を進んだ。
b 兵士達は嵐のように爆撃が続く数時間をただひたすら西に進んだ。
- (高井 2012)

2.2 状況を表す「中を」

本章の1節では、状況の「を」における共起制限として、動詞の移動性という制約が働いていることを、杉本(1993)の分析から確認した。しかし、状況の「を」文には、次のように動詞の移動性という共起制限が見られない用例が存在する。

- (13) 社長退陣の怒号が響く中を、社長は練習通りに演説した。 (天野 2011)

天野(2011)では、(13)のような用例を捉えるために、構文文法の立場により、「AガBヲV」型文が持つ類型的な意味に基づく分析を行っている。この分析によると、「AガBヲV」型文の中でも、「突破する」のような他動詞述語の構文をベースとした意味「移動・対抗動作性⁵」が、(13)のような文に写像することになる。すると、この文は、(14)のように「を」をとらない「演説する」を含んだ述語句が、全体的に「突破する」のような他動的な解釈になる。

観客が賞賛の拍手を送る数分間を立った」のように、期間ヲ句と意味的に合致しにくいと述べられている。ただし、「育つ」、「進む」のような「継続性」を持つ動詞との共起についても、動詞の語彙的な「継続性」以外の条件により、期間ヲ句との共起が成立することが指摘されている。

⁴ 高井(2012)では、期間ヲ句の生起条件として、「期間ヲ句は動詞の投射とmergeしなければならない」とし、期間ヲ句は動詞語幹単独ではなく、[動詞語幹+テイル]、[NP+動詞語幹]、[NP+動詞語幹+テイル]のいずれかとmergeした場合に容認度が高くなると指摘している。

⁵ 天野(2011)では、本文の(13)の動詞句は、ヲ句と直接結びつく他動詞を含んでいないが、「AガBヲV」構文をベースとした類型的意味が類推によって写像し、臨時的な他動性の意味(語用論的な意味)を表わせることになると捉えられている。

2.3 問題の所在と「中を」の用法区分

ここでは、先行研究の分析において再考が必要な点と本稿の立場について述べる。まず、期間の「を」(以下、「期間ヲ」と呼ぶ)に関する高井(2012)の指摘は、期間ヲ文における副詞成分の介在、アスペクト表現の共起については観察されている一方、期間ヲとは何か(つまり、格としてどのように位置付けられるか)については十分な説明がなされていないと思われる。先行研究における期間ヲの位置づけについては、城田(1993)のように、持続を表す動詞の「持続時間」を示す格助詞「を」の副詞格用法⁷と捉えられているものがある一方、仁田(1993)のように、動詞の語義的なあり方から共演成分⁸としての「経過域(時間)」(本研究で言う「経路(時間的)」)用法と捉えられており、必須的な成分として位置付けているものもある。一方、これらの「を」が、高井(2012)の指摘のように、更に広い範囲の動詞と共起できることは、(6)の「中を」文と似ている点に基づいて考える必要がある。この点に関しては4節で述べる。

また、状況の「を」における先行研究(杉本 1993・2009、天野 2011)では、主に格助詞「を」の性質に注目し、文の特徴と「中を」形式の位置づけが、杉本(2009)では移動格の「を」と同一なものとして、天野(2011)では対格の性質として、それぞれ分析されている。一方、本研究では、形式名詞「中」と「を」の結合により、格助詞としての「を」の性質に「ずれ」が生じることを論じる。その理由は、形式的には名詞と格助詞の関係になっている「中を」が、全体的にはモノとしての性質ではなくコトとしての特徴を持ち、これを、動詞との格関係が緩くなるきっかけをもたらす「格くずれ」現象⁹とみなすことができるからである(詳細は3節で論じる)。

また、「中を」については、次のように、用法の区分けが必要であると思われる

⁷ 城田(1993)は、本研究で言う期間ヲについて、「2時間ヲガンバリ通ス」のような文における持続時間を表す用法とし、格助詞「を」の二次機能である副詞格として捉えている。

⁸ 仁田(1993)における「共演成分」とは、文の成立にあたって、動詞が自らの表す動き・状態・関係を実現・完成するために必須的・選択的に要求する成分のことを言う。

⁹ 小野谷(1995)によると、「格くずれ」とは「意味統語論的なレベルにおいては、連語間の意味的なむすびつきがゆるくなること」により、対象的なむすびつきから、規定的なむすびつき、さらには状況的なむすびつきといった、むすびつきの質に変化が生じることでありとしている。また、機能統語論的なレベルでは、対象語として機能していたX格の名詞句における名詞の語彙的な意味の変更により、状況語として機能することで、結局、格助詞ではなく、つきそい文(従属節)などへ変わっていくことでありと指摘されている。

る。(17)における「中を」は、杉本(1993)の指摘のように、移動動詞・何らかの移動を伴う動作を表す動詞(以下、「移動性動詞」)との共起により生起している一方、(18)の「中を」は、上記の動詞との共起に限らず、また天野(2011)が指摘した<逆境><移動・対抗動作性>といった関係にもなっていないので、(17)とは生起条件が異なっている。

(17) 桜吹雪きの中を公園を歩いた。

(18) 桜吹雪きの中を落ちる花びらを(ゆっくりと)眺めていた。

この点に関連して、佐伯(2013)では、移動動詞・非移動動詞と共起する「中を」について、「空間的状况」、「時間的状况」といった観点を持って捉えている。佐伯(2013)によると、(19)のような文について、本動詞または補助動詞「いる」と共起する「中を」は、時間的状况に視点が置かれていると述べられている。

(19) 暑い中を扇風機も付けずにいた。/暑い中を水も飲まずにいた。

(佐伯 2013)

本研究では、佐伯(2012)の指摘を参考にし、「中を」を、(17)では空間的用法(以下、空間ナカヲ)として、(18)では時間的用法(以下、時間ナカヲ)として区分する。また、時間ナカヲの詳細については、佐伯(2013)とは観点を変えて、申(2014)の議論に基づいて考察し、期間ヲとの違いを議論する。

3. 移動格の「を」と空間ナカヲのずれ

この節では、空間ナカヲにおいて、移動格「を」の用法としての性質を認めながらも、両者の違いに関する詳細を検討する。

3.1 空間ナカヲと経路の「を」における類似性

まず、空間ナカヲが、具体的にどのように移動格「を」の意味にかかわるかを検討する。次のような空間ナカヲは、「から」との交替が可能であり、移動格「を」の起点の意味として解釈される可能性がある。

- (20) a 暗闇の中を光の当たるところまで歩いた。
 b 暗闇の中から光の当たるところまで歩いた。

ただし、(20a)、(20b)の意味が同一であるかは疑わしい。この点は、三宅(1995)が指摘したように、起点の「を」は、(21)のように着点「に」と共起できないが¹⁰、(22)の空間ナカヲの場合は、着点の「に」と共起が可能であることから確認できる。この点は、(23)の実例からも確認できる。

- (21) 太郎が部屋(*を／から)庭に出た。 (三宅 1995)
 (22) 暗闇の中(を／から)光の当たるところに出た。
 (23) 何はともあれ雨の中を、西苑の、団地を改装した外国人参加者専用の宿泊センターにたどり着き、 [ジェンダーの罫 2001]

加藤(2006)の指摘のように、経路の「を」は、着点との共起制限にかからないので、空間ナカヲは意味的に、移動格「を」の経路の用法に近いと思われる¹¹。

- (24) 太郎は階段を地下室に下りた。 (加藤 2006)

また、宇都宮(1998)においても、(25)の文の意味解釈として、(25a)では、「次郎がやってきた」出来事が起こった状況が「暗闇の中」になっているが、(25b)では、「次郎がやってきた」出来事が「暗闇の中を」全体に渡って行われていることを指摘している。この点から、(25b)における空間ナカヲは、経路のように読みとられると考えられる。

¹⁰ 三宅(1995)では、「起点をも同時に含意する場合は、ヲ格を使うことができない」という一般化が提案されている。

¹¹ この点、杉本(1993)においても、i)のように、状況の「を」が起点をとる移動動詞「出る」と共起する場合における「人込み」の解釈が指摘されている。

i) 人込みの中を店を出た。

つまり、「店」の中が「人込み」か、「店」の外が「人込み」か、「店」の中も外も人込みかの場合が考えられるが、i)において最も自然な状況は、「店」の中も外も「人込み」である場合であると捉えられる。したがって、杉本(1993)では、起点を取る移動動詞であっても、状況の「を」は経路的であると捉えられている。

- (25) a 月も出ていない暗闇の中次郎がやってきた。
 b 月も出ていない暗闇の中を次郎がやってきた。 (宇都宮 1998)

3.2 経路の「を」と空間ナカヲのずれ

一方、空間ナカヲは、経路の「を」用法との意味的な類似性にもかかわらず、いくつかのずれが存在する。以下では、経路の「を」と空間ナカヲにおけるずれを検討する。

3.2.1 出来事性+形式名詞「中」の組み合わせと空間の捉え方のずれ

経路の「を」と空間ナカヲにおける大きな違いは、実質名詞をマークするか形式名詞「中」をマークするかという点である。経路の「を」では、「グラウンドを歩く」のように、移動が行われる場所が「グラウンド」のような実質名詞で示されている。つまり、経路の「を」では、「グラウンド」が経路としての実質的な空間と捉えられている。一方、空間ナカヲで捉えられる空間は、経路の「を」とは違って、実質名詞としての空間ではなく、「雨」、「吹雪」のような出来事名詞¹²と形式名詞「中」により示されている。杉本(1993)においては、この点に関して、次のように、「吹雪」が「中」によって場所化されていることが指摘されている。

- (26) a *吹雪を山小屋を探した。
 b 吹雪の中を山小屋を探した。

また、本来の形式名詞「中」は、それ自体が自立的に名詞句として成立せず、修飾(規定)成分を義務的に受けるものであるが¹³、特に、空間ナカヲの「中」を

¹² 影山(2010)では、名詞の中の出来事性を捉えるために、名詞の中に存在する語彙的なアスペクトを検討し分析を行っている。また、語彙的なアスペクトを有し、時間的展開を含む名詞群を捉えて、次のように継続的なアスペクトを持つ名詞群を示している。詳細は影山(2010)を参照。

i) 継続的アスペクトを持つ名詞

三日間の{国際会議/遠足/不在/晴天}

五年間の{不況/内縁関係/圧政/冷戦}

(影山 2010)

¹³ 村木(2012)では、形式名詞の特徴として、「①語彙的(実質的)意味を持たない。②補語になりうる。格の体系をそなえている。③原則として、規定成分を義務的にうける。」とし、実質名詞と区

修飾する成分においては、加藤(2006)が指摘したように、出来事性の存在が必要である。加藤(2006)によると、状況の「を」の用法では、「Aの中を」におけるAの部分(節を含めて)に「できごと性」があることが指摘されている。加藤(2006)では、次のように、同じ「雪」であっても、(27)のように「吹き付ける雪の中を」の場合は出来事としての解釈であるが、(28)のように「凍った雪の中を」とすると「凍結した雪の層の内部」という場所解釈になると捉えられている。

(27) 吹き付ける雪の中をひと気のない一本道を進んでいった。

(28) *凍った雪の中を、事前に決めておいたルートを進んだ。 (加藤 2006)

上述した杉本(1993)、加藤(2006)の指摘から「中」による「場所性」、その修飾部分における「出来事性」を考えると、空間ナカヲにおける空間の捉え方が確認できる。つまり、この「出来事+中」による空間は、「道」、「グラウンド」のように実質的な空間を指すわけではなく、出来事が行われる空間の範囲¹⁴が抽象的に捉えられている。本研究では、空間ナカヲにおけるこのような空間の捉え方を「抽象的空間性」という特徴として捉える。

以上から、空間ナカヲと経路の「を」には、形式的に「<(出来事の修飾を受ける)形式名詞>/<実質名詞>」の対立があり、その対立が空間の捉え方における「<抽象的空間性>/<実質的空間性>」というずれに関係していると考えられる。

3.2.2 共起動詞のずれ

ここでは、上述した空間ナカヲと経路の「を」における空間の捉え方のずれと、両者の共起動詞のずれとの相関について考えたい。この点に関しては、小野谷(1995)が指摘した「格くずれ」現象との類似性が見られる。小野谷(1995)では、次のように、(29a)の単文から、連体的複文のb~dの順へ、それぞれの段階におけ

別されると記述している。

¹⁴ 杉本(1993)でも、「中」に「範囲限定」の働きがあると指摘している。例えば、i)の「人込み」は「歩く」行為が行われる一定の範囲の場所として捉えられるが、ii)では「人込み」と表現された複数の場所を「歩く」との解釈になる。

i) 人込みの中をあちこち歩いた。

ii) 人込みをあちこち歩いた。

る格くずれを捉えている¹⁵。

- (29) a 私はデパートで、友人に会った。
b 私はデパートで、買い物をしている友人に会った。
c 私はデパートで、友人が買い物をしている場面に会った。
d 私はデパートで、友人が買い物をしているのに会った。

(小野谷 1995)

小野谷(1995)では、格くずれにおける統語的な特徴として、連体修飾構造の変化(内の関係(29b)→外の関係(29c))、主名詞の抽象化(例えば、(29b)の「友人」→(29c)の「場面」→(29d)の「の」)が取り上げられているが、特に、(29c)の段階については、「場面」という出来事を抽象的に示す名詞により、主節述語「会う」にも「でくわす」、「遭遇する」、「行き合う」のような語彙的な意味のずれが生じると指摘されている。つまり、名詞の語彙的な意味の変質が動詞の語彙的な意味のずれに相関しているということである。結局、(29d)の段階では、対象としてのモノ性がまったくなくなり「出来事対象性¹⁶」を持って、(30)のように連体的複文と連用的な複文の両義的な解釈が可能な文へ移行するきっかけをもたらすことになる。

- (30) 数が足りナイノニ気ガツカナカッタ。(小野谷 1995)

このような格くずれ現象に基づくと、経路の「を」の文と空間ナカヲの文においても、空間の捉え方におけるモノ(実質空間)からコト(抽象的空間性)への移行と共に、「経路ヲ-移動動詞」という関係にもずれが生じるという捉え方が可能であると考えられる。つまり、「出来事+中」という空間認識のずれが共起動詞の

¹⁵ 小野谷(1995)では、単文を「ひとえ文」、複文を「つきそい・あわせ文」との用語が用いられている。

¹⁶ 小野谷(1995)では、「私はデパートで友人に会った。」文においては、「に」格の名詞の語彙的な意味のモノ対象性が強く出ているものとし、本文の(29d)の文では、出来事の状況的な場面性が、「買い物をしている」の動名詞化の手続きにより表現され、出来事対象性を持って、述語と結びついていると捉えられている。

ずれに相関することになる。したがって、空間ナカヲは、(31b)、(32)のように非移動動詞(移動性動詞)とも共起できるようになり、この点は、「何らかの移動を伴う動作を行う動詞」と共起すると述べた杉本(1993)の指摘ともかかわっていると考えられる。

(31) a 雨の中をグラウンドを走った。

b 暗闇の中を山小屋を探す。

(32) 十月十日には雨の中を三菱経済研究所の宇野弘蔵を訪ね「研究会」への参加を依頼し、[わが志は千里に在り 2004]

3.2.3 二重ヲ格の許容と空間ナカヲの文法機能

また、空間ナカヲの文の特徴としては、(31)、(32)の文のように、二重ヲ格の共起が可能であることが挙げられる。中村(2003)では、二重ヲ格が許容される条件として、共起するヲ格がそれぞれ「副次補語＋必須補語」という組み合わせになることを取り上げている。例えば、次のように「対格＋対格」(33a)、「対格＋移動格」(33b)といった「必須補語＋必須補語」の組み合わせの場合は、二重ヲ格の文が成立しない。

(33) a *お米をご飯を炊く。

b *太郎を家を追い出す¹⁷。(中村 2003)

一方、(34a)のように「状況格¹⁸＋対格」、(34b)の「状況格＋移動格」の組み合わせは、中村(2003)で言う「副次補語＋必須補語」という条件を満たしており、二重ヲ格の文が成立している。

¹⁷ 本文の(33b)の文法性判断は、中村(2003)による。杉本(2009)では、対格の「を」と移動格の「を」がi)のように共起可能であることが指摘されている。この共起が可能なのは、移動格の「を」が目的語として機能していないためである。詳細は、杉本(2009)を参照。

i) 太郎が次郎を(無理矢理)急な崖を登らせた。

¹⁸ 中村(2003)では、「吹雪の中を」のような名詞句におけるヲ格を、杉本(1986)にしたがって状況格とし、動詞との結びつきが弱い「副次補語」と捉えている。

(34) a 吹雪の中を遭難者を検索した。

b 嵐の中を家を出た。

中村(2003)では、上記のような二重ヲ格の共起可能な条件として、「副次補語＋必須補語」の組み合わせを提示している。つまり、(34)のような二重ヲ格の共起が可能な理由は、空間ナカヲ(中村(2003)で言う「状況格」)の文法機能が、「必須補語」の対格・移動格の「を」とは異なり、「副次補語」になっているためである。また、加藤(2006)においても、状況補語(本稿で言う「空間ナカヲ」)を、格助詞用法に含め、非必須格、背景状況格と位置付けている。

このように、空間ナカヲが副次的な成分として捉えられる点は、3.2.2で述べた「経路-移動動詞」という動詞との関係が変質する「共起動詞のずれ」に関係していると思われる。つまり、空間ナカヲにおける共起動詞のずれは、動詞との関係における意味的な必須度の問題にかかわっている。例えば、動詞「走る」の必須的な成分を判断する¹⁹場合、「私は、昨日、走った」のような文に対して、「どこを」という成分が必須成分になるわけであるが²⁰、コトとしての抽象的な空間性だけを持つ「雨の中を」と答えるのは、情報的に不十分である。このように、空間ナカヲが、動詞にとって必須的な成分としては機能せず、副次成分として捉えられることは、共起動詞のずれという「格くずれ」の結果であると考えられる。

本研究では、空間ナカヲの位置づけに関して、中村(2003)、加藤(2006)の先行研究で述べられた「副次補語」、「非必須格」という捉え方を認めながらも、

¹⁹ 森山(1988)では、格の必須的成分の認定において、文脈内での不在による反問の誘発のテスト、連体修飾の底名詞(Head noun)になれるかのテストなどのいくつかのテストを取り上げているが、そのテストの有効性についての問題も指摘している。

²⁰ この点、仁田(1993)では、判断を異にしている。仁田(1993)では、移動格の「を」において、次のように必須度の違いを取り上げている。例えば、i)の「を」は「子供達ガ渡ッタ」が意味的な不十分であるので主要共演成分(本研究で言う「必須格」)であり、ii)の「を」は「子供達ガ走ッテイル」だけで意味的に充足しているので副次的共演成分(本研究で言う「副詞格」)であると捉えられている。

i) 子供達ガ吊り橋ヲ渡ッタ。← 子供達ガ渡ッタ吊り橋

ii) 子供達ガ運動場ヲ走ッタ。← 子供達ガ走ッタ運動場

ただし、i)、ii)の意味的な充足さに関する仁田(1993)と捉え方は、現場性、「テイル」などの表現にかかわっている可能性がある。例えば、「子供達が渡っている」においても、「子供達が走っている」と同様に現場性の支えにより言えると思われ、「子供が走った」だけでは、「子供が渡った」と同様に不充足な表現であると思われる。

「状況格」(中村 2003)、「背景状況格」(加藤 2006)という用語は用いない。後で述べる(5.1節)ように格助詞「を」には、期間を表す「を」のように、副詞的な機能の存在が認められる。すると、空間ナカヲについても、「状況格」などのような用語を使って区分するより、城田(1993)で言う格助詞「を」の二次機能の「副詞格」として数えることが望ましいと考えられる。

3.2.4 移動格と空間ナカヲの連続性

以上で、空間ナカヲと経路の「を」における空間の捉え方のモノからコトへのずれ、共起動詞のずれが、経路として機能する格助詞「を」の性質に影響を与えることについて考察した。

これまでの分析に基づくと、空間ナカヲは、移動の仕方(経路的に捉えられる点で)において経路の「を」との類似性を持つ一方、「出来事+中」という要素により、空間認識のずれと共起動詞のずれという「格くずれ」が起こっているものであった。この点から、空間ナカヲは経路の「を」が変質したものとして捉えられる。このようなずれの結果、空間ナカヲは、動詞の移動性という意味的な制約にかかわりながら、「格くずれ」により、助詞「を」の機能変化と二重ヲ格の共起という文法的な性質の変化が起こっている。

この節で述べた経路の「を」と空間ナカヲにおけるずれの関係をまとめると、次のようになっている。

(35) 移動格「を」の「経路」用法から「空間ナカヲ」へ

	経路の「を」	→ 空間ナカヲ
形式	実質名詞+を	出来事+中+を
空間認識	実質的空間性	抽象的空間性
共起動詞	移動動詞	移動動詞・移動性動詞と意味的な依存関係 ²¹
文法機能	必須格(項)	副詞格

²¹ 本研究では、空間ナカヲについて、動詞自体の行為に含まれる移動と関係し生起する点で、意味的な依存性を持っていると判断した。

4. 時間ナカヲについて

4.1 時間ナカヲにおける生起条件

ここでは、前述した「中を」形式における時間的用法について考えたい。本章では、佐伯(2013)を参考にし、「中を」形式における空間的状况(空間ナカヲ)、時間的状况(時間ナカヲ)という用法の区分を提示した。第2章の3.1.1で述べたように、佐伯(2013)では例外的に非移動動詞²²と共起する場合において、本動詞または補助動詞「いる」と共起する「中を」は、時間的状况に焦点が置かれると指摘されていた²³。しかし、(36)の用例は、必ずしもそうではないものであることを示している。

- (36) 二人の女性が感心して見つめる中を、ジョシュアは三皿も平らげてから
椅子に反り返った。 [天使の自立 1996]

(36)の文では、後続する動詞「平らげる」、「反り返る」に移動性が存在するとは言えず、「中を」という状況は移動が行われる場所としての解釈がしにくい。この点については、杉本(2009)の指摘のように、状況の「を」の時間的用法とも考えられるが、本研究では、このような点を考慮した申(2014)の分析を取り上げる。

申(2014)では、時間的な移動を表す「を」を手掛かりにして、時間的状况を表す「中を」文における特徴を、「状況を経路としてとって、後続事象の展開プロセスが進行していくこと」と想定し、「展開プロセス」として捉えている。この「展開プロセス」の意味は、以下のような言語的な特徴により解釈され、時間ナカヲの生起条件として働く。

- (37) ①「ている」形との共起
② 副詞成分との共起
③ 複数の動詞による動きの連続
④ プロセスが推測できる動きを持つ動詞との共起

²² 佐伯(2013)における移動動詞の規定については、本研究の第2章の3.1.1を参照。

²³ 本研究の第2章の3.1.1を参照。

次節からは、これらの特徴が時間的ナカヲ文の成立にかかわっていることを検討したい。

4.2 「ている」形と共起する場合

次の「中を」の文においては、移動性のない動詞「読む」と共起すると(38a)のように非文になるのが一般的であるが、(38b)のように動詞が「ている」形になるとある程度文法性が上がる。

- (38) a *月光の中を本を読んだ。
b ?月光の中を本を読んでいた。

(38b)のように、完全に文法的ではないが、文法性が上がる原因としては、後続する「読む」というひとまとまりの(点的な)事態が「ている」形によって、「持続」の意味を持つ(線的)事態と捉えられることが挙げられる。このような後続事態の捉え方から、時間ナカヲにおいて捉えられる出来事との時間的な関係づけが容易になるのではないかと考えられる²⁴。また、(39c)のように「楽しそうに」などの副詞表現と共起するとより自然な文になる(この点については4.3で述べる)。

- (39) a ??そよ風の中を、ギターを弾いた。
b ?そよ風の中を、ギターを弾いていた。
c そよ風の中を、楽しそうにギターを弾いていた。

ここで、時間ナカヲと「ている」による後続事態が、どのような時間的關係になっているかを考えるために、「ている」形が持つ「持続」の意味についても考えたい。三原(1997)では、「ている」の中核的意味を何らかの意味で「持続」であると捉え、動詞のタイプによりそれぞれの「ている」の意味が「動作持続」、「結果持続」、「状態持続」、「効力持続」を表していると指摘している²⁵(ただ

²⁴ 申(2014)では、時間ナカヲが表す出来事後続事態が時間的に「同時進行」であることを主張している。詳しくは、申(2014)を参照。

²⁵ 三原(1997)では、次のように、「ている」構文の意味を分析している。詳細は三原(1997)を参照。

し、三原(1997)は「効力持続」に関しては、動詞のタイプを選ばないと指摘しているが、本章では詳細に立ち入らない)。

この「ている」の意味の内、時間ナカヲ文における「ている」は、特に「動作持続」(伝統的には「進行」と呼ばれているもの)の意味として解釈される。したがって、(40)の状態変化動詞「生まれる」は、(40a)のように「ている」形により「結果持続」の解釈になっており、この解釈のままで(40b)のように時間ナカヲと共起すると許容度が低くなる。

- (40) a 太郎と花子との間に子供が生まれている。
b ??激しい時代の中を、太郎と花子との間に子供が生まれている。

一方、(41)の時間ナカヲ文のように、「生まれている」が「動作持続」として解釈できる要素の助けがあれば、後続事態の「展開プロセス」が読みとられやすくなることで、文の許容度も高くなることが確認できる。((41b)のように「勢いよく」など副詞表現の助けがあると更に自然な文になる)

- (41) a ?家族の皆が見守る中を、太郎の息子が生まれていた。
b その時、家族の皆が見守る中を、太郎の息子が(勢いよく)生まれていた。

以上から、時間ナカヲと「ている」形の共起により、特に後続する事態が「動作持続」の意味を持ちながら線的に捉えられることから、時間ナカヲと後続事態との結びつきが容易になり、「展開プロセス」解釈が読みとられやすくなることが確認された。これは、本動詞・補助動詞「いる」と共起する状況の「を」句が時間状況に視点が置かれるとする佐伯(2013)の主張とも共通する点である。

-
- | | | |
|-------------------------|--------|-----------|
| i) a 太郎が本を読んでいる。 | 【動作持続】 | |
| b 革命軍兵士が死んでいる。 | 【結果持続】 | |
| c 太郎が結婚問題で悩んでいる。 | 【状態持続】 | |
| d シェイクスピアは多くの歴史劇を書いている。 | 【効力持続】 | (三原 1997) |

4.3 副詞成分により「展開プロセス」が読みとられる場合

「読む」、「書く」、「弾く」、「戦う」などの動詞は、行為が持続性という点で時間的な幅が存在しながらも、(42a)のように「中を」との共起ができない。前述したように、ひとまとまりの点的な事態は、時間ナカヲと共起しにくい。このような場合、(42b)のように共起動詞を4.2で検討した「ている」形にすると、時間ナカヲと共起しやすくなるが、(42c)のように副詞成分が介在すると、更に文の許容度は高くなる。

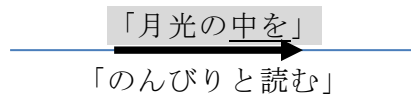
- (42) a *月光の中を本を読んだ。
b ?月光の中を本を読んでいた。
c 月光の中を{のんびりと/必死に}本を読んだ。

ここでは、(42c)のような副詞成分との共起によって、時間ナカヲと後続事態が結びつきやすくなる点について考えたい。(42c)のような様態副詞表現に関しては、仁田(2002)における「動きの展開過程の局面を取り上げ、それに内属する諸側面…中略…のありように言及することによって、事態の実現のされ方を限定し特徴づけているもの(仁田 2002:36)」との指摘が参考になると思われる。仁田(2002)の指摘を踏まえると、「読む」のような継続的な動きが「する」形によってひとまとまりの事態を表す場合において、(43)のように様態副詞表現との共起によりその展開過程が読みとられるようになる。

- (43) のんびりと本を読んだ。
- 「読む」 —————→ 「読む」
 「のんびりと読む」

つまり、(43)は「読む」という行為において、特に「のんびりと読む」という展開過程の局面(太い矢印の部分)が取り上げられていることになる。更に、この文が(44)のように時間ナカヲと共起すると次のようになる。

- (44) 月光の中をのんびりと本を読んだ。



(44)は意味的に「読むという行為において、特に「のんびりと読む」というプロセスが「月光の中を」という状況で展開していく」のように解釈できると考えられる。このように、継続的な動きを表す動詞の「する」形が、時間ナカヲと共に起するためには「展開プロセス」を取り上げる副詞表現の助けが必要である。次のような先行研究の例文においても、副詞成分が共起しているものが多く、この副詞成分を取り外すと文の許容度が低くなる。

- (45) a 防衛軍は、豪雨の中を最後まで戦った。 (天野 2011)

b ?防衛軍は、豪雨の中を戦った。

- (46) a 社長退陣の怒号が響く中を、社長は練習通りに演説した。

(天野 2011)

b ?社長退陣の怒号が響く中を、社長は演説した。

4.4 複数の動詞による動きの連続で「展開プロセス」が読みとられる場合

天野(2011)は、比較的単純な動作を表す(更に「する」形になっている)動詞と共に起する例を取り上げて、これらの文の許容度が落ちる理由は<逆境・移動・対抗動作性>といった語用論的な意味関係になっていないことによると指摘している。

- (47) a ??そよ風の中を、ギターを弾いた。

b ??満天の星空の下を、座り込んだ。

c ??桜吹雪の中を、社長に帰国報告をした。

d ??穏やかな春の陽の中を、手紙を書いた。

e ??観衆の声援の中を、メダルに見入った。 (天野 2011)

しかし、4.2で述べたように、このような動詞は、ひとまとまりの動きだけが現れている点的な事態であり、「展開プロセス」解釈が難しくなっているため、時

間ナカヲと関係づけられないものである。ここで、「展開プロセス」の意味を明示する一つの方法として、継起的な動作を表す動詞を複数入れることが挙げられる。例えば、複数の動詞をもって、時間的な順番で行われる動作をつなげると文法性がよくなることが確認できる。

(48) そよ風の中を、ビールを一杯飲んで(得意になって)ギターを弾いた。

(展開プロセス：ビールを飲む → ギターを弾く)

(49) 満天の星空の下を、空を見上げながら(べたりと)座り込んだ。

(展開プロセス：空を見上げる → 座り込む)

(50) 観衆の声援の中を、涙を流しながら(感動して)メダルに見入った。

(展開プロセス：涙を流す → メダルに見入る)

上記の括弧には、動詞の連続により読みとられる「展開プロセス」の意味を表示した。これらの例は、時間ナカヲ文の成立における「中を」と後続事態の関係が必ずしも<逆境－移動・対抗動作性>といったものになっていないことを示している。この点に関しては、次のような実例においても、2つ以上の動きが継行的に行われることにより文が成り立っている例が確認できる。

(51) 二人の女性が感心して見つめる中を、ジョシュアは三皿も平らげてから椅子に反り返った。(展開プロセス：平らげて → 反り返る)

((36)の再掲)

(52) 伝玄墨汁の読経が続く中を乗組員たちが順に席を立てて焼香しはじめた。

(展開プロセス：立て → 焼香する) [虚航船団 1992]

(53) 母は生命の危機を感じて、とっさのことで着がえる暇もないので、酷寒のしばれる中を素足にねまき姿のまま、二軒続きの社宅の隣りの家の戸を叩いて身をひそめました。(展開プロセス：叩いて → ひそめる)

[フラッシュバック 2001]

特に(51)、(52)の用例における時間ナカヲは、文脈において「逆境」と認められにくいものである。上記した文の後続事態では、複数の動きを表す動詞の連続

が継起的に示されることで、「一連のプロセス」を持つ出来事として解釈される。したがって、文の解釈としては、時間ナカヲの状況において、この「展開プロセス」解釈を持つ後続事態が行われると捉えられる。

4.5 語彙的な意味により「展開プロセス」が読みとられる場合

今まで検討してきた「展開プロセス」の言語的な特徴は、主に後続事態において、「ている」形・副詞成分・複数の動きを表す動詞の連続などの表現の助けにより読みとられるものであった。一方、次の動詞「点検作業する」は、今までの例とは違ってこれらの助け無しで時間ナカヲの文が成立している。

(54) ガス会社の職員は、吹雪の中を点検作業した。 (天野 2011)

これは、後続する出来事において「展開プロセス」がどのように読みとられるかに関係している。例えば、「ガス会社の職員が … 点検作業する」と「太郎が … 路上作業する」とはその内容において違いがある。(55)のような文は、「路上作業する」内容・範囲が不明であり、その過程も推測できないので不自然な文になっている。一方、(54)では作業の範囲と過程がある程度推測できる内容を表している点で、容認可能ではないかと考えられる。

(55) ?太郎は、吹雪の中を路上作業した。
(作業のプロセスが不明)

また、次のように「済ませる」、「生まれる」のように状態変化を表す動詞も、副詞的な表現無しで時間ナカヲの文が成立する。

(56) 大雨の中を、太郎は故障部品の交換を済ませた。 (天野 2011)

(57) 激しい戦乱の嵐の中を、王の世継ぎが生まれた。

(56)、(57)においては、動詞の語彙的意味が「完了する、結果物を出す」のようになり、自然に完了への「展開プロセス」が推測できる。この点から考えると、

他の言語的な手段無しで時間ナカヲと共に起する動詞は、何らかのプロセスが推測できる動きを持つものであることが予測される。例えば、「達成する」のような動詞は、「何らかの結果物を出す」あるいは「何らかの目標に到達する」までのプロセスが推測できる点で、(58a)のように時間ナカヲとの共起が可能になっている。

- (58) a 営業部は長期間円安が続く中を、売り上げ目標を達成した。
b 営業部は長期間円安が続く中を、(2年連続で)売り上げ目標を達成した。

ただし、(58a)の文についても、(58b)のように「2年連続で」の副詞的な表現の助けがあると更に自然な文になることを指摘しておきたい。また、(54)、(56)、(57)の用例においても、次のような副詞表現を介在させることで、更に自然な文になると考えられる。

- (54') ガス会社の職員は、吹雪の中を(巧みに)点検作業した。
(56') 大雨の中を、太郎は故障部品の交換を(迅速に)済ませた。
(57') 激しい戦乱の嵐の中を、王の世継ぎが(遂に)生まれた。

このように、副詞表現による展開過程の取り上げという手段は、前述したように単純な動きを持つ動詞の展開過程を取り上げる上で、既にプロセスの意味が想定できる動詞においても「展開プロセス」読みを更に明確にすると考えられる。

4.6 「展開プロセス」の特徴のまとめ

以上、時間ナカヲの生起条件として、後続事態における「展開プロセス」が読みとられる必要があることと、「展開プロセス」の意味にかかわる様々な言語的な特徴を検討した。この内容をまとめると、次のようである。

(59) 「展開プロセス」の意味を表す言語的な特徴

a 後続する事態が「テイル」形になっている場合

－効果：事態が線的に捉えられ、時間的狀況と結びつきやすくなる

b 副詞成分と共起する場合

－効果：動詞の展開過程が取り上げられる

c 複数の動きを表す動詞の連続の場合

－効果：複数の動作が一連のプロセスを持って展開される

d 述語の語彙的な意味として〈完了、結果物を出す〉を持っている場合

－効果：完了までのプロセスが容易に推測できる

5. 期間ヲと時間ナカラにおける連続とずれ

5.1 必須格としての期間ヲ①と副詞格としての期間ヲ②について

この節では、期間ヲと時間ナカラを考察するに先立って、期間ヲの位置づけについて検討する。この期間ヲの位置づけに関する先行研究には、城田(1993)の二次機能としての副詞格²⁶、仁田(1993)の「経過域(時間)」を表す共演成分としての必須的な成分という捉え方における対立がある。ここで、本研究では先行研究の指摘を踏まえながらも、主に共起動詞のタイプと必須度に基づいて、期間ヲのタイプの区分けについて検討したい。

(60)と(61)における期間ヲは、それぞれの「過ごす」という動詞、「生きる」という自動詞と共起しており、動詞との文法関係において機能が異なっている。つまり、(60)の期間ヲは目的語として動詞「過ごす」にとって必須的であるが、(61)の期間ヲは自動詞「生きる」にとって副次的であることが問題になっている。

(60) 3年間を中国で過ごした。

(61) 彼はベートーヴェンと同じ時代を生きた。

²⁶ 城田(1993)では、文法格のヲは直接補語を示しており、意味論の意味はなく文法的関係だけを示しているが、道筋・起点(本研究で言う「移動格の「を」」)を示すヲは意味論の意味を有し、表すことは具体的、語義的であり、副詞に近づくと言われている。ただし、本研究では、移動格の「を」について数量詞遊離、主格目的語化などにおける振る舞い、意味論的な必須度(「私は、昨日、歩いた」)により、必須格(項)と判断する。

上記の期間ヲは、基本的に動詞の語彙的な意味(時間的な意味を表わす動詞)に依存する性格を持ちながらも、(60)のような「過ごす」と「待つ」、「暮らす」などの他動詞と共起する場合の期間ヲは、必須格であると考えられる。その証拠として(62)のように二重ヲ格が容認されないことが挙げられる。

- (62) a *そこで3年間を楽しく新婚生活を過ごした。
b *バス停で1時間をずっと彼女を待った。
c *残り少ない日々を人生を静かに暮らした。

一方、(61)のような「生きる」、「育つ」などの自動詞と共起する期間ヲは、動詞の時間的な意味に依存して生起しながらも、動詞の要求する項ではない点で、副詞格と呼べるべきものであると考えられる²⁷。

- (63) a 自分に与えられた時間を十分に生きる。
b 少年時代をこの町で育った。

また、次のような文における期間ヲは、動詞「戦う」が要求する必須項ではない上に、(64b)のように「一人で」などの副詞表現、「てくる」などのアスペクト表現がないと共起できなくなるという特徴がある。

- (64) a 私は支援者が現れるまでの3年の間を一人で検察と戦ってきた。
(高井 2012)
b ??私は支援者が現れるまでの3年の間を検察と戦った。

更に、この期間ヲは、(65)のように二重ヲ格が許容される点で、中村(2003)が指摘した「副次補語-必須補語」の組み合わせにおける副次補語として捉えられる。

- (65) 残りの時間を10人で決勝を戦わなければならない。

²⁷ ここで、「生きる」、「育つ」などはそもそも「を」格をとらない自動詞なので、二重ヲ格のテストは検討していない。

このように期間ヲのタイプが分けられる点に関して、中村(2003)では、「過ごす」などの時間を表す動詞とともに用いられる時間格(本研究で言う「期間ヲ」)は必須補語であり、(66)のように時間を表す動詞以外の動詞とともに用いられた場合は副次補語であると指摘されている。更に、(66)の期間ヲが副次補語であるのは、二重ヲ格が許容されることにも根拠づけられている。一方、中村(2003)では、(66a)について「文法性は微妙で、個人差も生じるだろう。その原因は、時間格と時間を表さない動詞の呼応が微妙であることにある(中村 2003:146)」と述べられ、(66b)のように時間を表す動詞が結合した複合動詞により許容度が上がることが指摘されている。

(66) a ?空腹のまま七時間を山道をさまよった。

b 空腹のまま七時間を山道をさまよい続けた。(中村 2003)

以上から、期間ヲは動詞の時間的意味に依存して生起する点は共通しながらも、他動詞と共起する場合は必須格として、自動詞と共起する場合は副詞格として区分されると捉えられる。今後、便宜的に必須格としての期間ヲを「期間ヲ①」、副詞格としての期間ヲを「期間ヲ②」と呼ぶ。

ここで、(64b)の文を含めて(66a)の文における期間ヲは、高井(2012)が指摘したように「ている」形などのアスペクト表現の共起、副詞成分などの介在(以降、「要素の介在」と呼ぶ)の助けがないと生起できない点で、(62)における「生きる」などの動詞と共起する期間ヲ②に属するものであるかが問題になる。

前述したように、(66)の「さまよう」のような移動を表す動詞を含めて、(67)、(68)のように移動動詞と共起する期間ヲは、文の成立において「要素の介在」という手段を必要としている。

(67) a ??ジョンは町の明かりが見えるまでの数時間を歩いた。

b ジョンは町の明かりが見えるまでの数時間をビルと歩き続けた。
(高井 2012)

(68) a ??先頭ランナーはゴールまでの1時間を走った。

b 先頭ランナーはゴールまでの1時間をもくもくと走った。(高井 2012)

また、(65)の文を含めて、(69)の「戦う」、(70)の「遊ぶ」、(71)の「泣く」、(72)の「働く」、(73)の「頑張る」のような自動詞と共起する期間ヲは、「要素の介在」が生起条件としてかかわっている。

- (69) フェラーラの劇場で一人芝居をしていた彼もまた、七十年代をポルティナリーやカルロたちとともに戦った人物であり、スローフード協会の会員だった。 [スローフードな人生！ 2003]
- (70) 子どもたちは午後の時間をたっぷり池で遊んだ。 [テイル館の謎 2001]
- (71) 相手が自分より口達者であった場合には喧嘩ののち彼は宇宙標準時間にして約四十分間をひとりさめざめと泣き続けるのだ。 [虚航船団 1992]
- (72) もし、一日八時間を区役所の婚姻部局で働く公務員のごとく決まった時刻に通るとか、… [十三人組物語 2002]
- (73) 2年間ヲガンバリ通す。 (城田 1993)

上記の(移動動詞、「戦う」などの自動詞と共起する)期間ヲは、動詞が要求する項ではない点で「生きる」などと共起する期間ヲ②と共に副詞格として捉えられながらも、生起条件においては「要素の介在」を必要とするという違いが見られる。このような違いが見られる原因は、動詞の語彙的な意味によると思われる。例えば、「生きる」、「育つ」などは、語彙的な意味として、動作自体に時間軸上の進展過程が含まれている²⁸。ただし、「戦う」などの動詞は語彙的な意味として持続性を持っているだけで、時間軸上の進展過程が含まれた時間の意味はない。したがって、このような動詞が期間ヲと共起する場合は、動詞の語彙的な意味で捉えにくいところを取り上げる表現の助けが必要になるわけである。この結果、動詞に「～てくる」、「～続ける」、「～通す」のような表現、「～とともに」、「たっぷり」、「区役所の婚姻部局で」のような表現が共起することにより、期間ヲの生起が可能になる。

一方、移動動詞と共起する場合は、(74)のように要素の介在無しで生起することもあり、(75)のように二重ヲ格が容認可能である点から、副詞格の期間ヲ②と

²⁸ この点は、他動詞である「過ごす」、「待つ」なども同じである。ただし、「過ごす」類とは期間ヲを目的語としてとる点で異なっている。

しての性格を持っていると考えられる。

(74) a かなり長い時間を歩いた。 [てくてくカメラ紀行 2004]

b かなり長い時間を走った。

(75) かなり長い時間を公園を歩いた。

以上から考えると、「戦う」などのと共起する期間ヲ、移動動詞と共起する期間ヲは、「生きる」と共起する副詞格としての期間ヲ②に属するものとして捉えられる。ただし、「戦う」などの動詞は語彙的な意味として時間の進展が捉えにくいいため、「要素の介在」の助けにより時間的な進展過程の意味が補充され、期間ヲと共起できるようになる点だけが異なっている。

また、「戦う」などの動詞と期間ヲ②の生起条件としての「要素の介在」は、前述した時間ナカヲ文における「展開プロセス」と似ている。

(76) 残り時間を(10人で/最後まで)戦わなくてはならない。

(77) 防衛軍は、豪雨の中を(10人で/最後まで)戦った。

(76)の期間ヲ②文と(77)の時間ナカヲ文における「10人で/最後まで」の役割は、両者が同様に「戦う」動作の中で、特に「(10人で/最後まで)戦う」という「展開プロセス」が「残り期間を」あるいは「豪雨の中を」において行われる解釈になっている。この点は、正に「展開プロセス」の解釈であり、期間ヲ②の「要素の介在」は、「展開プロセス」解釈のための手段に含められると考えられる(今後、まとめて「展開プロセス」と呼ぶ)。

以上、期間ヲ①と期間ヲ②の区分の問題について詳細に検討した。結論として、期間ヲ①は動詞「過ごす」などの必須項であり、期間ヲ②は動詞の語彙的な意味に依存しながらも、副詞格として捉えられることが確認された。また、「戦う」などの(時間軸上の進展過程が捉えにくい)動詞と共起する期間ヲ②は、時間的な意味の不十分なところを補充する表現の助けにより生起するという特徴を持つ。この「展開プロセス」の特徴は、時間ナカヲにおいても見られるものである、次節からその共通点と相違点を分析する。

5.2 「戦う」類の動詞と共起する期間ヲ②と時間ナカヲにおける共通点と相違点

前述したように、「戦う」類と共起する期間ヲ②と時間ナカヲは「展開プロセス」という解釈の助けにより生起する点で共通している。ここで、この期間ヲ②と時間ナカヲにおける「展開プロセス」の詳細を検討したい。まず、両者には、次のように「ている」などのようなアスペクト表現²⁹により、文の許容度が高くなる点が見られる。

- (78) a ??親を亡くした子供達は戦後の混乱期を育った。
b ?親を亡くした子供達は戦後の混乱期を育ってきた。 (高井 2012)
- (79) a *月光の中を本を読んだ。
b ?月光の中を本を読んでいた。

また、両者は副詞成分の介在による文の許容度の違いも共通している。

- (80) a ??子供達は母親が迎えに来てくれるまでの時間を遊んだ。
b 子供達は母親が迎えに来てくれるまでの時間を友達と楽しく遊んでいた。 (高井 2012)
- (81) a ?防衛軍は、豪雨の中を戦った。
b 防衛軍は、豪雨の中を最後まで戦った。 (天野 2011)

一方、4.4節で検討した次の時間ナカヲの文は、後続事態で複数の動詞が連続し、一連のプロセスを表すことにより「展開プロセス」解釈が生じ、文の許容度が高くなることが確認された。この点は、時間ナカヲの文における「展開プロセス」の解釈が一つの動詞の語彙的な意味に留まっていないことを示唆する。

²⁹ 「てくる」、「～続ける」、「～通す」などの表現を含める。

(82) a ??そよ風の中を、ギターを弾いた。

b そよ風の中を、ビールを一杯飲んで（得意になって）ギターを弾いた。

（展開プロセス：ビールを飲む → ギターを弾く）（(48)の再掲）

一方、(83a)の容認度の低い期間ヲ②の文は、(83b)のように後続事態を動詞の連続による「展開プロセス」読みにしても、許容度が変わらない。

(83) a ?子供たちは母親が迎えに来てくれるまでの時間を友達と楽しく遊んだ。

（高井 2012）

b ?子供たちは母親が迎えに来てくれるまでの時間を友達と楽しく遊んで、部屋を片付けた。

(83)に反して、次の時間ナカヲ文においては、(84a)の文が(84b)のように連続する動詞により後続事態の「展開プロセス」解釈が生じると、許容度が変化する。

(84) a ??子供たちは両親がじっと見守る中を友達と遊んだ³⁰。

b 子供たちは両親がじっと見守る中を友達と遊んで、おもちゃを片付けた。

以上から、「戦う」類と共起する期間ヲ②と時間ナカヲには、部分的に「展開プロセス」読みが共通していることが見られる一方、後続する行為の連続による「展開プロセス」読みは時間ナカヲに限られていると思われる。なぜこのような違いが生じるかについては、次節で更に検討する。

³⁰ 本来、(83a)の期間ヲ②の文をそのまま時間ナカヲ文にすると、i)のように、副詞成分による「展開プロセス」読みが可能であるので、本文の(84a)の文は、後続節の行為の連続による「展開プロセス」読みの確認のため、「楽しく」を除外した。

i) 子供たち両親がじっと見つめる中を友達と楽しく遊んだ。

5.3 時間ナカヲと期間ヲ②における格助詞としての性質と機能のずれ

時間ナカヲと前述した期間ヲ②(この節での期間ヲ②は、「戦う」類と共起する期間ヲ②に限る)は、一見すると、動詞が要求する必須項ではなく、時間を表す成分としての機能が類似しているように見える。この点は、次のように両者が、二重ヲ格が可能であることから、動詞にとって副次的な成分であることが確認される。

- (85) 会社の財政赤字が続く中を、会長は外資との戦いを必死に戦ってきた。
(86) 残りの時間を10人で決勝を戦わなければならない。

ただし、時間ナカヲと期間ヲ②は、完全に文法的とは言えないが次のように共起可能である場合がある。

- (87) ?会社の財政赤字が続く中を、経営陣は相場が落ち着くまでの1年間を必死に外資系企業と戦ってきた。

(87)のような文が完全に非文にならない点は、時間ナカヲと期間ヲ②が異なっている可能性を示唆している。前述したように、時間ナカヲと期間ヲ②は、両者の生起条件である「展開プロセス」といった解釈において部分的に共通しながらも、後続する動詞の連続による「展開プロセス」の解釈については異なっている。次の用例を参考されたい。

- (88) 彼女は長い秋の夜を泣き通して、ようやく静まった。
(89) 彼女は彼がじっと見つめる中を思い切り泣いて、ようやく静まった。

上記の文における相違点は、「展開プロセス」読みの解釈範囲の問題であると思われる。例えば、(88)の場合、期間ヲ②にかかわる「展開プロセス」の意味は「泣き通して」まで含まれると考えられる。その理由として、(90)の文のように、「ようやく静まった」という行為は、「泣き通す」の行われた期間の「長い秋の夜」とは別の時間の「翌朝」に行われていると考えられるためである。

(90) 彼女は長い秋の夜を泣き通して、翌朝ようやく静まった。

この点から、期間ヲ②の「展開プロセス」解釈は「泣き通す」という動詞句レベルで行われていると考えられる。

一方、(89)の時間ナカヲ文では、後続事態の全体において「思い切り泣いて→ようやく静まった」という「展開プロセス」解釈が生じている。この一連の行為の連続が「彼がじっと見つめる中を」という状況において行われている。つまり、時間ナカヲの生起における「展開プロセス」読みの範囲は、後続節のレベルに至っていることになる。

このような点から時間ナカヲについては、節レベルにかかっている成分として捉えられる可能性がある。ここでまず、仁田(2002)による時の状況成分と時間関係の副詞に関する記述を参考にする。仁田(2002)では、時の状況成分とは「事態の外的な時間的位置づけ、言い換えれば、時間軸上における事態の出現・存在位置を指し示すものである」とし、時間関係の副詞に関しては「事態そのものの有している時間的性格から引き出されたものとしての…中略…事態の内的な時間的特性に関わるものである」と述べられている。また、時の状況成分・頻度の副詞³¹・時間関係の副詞における作用域を、(91)の文と(92)の図で示している。

(91) あの頃我々はしばしば喫茶店で長時間話し込んだ。 (仁田 2002)

(92) [時の状況成分[頻度の副詞[時間関係の副詞]]] (仁田 2002)

このような仁田(2002)の指摘から、(87)の文における時間ナカヲと期間ヲ②は、(92)のような関係に基づいて捉えられる可能性がある。(87)の文における時間ナカヲと期間ヲ②を、(93)のように逆転させると、完全に非文法的な文になることから、時間ナカヲは時間を表す副詞格として機能する期間ヲ②より外側に位置付けられると考えられる。

³¹ 仁田(2002)では、事態の生起・存在の回数を表した副詞であると規定し、「イツモ」、「常ニ」、「時々」などを取り上げている。詳細は仁田(2002)を参照。

(93) *相場が落ち着くまでの1年間を、経営陣は会社の財政赤字が続く中を、必死に外資系企業と戦ってきた。

以上の議論から、時間ナカヲは構造的に「時の状況成分」と同様に位置づけられ、文中の機能においても、期間ヲ②とは異なっていると考えられるが、この点については、益岡(1995)の議論に基づいて検討したい。

益岡(1995)では、時間節における格助詞の有無に基づいて、時を特定する格成分、時を設定する状況成分について議論が展開されている。この区分においては、(94)のように格助詞「に」がついた方が格成分として、(95)のように格助詞をとらないのが状況成分とされている。

(94) 友達を待っているあいだにこの考えを思いついた。

(95) 友達を待っているあいだこの本を読んでいた。(益岡 1995)

益岡(1995)によると、格成分は一般に、事態のあり方に関する情報を特定する機能を持つものであり、状況成分は事態の叙述に必要な前提的(予備的)情報を提示する機能を持つものであると記述されている。益岡(1995)では、この機能的な違いを分析するための様々なテストが行われているが、ここではその内、疑問のスコープと焦点に関するテストを取り上げる。次の「何」のような「誰」疑問語を含んだタイプの疑問文における格成分と状況成分の振る舞いには、両者が主節の表す事態のあり方の叙述に関与するかどうかという点で対照的な性格が見られる。

(96) 何をしているあいだにこの本を読んだのですか。

(97) ?何をしているあいだこの本を読んでいたのですか。(益岡 1995)

益岡(1995)では、(96)の「あいだに」のように、格成分として機能する時間節は疑問のスコープ内に収まっているが、(97)の「あいだ」のような状況成分として機能する時間節は疑問のスコープ内に収まっていないということが述べられている。

このような益岡(1995)の指摘は、期間ヲ①、期間ヲ②、時間ナカヲにおける機能的な相違点にも当てはまると思われる。次の(98)～(100)は、期間ヲ①、期間ヲ②、時間ナカヲにおいて疑問語が含まれた疑問文の用例である。

(98) 彼女は何年間を中国で過ごしたんですか。

(99) a フランスはどれだけの時間を10人で戦わなくてはならなくなったんですか。

b ?彼は誰が現れるまでの3年間を一人で検察と戦ってきたんですか。

c 太郎は何年間を息を潜めて隠れていたんですか。

(100) a ??彼女は誰がじっと見つめる中を思い切り泣いて、ようやく静まったんですか。

b *二人の女性が何をしている中を、ジョシュアは三皿も平らげてから椅子に反り返ったんですか。

(98)の期間ヲ①では、疑問語の表現を含むのが可能であり、「過ごしたか」の時を特定する成分になっている。また、(99)の期間ヲ②の場合、多少揺れはあるが、時を特定する成分としてみてよいと思われる。(99b)のように、「…までの」のような修飾部の内部に疑問詞が含まれた場合、許容度が低くなっている点もあるが、(99c)のような表現ならば、文法的な文になり、期間ヲ①②は共に格成分としての特徴が見られる。一方、(100)の時間ナカヲにおいては、「中を」を修飾する出来事内部に疑問語が現れにくいことから、疑問のスコープの外にある状況成分としての特徴が見られる。

ただし、ここで、時間ナカヲが(101)のように完全な状況成分である「中 ϕ 」の形式とは交替できない点を指摘したい。

(101) 子育て支援の重要性が叫ばれる(中 ϕ /*中を)、「学童保育の充実」を選挙公約に掲げる首長も多く、公設学童保育は増加傾向にある。

(佐伯 2013)

(101)の文は、次のように後続節の「首長」を主語にして、「一様に」のような

副詞表現を加えると、「展開プロセス」の解釈が生じ、時間ナカヲとの共起ができるようになる。

- (102) 子育て支援の重要性が叫ばれる(中 ϕ /中を)、多くの首長は一様に「学童保育の充実」を選挙公約に掲げている。

上記のように、「中」に「を」が後接することで、後続節の「展開プロセス」と関係づけが求められることで、時間ナカヲの「を」とは何かが問題になる。この「展開プロセス」の意味は、時間ナカヲと期間ヲ②に共通する生起条件であり、時間的な移動性に基づいた意味である点で、両者の助詞「を」は同じものに見える。しかし、時間ナカヲは状況成分として、期間ヲ②は副詞格として機能するという点で、文法機能が異なっており、両者の「を」は異なっていると思われる。この点に関して、益岡(1995)では、格成分の状況成分化について指摘しているが、この現象は、ここで扱っている時間的なナカヲと共通する点がある。例えば、(103a)のように格成分が主題成分の前に位置する場合、(103b)のように事態を叙述する部分から切り離される場合などが挙げられるが、この点は、(104a)、(104b)のように時間的な状況の文にもよく見られる特徴である。

- (103) a 7月4日に私はあることを決意した。

b 7月4日に、あることを決意した。

- (104) a 二人の女性が感心して見つめる中を、ジョシュアは三皿も平らげてから椅子に反り返った。 [天使の自立 1996]

b ちょうど人が額に手をあてて遠くを眺めるといったふうに、淡い六日の月光の中を、向こうの谷をしげしげ見つめているのにあった。

[国語総合 教育出版株式会社 2006]

このような状況成分化から、時間ナカヲの助詞「を」は「中」に後接してはいないものの、その機能が失われていると考えられる。

以上の議論から、時間ナカヲは格成分としては機能せず、状況成分化したもの

として機能すると捉えられる。時間ナカヲは期間ヲ②と「展開プロセス」という生起条件を共通にしながらも、後続節との関係における状況を表示する点で、その違いが見られる。一方、期間ヲ②は、動詞の語彙的な意味により生起しており、「展開プロセス」の解釈も動詞句レベルで生じることから、動詞句内の要素である副詞格として捉えられる。

これまで議論した期間①②、時間ナカヲの関係は、次のようになるとと思われる。

(105) 期間ヲと時間ナカヲのずれ

	期間ヲ①	期間ヲ②	時間ナカヲ
生起条件	動詞の目的語	動詞の語彙的な意味	後続節における 「展開プロセス」
		動詞句における 「展開プロセス」	
共起動詞	「過ごす」 「待つ」 「暮らす」など	「生きる」 「歩く」など	節レベルとの連結
		「戦う」など	
機能	必須格	副詞格	状況成分

6. 移動格「を」と「中を」のずれにおける格助詞「を」の機能変化

以上で、移動格「を」の経路の用法から、空間ナカヲ、期間ヲ①②、時間ナカヲにおける類似点とずれに関する詳細を検討した。

空間ナカヲ、期間①②、時間ナカヲは、移動格(経路)「を」の用法からずれが生じたものとして捉えられるが、特に、空間ナカヲの格くずれ現象、時間ナカヲの状況成分化により、格助詞の性質にも変化が起こっている。ここでは、これまでの議論に基づいて移動格の「を」から「中を」形式への派生関係について考えたい。

本研究では、佐伯(2013)の指摘を受け入れ、「中を」形式を空間ナカヲと時間ナカヲに区分したが、その区分けは妥当であると思われる。両者は、移動格からの格くずれにより派生された用法であると思われるが、空間ナカヲは移動格の「を」の経路用法から、時間ナカヲは期間ヲ②の用法から、それぞれ特性を受け

継いでいる。

空間ナカヲにおける格くずれは、「出来事＋中」による空間認識のずれが、共起動詞のずれと格助詞機能(必須格から副詞格へ)の変化に至っている。一方、時間ナカヲは、状況成分化の現象により、「展開プロセス」の意味を持つ後続節全体と関係づけられ、格助詞機能(格成分から状況成分へ)の希薄化に至っている。

両者の格助詞機能の変質には、出来事の修飾を受ける「中」との複合が関係しており、それぞれの「を」の機能変化のきっかけをもたらすと考えられる。

移動格の「を」と「期間ヲ」、「中を」のずれの関係は次のようである。



7. まとめ

本章では、移動格の「を」、期間ヲ、「中を」形式における共通性とずれを分析し、それぞれの用法における特徴と機能を検討した。結論として、期間ヲ①は動詞「過ごす」などの項としての必須格、期間ヲ②は副詞格と捉えられ、空間ナカヲも副詞格としての性質が見られることを明らかにした。これは、動詞との文法的関係は示さないが、語彙的な意味に依存し生起する点、二重ヲ格の可能な点により、副詞格としての格助詞「を」の機能を認めた上での位置づけである。また、時間ナカヲの場合は、状況成分化により後続節の全体との関係を示す機能に変化し、格助詞機能が失われていることが明らかになった。

以上のように、出来事の修飾を受ける形式名詞「中」と「を」の結合は、空間ナカヲ、時間ナカヲにおいて格助詞機能の変質のきっかけになっていると考えられる。この内、時間ナカヲにおける状況成分化については、構造的な位置づけの問題がかかわっていると思われるが、この点に関しては第6章で詳細を検討する。

第4章

複合助詞ノヲにおける格助詞用法と接続助詞用法 の連続性について

1. はじめに

本章では、接続助詞的なヲ文を中心に複合助詞ノヲ¹の用法について考える。接続助詞的なヲ文とは次のようなものである。

(1) 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、
「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにゃ住所の控えはあるから」

(レー 1988、下線は筆者による)

(1)における「のを」形式は、助詞「を」の存在にもかかわらず、それと直接関係する他動詞の不在と後続節との関係により、2つの事態を連結する接続助詞として機能していると考えられる。このような文における「を」については、「の」と「を」が結合した複合助詞と見るか、対象をマークする格助詞としての性質を認めるかが問題になる。

本章では、複合助詞ノヲについて以下のような議論を展開する。①まず、(1)のような接続助詞的なヲ文において、天野(2010、2011)の「対抗動作性」分析に

¹ 先行研究においては、「接続助詞としてのヲ」(加藤 2006)、「接続助詞的なヲ」(天野 2011)のような用語が用いられている。

よる他動関係だけでは説明できない用例を確認し、他動関係を表す「対抗動作性」を再検討する。②また、事態間関係(以降、ノヲ節事態をS1、後続節事態をS2で表す)が他動的ではない接続助詞的なヲ文を検討し、この文において、「対抗動作性」の存在にもかかわらず、他動性が弱まり、「対比」の接続関係を表すようになることを示す。以上の議論をまとめて、複合助詞ノヲは、他動関係を表す格助詞用法と対比関係を表す接続助詞用法に分けられることを示す。なお、先行研究に言及する場合を除き、本章では、接続助詞的なヲは「接続ノヲ」とし、接続助詞的なヲ文は「接続ノヲ文」とする。

2. 先行研究

2.1 接続助詞としての「を」

加藤(2006)は、主に対象格・場所格の格助詞「を」について議論しているが、その内、「のを」、「ところを」における接続助詞としてのヲについては、複合辞の接続助詞として捉えている。加藤(2006)は、承接上の特性²を取り上げて、接続助詞としてのヲは、節を名詞化する要素である「の」、「ところ」などの形式名詞を伴う一方、後続節との関係を示す「接続」機能があるという点を指摘している。

- (2) ものすごい強風が吹いているのを、東京行きの最終便が離陸しようとしている。
(加藤 2006)

加藤(2006)では、(2)の場合、「のを」が接続助詞「のに」、「にもかかわらず」と置き換え可能であり、節と節との関係を提示していると見て、「接続」の機能を有していると判断している。また、「を」が接続助詞的に用いられる場合には、(3a)のように逆接の意味合いが生じる点も指摘している。

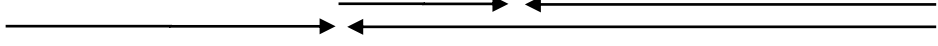
² 加藤(2006)では、「太郎は有能だが」、「花子は優秀だから」などにおける接続助詞「が」や「から」は、終止形に接続すると指摘しながら、構造上は節についていると見ている。一方、「を」は意味的に接続助詞に相当する働きを持っている場合でも終止形には承接せず、「の」、「もの」、「ところ」などの形式名詞を伴うことを指摘している。

- (3) a 先方も、忙しいところを、わざわざこちらへ出向いてくれたんだ。
 b???先方も、時間があるところを、わざわざこちらへ出向いてくれたんだ。
 (加藤 2006)

加藤(2006)は、以上のことをまとめて、接続助詞としての「を」が逆接という機能を持つ一方、形式名詞に承接する点では、一般的な接続助詞とは異なり、「のを」、「ところを」のような複合辞としての接続助詞と判断している。

2.2 「対象」を表す格助詞「を」

一方、天野(2010、2011)は、他動構文に基づく分析を行っている。例えば、(4)の文は、「やめる、遮る、制止する」のような方向性制御系の述語をとる構文型(「AがBを遮る」)を基にする推論が行われて、動詞句②が臨時的な他動詞「遮る」と解釈され、「のを」句(対象②)が対象のように解釈される。

- (4) [手帳に写し取ろうとするのを[手を(対象①) ふった(語彙的意味<フル>) 動詞①]]

 (対象<方向>②) (拡張意味<遮る>)動詞句② (天野 2011)

ここで、動詞句②を「遮る」と解釈するためには、語用論的な意味「対抗動作性³」が必要であるが、これは推論による拡張他動性に基づく意味である。結果的に、(4)は「Aが Bノヲ(対象②)サエギル(動詞句②)」構文型になり、意味的に「手帳に写し取ろうとするのを」句における事態進展の方向性を「手をふった」の動詞句の事態が「遮る」ことになる。この分析から、「対象②」の「を」は(対象としての)格助詞「を」の性質を失っていないことになる。

一方、伊藤(2013)では、接続助詞的なヲの文について、事態展開型の内在節文⁴

³ 天野(2011)では、後続する述語句(本文(4)の動詞句②)の部分で「を」句(本文の対象②)の自然な方向を「遮る」意味が推論されるとし、このような推論により、拡張された他動的な意味を「対抗動作性」と述べている。

⁴ 伊藤(2013)は、内在節のタイプを「参与者展開型」、「事態展開型」に分けている。その内、事態展開型の内在節文については、典型的には「ある事態(状況、状態)をもう一つの事態が変化させるという関係に二つの事態がある(伊藤 2013:103)」と述べて、i)のように「のを」節全体が主節

の延長線上に位置づけている。したがって、接続助詞的なヲ文についても、[]の部分全体を後続事態の項として捉えていることになる⁵。

- (5) [伸子が「いえ、私は一」と断ろうとするの]を、柳は構わずにグラスを満たした。
(天野(2010)、[]は伊藤(2013)による)

これらの立場においては、接続助詞的なヲ文を、格助詞「を」を中心とした項(「のを」)と述部(動詞句)の関係として捉えている。

2.3 問題の所在

ここでは、天野(2011)の分析を再検討したい。前述したように、天野(2011)における「対抗動作性」とは、「AがBヲV」型文の意味に基づいて、後続節の意図的行為により、「を」句事態の予測される進展方向を「遮る」といった他動性解釈であることを確認した。一方、次の用例においても、このような「対抗動作性」が読みとれるだろうか。(6)では、S2において、意図的な行為といった部分が「金地院崇伝の入れ知恵により」といった副詞節の形で現れており、主節の動詞は「反逆とされた」のような受動形になっている(以降、例文のS1を下線、S2を波線で示す)。

- (6) 秀吉の死後、秀吉が創建した方広寺が再建された際、秀頼が鑄造した鐘の銘文に「国家安康、君臣豊楽」の文字があったのを、黒衣の宰相といわれた南禅寺の金地院崇伝の入れ知恵により、徳川家康への反逆とされた。
[はんなり京都スケッチ気分 2003]

動詞の項のように解釈されると捉えている。詳細は伊藤(2013)を参照。

- i) [子供がミルクをこぼしたの]を拭き取った。(伊藤 2013)

⁵ 伊藤(2013)では、内容節文、事態展開型の内在節文、接続助詞的なヲの文について、「いずれも片方の事態全体が別の事態の項として捉えられており、但し上記の順で事態間の関連性が明白でなくなり、その分、言語表現で関連性を明示する必要性が増す(伊藤 2013:103)」と述べられている。したがって、本文中(5)のような接続助詞的なヲの文では、二つの事態の関連性を明示する「構わずに」などの表現がなければ、不自然な文になることも指摘されている。

- i) *[伸子が「いえ、私は一」と断ろうとするの]を柳はグラスを満たした。(伊藤 2013)

つまり、副詞節の形で現れた意図的な行為の存在により、「対抗動作性」を含むことになっているが、受動形により、文全体の意図性は低くなっている。この点で、(6)の文におけるS1(ノヲ節)とS2(後続節)の関係は「対抗動作性」だけでは説明できないと考えられる。更に、次の用例も参照されたい。

- (7) たとえば、ソニーがはじめてテレビに取り組んだとき、ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのを、うちだけはクロマトロン方式をとったのです。 [わが友本田宗一郎 1992]

(7)では、S2において「うちだけは～とらなかった」という「対抗動作性」解釈が可能ではあるが、S1が対象として一方的な働きかけを受けるかについては考える必要がある。(8)は、(7)のS1とS2を入れ替えた例文である。

- (8) うちだけはクロマトロン方式だったのを、ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式をとった。 (作例)

(8)では、(7)におけるS1、S2の各事態が逆転した形で現れても、文は成立している。これは、S2を「遮る」のような述部として捉えることでは、導き出されない現象であると思われる。

以上を考えると、(6)、(7)においては、「AがBを遮る」のような構文型からの写像による「対抗動作性」以外の意味を持ち、S1とS2の連結関係についても、見直す必要がある。次節では、「対抗動作性」が表す他動関係の再検討を行い、4節からは(6)、(7)のような文の連結関係について考えたい。

3. 接続ノヲ文における「対抗動作性」が表す他動関係について

天野(2011)の分析では、すべての接続ノヲ文が「対抗動作性」による他動関係で説明されているが、ここでは、典型的な「他動関係」を表す接続ノヲ文は次のようなものであると考える。

- (9) 普通なら辛くて、逃げ出すかノイローゼになるのを、じっとその重みに堪えて頑張ってるんだわ。 (天野 2011)
- (10) 話しているうちにだんだん激して来、意造は思わず涙声になるのを、相手が佐穂だとやはり遠慮があり、立って鼻をかんでくると、あらためて佐穂に意見を求めた。 [蔵 1993]

(9)、(10)のような文を典型的な「他動関係」を表すものとした理由として、意図的な「対抗動作」を行う動作主と対象であるノヲ節との関係が明らかである点が挙げられる。(9)では「頑張ってる」者、(10)では「意造」がそれぞれ主語であり、ノヲ節に対して「対抗動作」を行う「AがBを遮る」行為における動作主Aである。ところが、(11)のような用例では、動作主の在り方が(9)、(10)とは異なっていると思われる。

- (11) つまりこの山は戦前、日本人が事務を取り、満人や朝鮮人が坑夫となって採鉱していたのを、いまはその上下を逆さにしたかたちで経営が再開されたそうであった。 [朱夏 1998]

(11)では、「対抗動作性」がS2における「～上下を逆さにした」から読みとれる一方、「で」を伴う副詞成分になっている。また、(11)の文における動作主は「Aが」のような主語として現れず、「～に(よって)」句として潜在化されている。すると、ここでは、天野(2011)の分析における「AがBを遮る」構文型ではなく、「Bを、(Aにより遮)られる」のような表現になっている。

ここで、他動性に基ついた「対抗動作性」を正しく捉えるためには、文中における動作主と対象の在り方を明確にすることが重要である。この点は、Hopper & Thompson (1980)による他動性のパラメータにおいても、動作主と対象といった2つ以上の参加者の存在がパラメータの一つとして挙げられており、これは接続ノヲ文におけるS1とS2が他動関係により結びついているとすると、明確に考慮すべきものである。

この点を念頭に入れると、(12)、(13)の用例において、動作主の在り方に違いがあることが分かってくる。(12)のように、他動関係を表す接続ノヲ文は、S1事

態へ「対抗動作」を行う動作主「私」が接続ノヲ文の主語である。

- (12) 私はワシントンに行ってそれからウィーンに会議で回る予定だったのを、ワシントンからいっぺん帰ってきて、まる一日半東京にいて、その後またウィーンの会議に行くというようなことで、査定のための作業を東京で一日するために十四日に帰ってまいります。 [科学技術の新世紀 2002]

それに対して、(13)では、S2事態において「経由する」のような対抗動作を行う動作主があるとしても、文末に「になる」のような表現が後続し、それが文全体の主語にはなっていない。

- (13) これまでロシア経由であったのを、今回の旅では初めてウィーンを経由(往途、帰途とも宿泊)することになった。

[遥かなるチェルノブイリ 2003]

以上の議論をまとめると、主語として動作主の存在が現れる接続ノヲ文の解釈は(14)のようになり、これを最も的確に表すための典型的な他動関係における「対抗動作性」の意味は(15)のようなものになる。

- (14) S1ヲ S2[(動作主Aガ)サエギル]

- (15) 「対抗動作性」：動作主Aが主語としてS1の進行方向を「遮る」
意図的な行為

本研究では、このような「対抗動作性」を表す他動関係の接続ノヲ文のタイプ(9)、(10)、(12)を「対抗動作」型と呼ぶ。4節では、再検討した(15)の「対抗動作性」を踏まえながら、S1とS2の連結が他動関係になっていないと見える接続ノヲ文を検討する。

4. 「対比関係」を表す接続ノヲ文について

4.1 「継起的対比」を表す接続ノヲ文

前述した(13)の用例を含めて、以下の文は、S2の内容が「対抗動作性」を含みながらも、それが(15)のような意味とは異なり、典型的な他動関係にはなっていないと思われる用例である。

(16) これはもと小紐の結びが左腰にあつたのを、後に正面に結ぶやうになつたために、別に忘緒といふものを作つて垂れたので形式主義に囚はれたことであつた。 [江馬務著作集 1988]

(17) 以前は出来あがりをAMGに持って行って改造してたのを、製造途中にAMGが手をつけることでかなーりAMGチューンの価格が安くなったのです⁶。 [Yahoo!知恵袋 2005]

以上の用例は、S2の文末表現が受動形、「なる」表現になっていることが特徴的である。また、S2の「対抗動作性」に該当する部分はマーカーで示した部分であり、ここでの動作主は接続ノヲ文全体の主語ではない。一方、天野(2011)においても、このような用例が取り上げられているが、「対抗動作性」の推論による他動関係で説明されている。

(18) というのも、その年、国民総動員ということで、ほんとうは五年制だった女学校を四年で卒業になり、おまけに入学が決まっていた東京の学校が三月の空襲で焼けて自宅待機ということだったのを、ちょうど家の近くに疎開して来た、療品廠という海軍の医療品をあつかう部門で四月から働くことになっていたからだった。

〈自宅待機が継続する方向性〉→←〈4月から自宅外で働く〉 (天野 2011)

⁶ 本文の(17)の文においては、動作主の「AMGが」が存在するが、「手をつけることで」の副詞成分内にあるため、接続ノヲ文全体の主語ではないと判断される。一方、i)のように動作主「AMG」を主語にし、「なる」表現無しで、接続ノヲ文の「対抗動作」型文の解釈ができる。

i) 以前は出来あがりをAMGに持って行って改造してたのを、製造途中にAMGが手をつけた。

ただし、(18)における対抗動作性の意味「4月から自宅外で働く」が「AがBを遮る」のような構文のベースから得られるとしても、動作主の在り方、「になる」表現により、S2の事態は全体的に意図性が低くなっている。また、(16)～(18)の他に、以下の用例においても、受動表現、「なる」などの表現、動作主の在り方を考えると、S2に「対抗動作性」が存在するとしても、全体的には意図性が低くなっている文であると考えられる。

- (19) また大久保教隆・幸信にしても元々は秀忠の側近であり、慶長十九年(千六百十四)の大久保忠隣の改易に連座していたのを、寛永五年に家光に赦免された存在である。 [江戸幕府直轄軍団の形成 2001]

- (20) はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉だったのを、父母や祖父母と一緒に口ずさんでいるうち、いつか、生活責任者・保育者としての心情も移しこめるようになったのだと思うのです。

[日本子育て物語 1991]

上記の文において、「対抗動作性」を表す部分は、S2のマーカー部分で、(19)では「赦免された」という受動表現になっており、(20)では「ようになった」という表現になっている。また、(21)での意図性についても考えたい。

- (21) 将来のコミッショナー候補といわれるまでになったサンデー・アルダーソンがいい例だろう。ハーバード大学を卒業して弁護士事務所働いているのを、契約の専門職にとアスレックスにさそわれ、四十代初めでGMになった。 [野球は言葉のスポーツ 2002]

(21)において、「弁護士事務所」をやめたのは「サンデー・アルダーソン」の意志と推論されるが、「アスレックスの誘い」から「GMになる」結果までは意図的なものではないと考えられる。

ここで、これらの接続ノヲ文における意図性の低下を考えるために、文末の「なる」表現について検討したい。森田・松木(1989)は、「ことになる」について「活用語の連体形を受けて自然成立を表す。……中略……自分の意志とかかわ

りなく何かが決まったことや自然の成り行きによってある事態が生じたことなどを表現する(森田・松木 1989:242)」と記述している。この点に基づいて、文末に「なる」的な表現(受動表現を含めて)が現れる接続ノヲ文を考えると、この文におけるS2の事態には、「対抗動作性」が存在しながらも、全体的に意図性が低くなった「なりゆき」による結果が現れていると言えるだろう。

一方、S2の事態の意図性の低下は、S1との他動関係においても、いくつかの変化をもたらす。まず、S2の事態の内容がS1の事態からの結果になっている点から、両事態は時間的な継起関係で成り立っている点が挙げられる。

- (22) この時の保健大臣だったフラビエール氏も、IRRM(国際農村復興運動)という主に地域開発の活動をしているNGOの代表だったのを、ラモス大統領によって任命されたばかりだった。 [火曜日はマーシーの日 2002]

(22)では、「フラビエール氏」の以前の「NGOの代表」の状態がS1で示され、変化後の「保険大臣」の状態がS2で読みとられる。また、この接続ノヲ文では、S1における「以前は」、「戦前」、「これまで」、「はじめは」などの表現や、S2における「いまは」、「後に」などの時間的表現などが用いられ、両事態の継起的関係を対比的に示している点も挙げられる⁷。つまり、このタイプの接続ノヲ文の意味は「S1の状況が変化してS2の結果になる」という意味になり、S1の事態には変化前の状況、S2の事態には変化後の結果が「対比的」に示されていることになっている。この「継起的」で「対比的」な関係は、次のような文において、明確に現れている。

- (23) …いわば、最初は典子が主体であったのを、いつのまにか竜夫と逆の位置になった。 (レー 1988、省略は筆者による)

以上の議論をまとめると、この接続ノヲ文は、接続ノヲ節S1と「対抗動作性」を含む「なりゆき」の結果を表す後続節S2が、時間的に継起した対比関係を表し

⁷ 本文の(21)においても、S1に「以前は」、「もとは」などが潜在していると思われる。

ていると考えられる。本研究では、このような接続ノヲ文を「継起的対比」型と呼ぶことにする。この「継起的対比」型文は、「なる」的な表現、意図性の低下と共に他動関係が弱くなる一方、時間的に継起する両事態が対比する関係により結び付けられている文である。

4.2 「同時的対比」を表す接続ノヲ文

この節では、次のように、S1とS2の両事態に、それぞれ対比の「は」が含まれており、両事態が対比的に示されている文を検討する。

- (24) 『暗殺の年輪』で紹介されているところを引用すると……中略……実際の鶴ヶ岡城は平城であったのを、五層の天守閣と立派になっている。

[藤沢周平を読む 1995]

- (25) ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのを、うちだけはクロマトロン方式をとったのです。 ((7)の再掲)

- (26) 日本ではあまり個人の意見を言わないように指導しているのを、欧米では自分の意見を積極的に述べるように教育している。 (作例)

上記の文においては、それぞれ、「藤沢周平が小説の『暗殺の年輪』の中で、実際とは異なる描写をした」、「うちだけは～とらない」、「欧米では～指導しない」のように「対抗動作性」が推論されるであろう。しかし、前述したように、これらの文は、S1とS2の事態の逆転が可能なので、ここでの接続ノヲ節は単なる他動関係の対象ではないと思われる⁸。

- (27) 藤沢の小説では、五層の天守閣と立派になっているのを、実際の鶴ヶ岡城は平城として建てられている。

- (28) うちはクロマトロン方式だったのを、ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式をとったのです。

⁸ 本文の(24)、(25)は、事態を逆転させる際、もとのS1の文末表現の「である」、「だ」を動詞に変更した。接続ノヲ文には、決定的に文末表現が動詞でなければならない制約があり、この点については格助詞「を」の機能が希薄化しているものの、ある程度残存していることによると思われる。

- (29) 欧米では自分の意見を積極的に述べるように教育しているのを、日本ではあまり個人の意見を言わないように指導している。

このような特徴は、3節で述べた「対抗動作」型の文には見られないものである。次の用例を参照されたい。

- (30) a 意造は思わず涙声になるのを、相手が佐穂だとやはり遠慮があり、立って鼻をかんでくると、あらためて佐穂に意見を求めた。 [蔵 1993]
b *相手が佐穂だとやはり遠慮があり、立って鼻をかんでくると、あらためて佐穂に意見を求めるのを、意造は思わず涙声になった。

他動関係である(30a)において、(30b)のように、働きかけの対象としてのS1が述部として現れることはあり得ない。このような一方的な働きかけ性については、ヤコブセン(1989)が指摘した他動性における支配的關係からも確認できる。典型的な他動性において、対象は動作主により一方的な働きかけを受けるものになっているが、この節で扱っている接続ノヲ文におけるS1とS2においては、その支配的關係が弱まっていると考えられる。

ここでこの接続ノヲ文でなぜ支配的關係が弱くなるかについて考えたい。(24)～(26)の接続ノヲ文におけるS2の「対抗動作性」は、S1の事態に直接的に働きかけないことに手がかりがあると思われる。例えば、次のようにS2の「対抗動作性」は、S1から推論される方向性(括弧の部分)を「遮っ」ているが、それがS1の事態を「遮る」ことにはなっていない。

- (31) S1:ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのを、
(うちもこの方式をとる方向性) S2:うちだけはクロマトロン方式をとった

一方、「対抗動作」型文における「対抗動作性」は、S1から推論される方向性(括弧の部分)を「遮る」ことが、S1事態の成立を「遮る」ことになっている。

(32) S1:意造は思わず涙声になるのを、(泣く事態が成立する方向性)

S2:相手が佐穂だとやはり遠慮があり、立って鼻をかんでくると、…

以上の議論から、(31)のような接続ノヲ文の「対抗動作性」は、他動性という観点に基づいて見ると、S2がS1を支配するものにはなっていないと考えられる。この点、(24)、(25)、(26)の他に、次のような文でも同様である。

(33) 厳格なペースで貫かれているテンポをベートーヴェンが作品三十一の一の根底に置き、それを前提にして作曲しているのを、グルダは、このソナタにとっては特性となっている細部を暗示してみせしてくれそうにもみえる。 [ベートーヴェン32のソナタと演奏家たち 2003]

また、(33)におけるS1の「ベートーヴェンの作曲」とS2「グルダの演奏」の関係は、支配的關係というより、対比的に示されている。更に、(34)のような文では、「何もできずにいる」という意味で、(15)のような「対抗動作性」の意味はなくなっていると思われる。

(34) しかしそんなことよりも、いまや敵の無差別爆撃に、戦闘員ならぬ女子どもまでが殺されていくのを、軍人である自分が、なす術もなく手をこまねいている。 [雷撃深度一九・五 2001]

以上で検討したタイプの接続ノヲ文においては、S2の「対抗動作性」がS1を「遮っ」ていないことで、両事態の支配的關係が弱くなっていることが確認された。この接続ノヲ文においては、S1とS2の支配的關係の弱化により、他動關係がなくなり、両事態の対比的な接続關係へと変化している。したがって、意味的には、対比關係を表す接続助詞用法(森田・松木 1989)の複合辞「に対して」に近くなり、(24)、(25)、(26)の文における「のを」との置き換えも可能である。

(35) 実際の鶴ヶ岡城は平城であったのに対して、五層の天守閣と立派になっている。

- (36) ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのに対して、うちだけはクロマトロン方式をとったのです。
- (37) 日本ではあまり個人の意見を言わないように指導しているのに対して、欧米では自分の意見を積極的に述べるように教育している。

これまでの特徴をまとめると、このタイプの接続ノヲ文は、両事態の「対比」関係で成立している。ただし、4.1の「継起的対比」型はS1とS2の逆転が難しい点で、この節で扱っている接続ノヲ文と異なっている。

- (38) a これまでロシア経由であったのを、今回の旅では初めてウィーンを経由(往途、帰途とも宿泊)することになった。
- b ??今回の旅では初めてウィーンを経由(往途、帰途とも宿泊)する ことになったのを、これまでロシアを経由していた。

(38)の「継起的対比」型の文は、時間的前後関係が問題になる対比であるが、この節で扱っている文は、時間的前後関係が問題にならず、同時的な「対比」を表すと考えられ、本研究では、接続ノヲ文の「同時的対比」型と呼ぶことにする⁹。以上の議論から、接続ノヲ文の「同時的対比」型文においては、S1とS2における支配的關係が弱くなり、他動的な関係がなくなる一方、両事態が対比的な接続関係により結び付けられていることが確認できた。

5. 複合助詞ノヲの格助詞用法から接続助詞用法へ

これまでの議論を基に、接続ノヲにおける用法の位置付けについて考えたい。まず、本研究では、接続ノヲを、承接上の特性といった加藤(2006)の指摘にしたがって、助詞「を」と形式名詞「の」が結合された複合助詞として捉える。また、これらの形式を複合助詞とするもう一つの理由は、レー(1988)の対比関係の連体節¹⁰における「格表示機能の希薄化」と接続助詞化に関する議論に基づいている。

⁹ ここで、「同時的」といった用語は、S1の事態とS2の事態が同時的に行われるという意味ではなく、対比される際、時間的前後関係が問題にならないという意味として用いた。

¹⁰ レー(1988)においては、「の」節の分類を詳しく行っているが、その内、対比関係の連体節類に

レー(1988)では、(39)、(40)の対比関係の連体節について、先行の底部¹¹の「無形化」により、名詞性が喪失し、格表示機能が希薄化しているものと捉えている。

(39) 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、
「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにや住所の控えはあるから」

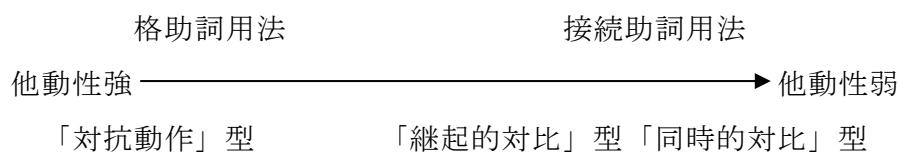
((1)の再掲)

(40) ……いわば、最初は典子が主体であったのを、いつのまにか竜夫との逆
の位置になった。

((23)の再掲)

(39)は本研究で言う「対抗動作」型であり、(40)は「継起的対比」型であるが、両方のノヲ節においては、それぞれ名詞性の喪失、格表示機能の希薄化が認められる。また、両者は「のに」のような接続助詞と交替可能である点で、どちらも接続助詞としての機能を有している。以上の点から、本研究で扱っている助詞「を」は、形式名詞「の」との複合に加えて、名詞句と動詞との文法関係を表示するといった格助詞の性質から逸脱しており、接続助詞化していると考えられる。ただし、本研究では、接続ノヲ文において、「対抗動作性」による他動的な性質の残存を認めており、「対抗動作」型においてはそれが強く残っており、「(継起的・同時的)対比」型においてはそれが弱くなっていると考えられる。すると、複合助詞ノヲの用法は「他動性の強弱」に基づいて考えると、次のように格助詞用法から接続助詞用法への連続性が捉えられる。

(41) 複合助詞ノヲ用法における連続性¹²



本研究における接続ノヲ文が含まれている。詳細はレー(1988)を参照。

¹¹ 連体節の主要部(Head)のことを言う。

¹² 本研究では、接続ノヲ文の「継起的対比」型、「同時的対比」型における他動性弱化の程度性については考察しなかった。この点、「対抗動作性」がS1の事態を直接的に「遮る」かどうかについて考えると、「継起的対比」型より「同時的対比」型において、更に他動性が低くなっていると予測される。

以上の議論から、本研究では、複合助詞ノヲの用法において、「対抗動作性」の推論による意味に支えられた他動関係を表示する「格助詞用法ノヲ」から、「対抗動作性」の他動性が弱くなり「対比」を表す接続関係を示す「接続助詞用法ノヲ」に連続していると捉える。

6. まとめ

本章では、複合助詞ノヲの用法について、「対抗動作性」と接続関係を考慮し、接続ノヲ文のタイプを、「対抗動作」型、「継起的対比」型、「同時的対比」型の3つに分けた。それぞれのタイプは、他動的な意味である「対抗動作性」が含まれ、両事態が連結されているが、「継起的対比」型、「同時的対比」型においては、他動性が弱められ、接続関係により結び付けられている。この点から、複合助詞ノヲの用法においては、「他動性の強弱」を基準とした格助詞用法ノヲと接続助詞用法ノヲの連続性が捉えられる。

ただし、本研究においては、「継起的対比」型、「同時的対比」型における接続が、「のに」、「に対して」などの複合辞の接続助詞用法とどのような違いがあるかという点については検討できなかった。丹羽(1998)における「のに」の「話者の推量・希求に反する」の意味や森田・松木(1989)、グループジャマシイ(1998)、横田(2006)による「に対して」の「対比」の意味と比べるとどのような違いが存在するのかという問題が残っており、これらは今後の課題としたい。

第5章

接続助詞として機能する「ところを」について

1. はじめに

本章では、「ところを」が接続助詞として機能するときの文を対象にし、「ところを」の意味的な特徴と機能を検討する。(1)はトコロ節が用いられる構文の用例であるが、(1 a)のような文におけるトコロ節は目的語として扱われるか副詞句として扱われるかということが問題になるものであり、(1 b)のような文における「ところを」は接続助詞として機能するものである。

- (1) a 警察は犯人が逃げていくところを捕まえた。
b 晩までに二十枚は仕上げる積りのところを、十枚も出来ぬことが折々ある。

先行研究においては、(1 a)のトコロ節が副詞句であるか(Harada 1973)、目的語であるか(杉本 1994)¹といった議論がある一方、(1 b)における「ところを」はどの立場においても目的語ではないと分析されている。本章では、(1 b)のような「ところを」文(以下、接続トコロヲ文)における「ところを」(以下、接続トコロヲ)を中心に、接続助詞として意味的な特徴と文法的な機能を考察する。

¹ 加えて、「警察は犯人が逃げていくところを捕まった」における動詞「捕まる」、「見つかる」などは、他動詞の性質を残した特殊な自動詞の「受動詞」(杉本 1991)であり、目的語をとる性質をもっている。本研究では、「受動詞」と共起する「ところを」は目的語であるとみなす。

2. 先行研究

(1b)のような「ところを」の意味と用法については、主に複合辞の研究でよく記述されている。まず、森田・松木(1989)における「ところを」の接続助詞用法の記述から確認すると、「活用語の終止形を受けて、成立寸前の事柄を表す前件が、その自然な進展を何かに妨げられて、予期に反する事態を表す後件に結びついたことを示す。(森田・松木 1989:118)」と述べられており、次のような用例が挙げられている。

(2) 郵便函を見に行って帰ってくる処を兄に見つけられたのです²。

(森田・松木 1989)

(3) もう少しで優勝するところを、ミスして負けました。(森田・松木 1989)

一方、田中(1996)では、形式名詞「ところ」と格助詞の複合形式における文中での用法・意味などを考察している。その中で、この種の「ところを」を補文節(補足節)³と捉え、一次的用法<トコロヲ①>とそこから派生した<トコロヲ②>に区分している。この分類においては、<トコロヲ①>用法は(1a)のような文における「ところを」のようなものであるが、本章で扱っている接続トコロヲ文に当たるものは<トコロヲ②>用法である。

(4) 目覚ましを7時にセットするところを9時にセットしてしまったために授業に遅刻してしまった。(田中 1996)

(5) 食前に飲むところを食後に飲んでしまったために薬が効かなかった。

(田中 1996)

田中(1996)は、例えば(5)において、「(飲むべき)ところを(飲ま)ないで」という構造から、「～しないで」の否定行為の省略、「本来なら当然～すべきであ

² この用例は、森田・松木(1989)においては、接続助詞用法として扱われているが、本研究では後述するようにトコロ補部(目的語)として扱う。

³ 益岡・田窪(1992)では、従属節を大きく補足節、副詞節、名詞修飾節に分けているが、その内、補足節は述語の意味を補う働きをするものとして捉えている。田中(1996)では、益岡・田窪に従い、この「補足節」の用語を「補文節」としている。

るのに」といった逆接的な表現の意図があること、後件に「間違えて」、「うっかり」、「意外にも」、「たまたま」などの副詞的な意味が含意されていること、〈トコロヲ②〉の前に本来意図されるべき行為として「～べきの」、「～はずの」などの意味が含意されていることなどの特徴を指摘しながら、接続助詞に近い性格が感じられると述べている。

また、近藤(1999)においても、「ところ」の意味の違いに注目し、複合辞の「ところを」をA型とB型に分けている。(6)、(7)におけるペアは、それぞれの「ところを」型における直接目的語としての意味・機能(a)と副詞節としての意味・機能(b)を示す。ここで、近藤(1999)では、このような(a)と(b)の関係を直接目的語から副詞節へ副詞化されたものとして捉えている⁴。

(6) A型「ところを」

- a 私は、次郎がつまみ食いをしているところを(見つけた/捕まえた)。

〈目的語、意味：場面・さまを〉

- b 次郎はつまみ食いをしているところを(捕まった/捕まえられた)。

〈副詞節、意味：際に・ときに〉

(7) B型「ところを」

- a 太郎がやるはずであったところを次郎がやった。

〈目的語、意味：事柄・ことを〉

- b うまく行けば勝てたところを、私のミスで負けてしまった。

〈副詞節、意味：のに〉

以上の先行研究における記述は、「ところを」の意味的な特徴と用法をさまざまな観点で捉えているが、一部の先行研究(森田・松木 1989、近藤 1999)における「ところを」用法の分類に関して、副詞節あるいは接続助詞用法の捉え方における相違点が見られることを指摘したい。

⁴ 例えば、近藤(1999)は、次のような述語省略の可能性を取り上げている。このような述語の省略を経て「のに」のような逆接を表す意味へ副詞化が行われると捉えている。詳細は近藤(1999)を参照。

i) a 私はやむを得ず、口で云うべきところを、筆で申し上げる事にしました。

b 私はやむを得ず、口で云うべき義務を怠って、筆で申し上げる事にしました。

(8) a 郵便函を見に行って帰ってくる処を兄に見つけられたのです。

(森田・松木 1989)

b 次郎はつまみ食いをしているところを捕まえられた。(近藤 1999)

(9) a もう少しで優勝するところを、ミスして負けました。

(森田・松木 1989)

b うまく行けば勝てたところを、私のミスで負けてしまった。

(近藤 1999)

(8 a)、(9 a)は、森田・松木(1989)においては接続助詞用法として、(8 b)、(9 b)は近藤(1999)においては副詞節として取り上げられている用例である⁵。しかし、筆者の判断では、(9)は(8)とは文法機能が異なっていると思われる。その相違点としては、(8)のa、bにおける「ところを」は主節動詞が行われる瞬間とかかわるものであり、(9)のa、bでは逆接の意味合いを持って主節事態と結びつけられる従属節⁶を表していることが挙げられる。したがって、(8)は、田中(1996)における<トコロヲ①>にあたるものであり、文法的機能と意味的な特徴⁷が目的語としての「ところを」と共通しているという点から、本研究の考察対象ではないと判断する。

本章では、主に(9)のような接続助詞用法、田中(1996)における<トコロヲ②>の用法における先行研究の指摘を中心に検討を行い、以下のような接続トコロヲ文の特徴について議論したい。

⁵ 近藤(1999)の分析では、i a)の「ところを」節は副詞化されていないと判断しているのに対して、i b)の方は副詞化されていると見ている。そのように判断する根拠については示されていない。

i) a 次郎はつまみ食いをしているところを見つけられた。

b 次郎はつまみ食いをしているところを捕まえられた。

⁶ 本研究における従属節については、益岡・田窪(1992)における従属節の分類とは別に、連体節を除外した、複文において主節との関係を表す節に限定した狭い捉え方をとる。

⁷ そのような判断の根拠として、①杉本(1994)におけるトコロ構文に用いられる動詞と本文の(8)のような文に用いられる動詞が一致する点、また、②加藤理恵(2010)における「ところを」節における<対象を観察し、時機を待って首尾よく><対象に働きかける>という意味がトコロ構文と(8)の文において同じく存在する点が挙げられる。

i) a 警察はその泥棒が逃げて行くところを(呼び止めた/捕まえた/襲った)。

b その泥棒は警察に逃げていくところを(呼び止められた/捕まえられた/襲われた)。

- (10) というのも、ほんとうは次男坊ですから、「次郎」と名づけられるべきところを、七番めに生まれたということで「七郎」とつけられました。

[きんさんぎんさん百年の物語 2001]

例えば、(10)のような接続トコロヲ文における「ところを」節の事態は、(8)のような文の「ところ」節の事態とは違って、まだ成立していない「未成立」事態である。また、「ところを」の前には、「べき」などの「当為性」を表すモダリティ表現が現れ得る。これらは先行研究において意味的な特徴として指摘されているところでもあるが⁸、その特徴が文中でどのように現れるかに関する詳細にまでは立ち入っていないと思われる。また、このような意味的な特徴が、述語の省略によって説明されている点も挙げられる。例えば、近藤(1999)では、(11)のように(「～を怠って」のような)述語省略により節内に「予定、手筈、義務、習慣」の意味が含まれる可能性を取り上げているが、(12)、(13)の文のように省略述語の想定しにくい用例が多いため、本研究では別の可能性を考えたい。

- (11) a 私はやむを得ず、口で云うべき義務を怠って、筆で申し上げる事にしました。

- b 私はやむを得ず、口で云うべきところを、筆で申し上げる事にしました。
(近藤 1999)

- (12) おかげで陛下のご勘気にふれて、一時は二郎さまの御身もあやうくなるところを、太上老君があいだにはいつて事をおさめられたとか。

[乱紅の琵琶 2001]

- (13) ジフテリアで死ぬところを血清療法のお陰で助かった人も多い。

(田中 2010)

以上で、先行研究の概観と更に考える必要がある点などを検討した。次節から、この接続トコロヲにおける節内の「当為性」、「事態未成立」といった特徴のあ

⁸ 例えば、このような「ところを」節に関して、森田・松木(1989)における「成立寸前の事柄を表す前件」といった記述や、田中(1996)における「本来ならば当然～すべきであるのに」といった記述から、それぞれ本研究で取り上げている「事態未成立」と「当為性」が読みとられる。

り方、また、その特徴がどのように文中において現れるかについて考察する。このような議論をまとめて、接続トコロは逆接を表す接続助詞として機能していることを確認したい。

3. 接続トコロ節の意味的な特徴

3.1 節内における「当為性」と「事態未成立」について

前述したように、接続トコロは、主節動詞との関係が見られず、主節との関係において、主に逆接の意味合いを表す機能を持つものである。接続トコロ節の意味的な特徴を捉えるためには、先行研究で述べられた「本来なら当然～すべきであるのに」(田中 1996)、「成立寸前の事柄を表す前件」(森田・松木 1989)といった内容を再検討する必要がある。

まず、接続トコロ節において、田中(1996)における「本来なら当然～すべきであるのに」といった内容になっていることについては、(14)～(15)のように「べき」などの当為的なモダリティ表現が現れ得るという点を考える必要がある。

- (14) というのも、ほんとうは次男坊ですから、「次郎」と名づけられるべきところを、七番めに生まれたということで「七郎」とつけられました。

[きんさんぎんさん百年の物語 2001]

- (15) そもそも文明進化と共に、機械化され便利になるべきところを、やたらに複雑多量化して、操作する人間を困らせているのが、電子式スイッチの稚拙さである。

[ヒット商品を生み、ベストセラー、ロングセラーにするための条件 1997]

また、接続トコロ節は、以下のように「～なければならない」、「～ればいい」、「～たい」のような表現も含むことができる。

- (16) 本来なら健康保険から脱退しなければならないところを、自分で望んで「加入させてもらう」わけですから、保険料の納付期限にも厳しい制限があります。 [退職・転職の「年金・保険・税金」がわかる本 2001]

- (17) すぐにでもタクシーに乗ればいいところを、そのままぼんやりと待ちあ

わせの人たちの中で立ち尽くしていた。 [不実なくちびる 2004]

- (18) だからこそ犯人は、殺害現場からすぐに立ち去りたいところを、時間を費やして窓ガラスをシャンプーで洗った。 [万華狂殺人事件 2004]

上記の「ところを」の前の表現は、「～たい」を除くと、いわゆる当為判断を表す評価のモダリティ(日本語記述文法研究会(編) 2003)、あるいは価値判断のモダリティ(益岡 2007)であり、益岡(2007)によると、事態の望ましさという評価を表すものとされている⁹。また、益岡(2007)では、願望を表す表現「～たい」においても価値判断の意味への拡張¹⁰が認められることを指摘しているので、本研究における当為的な表現として扱ってもよいと思われる。

以上を見ると、接続トコロヲ節におけるモダリティ的特徴は、「当然成立すると予期される事態、あるいは当然成立するのが望ましい事態」への判断といったものになると思われる。したがって、本研究では、接続トコロヲ節におけるこのような意味的な特徴をまとめて、「当為性」と呼ぶことにする。

一方、「当為性」モダリティ表現が用いられずに接続トコロヲ文が成立している用例も存在する。

- (19) そうすれば本来はこの2駅間の移動用の切符を買うはずのところを、2駅間は周遊指定地間の移動ということになりますから、一般周遊券に組み入れることができるようになるのです。

[JR切符のかしこい買い方 1993]

- (20) 家禄没収の上切腹を命ぜられるところを、甲斐の庇護によって救われた隼人としては、甲斐の命令は断れなかった。 [虹の刺客 1999]

- (21) もうすこしで優勝するところを、ミスして負けました。

(田中 2010)

- (22) がけから落ちるところを、運よく助かりました。

(田中 2010)

⁹ 詳細は、益岡(2007)を参照。

¹⁰ 益岡(2007)によると、次のように「べきだ」と「～たい」の交替現象が取り上げられ、意味的な特徴の類似性が捉えられている。詳細は、益岡(2007)を参照。

i) a 大学入試センターへの申請が必要となるので早めに準備しておくべきだ。
b 大学入試センターへの申請が必要となるので早めに準備しておきたい。

(19)の「ところを」節内は、蓋然性を表す認識モダリティ「はず¹¹」が使われており、(20)～(22)においては、モダリティ表現が現れていない。この場合、「本来なら当然～すべきなのに」という「当為性」の意味が、文脈から読みとられるかを検討する必要がある。(19)における「はず」は、「べき」類のモダリティとは異なるものであるが、事態の認識における当然性が含まれている。また、「本来は」などの副詞表現との共起により、「当為性」が読みとられると思われる。一方、(21)のようにモダリティ表現がない場合にも、(23)のように文脈から「当為性」を読みとることができる。

(23) もうすこしで優勝する(～するのが当然である)ところを、ミスして負けました。

この点については、(20)、(22)においても、「そのような事態が起こるのが当然である」のような状況が読みとられるので、文脈による「当為性」は存在していると思われる。

一方、先行研究において指摘された「成立寸前の事柄を表す前件」といった内容についても確認する必要がある。

(24) 「戦争中交際してゐた一女性と、許婚の間柄になるべきところを、私の逡巡から、彼女は間もなく他家の妻になつた。」

[三島由紀夫の世界 1990]

(25) 本来なら、私たちの命がなくなるはずのところを、こういう形ですっきり収めるということで、命乞いをしたんです。

[倉敷・白壁小路殺人事件 2002]

以上の用例における接続トコロヲ節内の事態は、「成立寸前の事柄」なので、基本的に成立していないものが現れる。つまり、「当為性」判断のために取り上

¹¹ 日本語記述文法研究会(編)(2003)によると、「はず」は蓋然性を表す認識モダリティであり、何らかの根拠によって、話し手がその事柄の成立・存在を当然視していることを表すものであると記述されている。

げられる事態は、成立すべき未成立の事柄が対象になっているので、接続トコロヲ節内の事態は「未成立」であることが前提とされていると思われる。本研究ではこの特徴を「事態未成立」とする。この特徴に反して、(26)のように節内の事態が成立したものとして現れると、接続トコロヲ文は成立しにくい。

(26) ??勝つために完璧に準備したところを、ミスして負けました。

一方、(27)のように、「かもしれない」のようなモダリティ表現は、節内の事態が成立していないにもかかわらず、接続トコロヲ節に現れない。ここで、接続トコロヲ節内における「未成立」の事態をどのように判断・認識するかについても検討する必要がある。

(27) *本来なら、私たちの命がなくなるかもしれないところを、…

日本語記述文法研究会(編)(2003)によると、「かもしれない」は蓋然性を表す認識モダリティであり、話し手がその事態を可能性があることと認識していることを表すものとして捉えられている。この点を考えると、(27)の「ところを」節においては、「…死ぬかもしれないし、…死なないかもしれない」のような可能性により、成立と未成立との両方が考慮できるようになる。つまり、(27)は、発話時における節内事態は「未成立」ではあるが、それを捉える話者の認識は、事態成立のいかなの予期に関して不確実であることになっている。一方、接続トコロヲ節における「事態成立のいかな」に対する捉え方は、「事態成立」だけを予期することになっている。ここで、接続トコロヲ文の全体的な意味が、「「ところを」節の事態が起こるべきなのに、後続節で予期に反する事態が起こった」という内容になっている。このような特徴を考えると、接続トコロヲ節における事柄は、「未成立」の事態に対する「事態成立」の予期・当然性を表すものであると捉えられる。したがって、成立・未成立のどちらの可能性も示す表現の「かもしれない」は、接続トコロヲ文には共起できなくなると考えられる。

以上で、接続トコロヲ節の事態における特徴として「当為性」と「事態未成立」が存在することを確認した。このような接続トコロヲ節の事態におけるモダリテ

ィ的な特徴は、後件への結びつきにおいて逆接の関係を示す機能を考える手がかりになると思われる。

3.2 接続トコロヲ節内が形容詞になっている場合

接続トコロヲ節において、この「当為性」と「事態未成立」の特徴がどこまで有効であるかも考える必要がある。例えば、次のような接続トコロヲ節においては、「当為性」、「事態未成立」といった特徴を見出すのが難しいと思われる。(28)の「お忙しいところを」、(29)の「危ないところを」のような形容詞による内容は事態ではなく、状態を表している。つまり、「事態未成立」ではなく、ある状態になっていることを表している。また、渡部(1995)では、このような「ところ」に関して、「当然予期・期待される状態」と言った意味がなく、状態のアスペクチュアルな素性を取り出したものであると指摘している。

(28) お忙しいところを、お足をお運びいただきましてまことにありがとうございました。

(29) 君のおかげで、危ないところを助かった。

この点に関しては、丹羽(1998)の「のに」文における分析が参考になると思われる。例えば、「のに」が表す逆接は「話者の推量・希求に反する」ことであるが、その逆接の多様なあり方の分析のために、「のに」文において次のような推論を用いている¹²。

(30) 花が咲いたのに、誰も気がつかなかった。 (丹羽 1998)

(30)の文において、前件をP、後件をQとした時、前件に対する話者の推論をRとすると、全体的には「P：花が咲いた→R：誰か気づいただろう ⇔ Q：誰も気がつかなかった」という内容になっていることが確認できる。このような推論関係を(31)、(32)の接続トコロヲ文に適用すると次のようになる。

¹² 丹羽(1998)では、「のに」だけではなく、逆接を表す接続助詞の諸相の分析にこのような推論を活用した。詳しくは丹羽(1998)を参照。

(31) お忙しいところを、お足をお運びいただきましてまことにありがとうございます
ございました。

P: 忙しい → R: 来ないのも当然だ ⇔ Q: 予期に反して来てくれた

(32) 君のおかげで、危ないところを助かった。

P: 危ない → R: 被害を受けるのも当然だ ⇔ Q: 予期に反して助かった

(33) お忙しいところを、お呼び出ししたりして申し訳なかった。

P: 忙しい → R: 呼び出さないべきだ ⇔ Q: 予期に反して呼び出した

(34) 生活が苦しいところを、夫に病気で寝込まれた。 (田中 1996)

P: 生活が十分苦しい → R: 夫は元気でなければいけない

⇔ Q: 夫が病気になった(更に苦しくなった)¹³

すると、Pにおける状況から「当為」的に予期される推論Rの事柄は、成立していないことで「事態未成立」の特徴が読みとられるようになる。したがって、(31)～(34)のような文の「ところを」節においても「当為性」、「事態未成立」は存在するようになる。

ただし、田中(1996)において<トコロヲ②>の用例として挙げられている(35)のような用例は、推論を行っても「当為性」、「事態未成立」の解釈が難しいものである。

(35) お楽しみのところをお邪魔して申しわけありません。 (田中 1996)

(36) お忙しいところをお邪魔して申し訳ございません。

しかし、これらは動詞「邪魔する」の目的語としても解釈されるので、接続トコロヲ節とは異なるものと判断される。

一方、この推論は、接続トコロヲ節の事態が形容詞述語である場合に限ってできることで、節内事態が動詞述語により既に「成立」している(37)のような場合にまで有効なわけではない。

¹³ 本文の(31)の用例におけるQには、更に括弧の推論が含まれているが、本研究で行われる接続トコロヲ節における推論とは別のものであるので、説明については割愛する。

(37) ??勝つために完璧に準備したところを、ミスして負けました。

P : 完璧に準備した → R : 勝つのも当然だ ⇔ Q : 負けた

(37)の推論は、成立済みの(実現された)事柄Pに対する「当為」的な結果の予期になっているが、これは「当為性」判断の基本前提、つまり、成立すべき「未成立」事態というものに違反している。これに反して、接続トコロヲ節の形容詞述語の場合は、(状態は存在しているが)成立すべき事柄がなく、後続節とどのような「逆接」関係かも捉えられないため、接続トコロヲ文の「事態が起こるべきなのに、予期に反する事態が起こった」といった基本的意味に従う推論が行われている。したがって、この「事態未成立」、「当為性」の推論は、接続トコロヲ文が持っている基本的な意味に基づいて行われるものであり、推論の対象は主に接続トコロヲ節内の事態が形容詞述語である場合に限られる。

4. 「ところを」の接続助詞的な機能へ

4.1 文末形式の「ところを」との類似性

前節では、接続トコロヲ節における意味的な特徴を「事態未成立」を前提とした「当為性」と捉えた。この特徴は、モダリティ的なものであり、それは、文末形式に見られるものである。この点については、田中(1996)においても「本来なら～すべきところです/ところですが…」のように文末に現れる言い方であると指摘されている。ここで、接続トコロヲ節における「当為性」の特徴と、田中(1996)における文末表現との関連性に関する指摘を合わせて考える必要がある。このような意味的な特徴を見せる表現としては、文末形式の「ところだ」が取り上げられる。森田・松木(1989)では、文末の「ところだ」について、「「しようとするところだ」「するところだ」「しているところだ」「していたところだ」「したところだ」等の形で、実現しなかった事柄の予測や反実仮想を示す(森田・松木 1989:259)」と記述されている。この用法の内、特に接続トコロヲ節と類似性を見せるのは、過去形「ところだった」の表現である。

(38) 敷居につまずいて、危うく熱湯を足にこぼすところだった。

(39) 一足おくれたら、彼女は外出してしまうところだった。

- (40) 「あ、そうだ。うっかり忘れるところでした。あなたに伝言がありました。」
(森田・松木 1989)

森田・松木(1989)は、上記の用例を取り上げて「ある前提から考えて必然的にある事態に至ることが予測される状態であったが、何らかの事情で結果としてはそうならなかったことを表す(森田・松木 1989:259)」と述べている。また、この用法は「しようとするところだ」、「するところだ」の場合にだけ見られるとも指摘している。また、グループジャマシイ(1998)においても、反事実の「ところだ」における「…ところだった」用法が「事情が異なれば起こっていたはずの出来事とその直前のところで避けられたという意味(グループジャマシ 1998:333)」を表すと指摘されている。以上の「ところだった」の特徴を考えると、意味的な面において「当為性」、「事態未成立」が含まれており、接続トコロヲ節と共通していることが分かる。このため、次のように、(41)～(43)の文における接続トコロヲ節は、後件をつなげず、そのまま「ところだった」形式として置き換えても意味は変わりなく容認可能な文になる。

- (41) a 家禄没収の上切腹を命ぜられるところを、甲斐の庇護によって救われた隼人としては、甲斐の命令は断れなかった。 [虹の刺客 1999]
b 家禄没収の上切腹を命ぜられるところだった。
(42) a もうすこしで優勝するところを、ミスして負けました。(田中 2010)
b もうすこしで優勝するところだった。
(43) a がけから落ちるところを、運よく助かりました。(田中 2010)
b がけから落ちるところだった。

また、この用法には次のように「べき」などのモダリティ表現も含まれる。

- (44) 本来なら、その地方の大名の北畠殿が、建物の修復資金を出すべきところだったが、戦があつたり、そのほかいろんな事情で、とても無理だといふことがわかった。
[雪女;夏の日の夢 2003]

(45) もう少し気がつくのが遅ければ、切断しなければならないところだった。

[私も戦争に行った 2000]

したがって、「べきところを」、「なければならないところを」のような接続トコロヲ節も(46)、(47)のように「ところだった」表現に置き換えられる。

(46) a 本来、下水道は欧米のように街作り、道路作りと並行して進めるべきところを、日本はすでにでき上がっていた道路を掘り返さなければいけないから、費用はもちろん、時間がものすごくかかる。

[ニッポンの水準 1994]

b 本来、下水道は欧米のように街作り、道路作りと並行して進めるべきところだった。

(47) a 日本語のメールはISO - 二千二十二 - JPエンコーディングで送信しなければならないところを、internal__encodingのままのエンコーディングで送信してしまいます。 [PHP実用プログラミング 2004]

b 日本語のメールはISO - 二千二十二 - JPエンコーディングで送信しなければならないところだった。

加えて、グループジャマシイ(1998)における反事実「…なら(ば)…ところ だが/を」の用法も取り上げたい。以下の用例において、「ところだが」、「ところを」の使用における機能上の違いはほとんど見られない。

(48) 普通ならただではすまないところだが、今回だけは見逃してやろう。

(グループジャマシイ 1998)

(49) 通常は定価どおりのところを、お得意さんに限り特別に1万円引きになっております。

(グループジャマシイ 1998)

ただし、次のように「ところだが/ところを」の交替は自由ではない。

(50) ??普通ならただではすまないところを、今回だけは見逃してやろう¹⁴。

これまでの考察により、接続トコロヲ節における意味的な特徴は、文末形式の「ところだった」に共通していることが確認され、両方の「ところ」は同じものと捉えられる。

4.2 格助詞「を」の性質について

ここで、「ところ」の後につく「を」とは何かを考える必要性が生じる。田中(1996)は、接続トコロヲ(田中ではトコロヲ②)における「を」の性格を「XをYに」のような「付帯状況的」なものとして捉えている。例えば「7時(にセットするの)を9時にセットする(ことにする)」のような文における「を」と似たような性格で「にする」が省略されたもののよう捉えている。この点に関しては、近藤(1999)でも、B型の「ところを」(本研究では、接続トコロヲ)における述語の省略による接続助詞化が主張されていることを2節で述べた。しかし、近藤(1999)の主張と同様に、田中(1996)における「付帯状況的」な捉え方は省略された要素に頼らざるを得ないものであるが、接続トコロヲ文においては、どのような要素が省略されたのかが捉えにくい。

一方、このような「を」に関するレー(1988)における名詞性の喪失と格関係表示性の希薄化という指摘も参考にしたい。この点に関して、例えば「～のをきっかけに」が「～のがきっかけで」とは違って、「～ことをきっかけに」のように交替ができないことから、「の」の名詞性が低い¹⁵ことと「を」の格関係表示機能が希薄になっていることが指摘されている。また、レー(1988)は対比関係の連体節¹⁶における次のような「の」節文を取り上げて、名詞性が喪失し、「を」格

¹⁴ 本文の(43)の文を、「普通ならただではすまないところを、今回だけは何とか見逃してやった。」のように変えると容認可能な文になるが、これは、主節の文末形式「～てやろう」が断定ではないことが関係しているようである。接続トコロヲ文の後続節では「予期に反する事態が起こった」内容が示される必要があると思われる。

¹⁵ レー(1988)では、例えば「金の卵を産むはずが…」のような表現が「金の卵を産むはずだったのが」の縮まった表現であり、この場合の「はず」が「の」にとって代わっていることが、「の」の名詞性損失による現象であると捉えている。

¹⁶ レー(1988)においては、「の」節の分類を詳しく行っているが、その内、対比関係の連体節における「のを」は、格関係表示機能が希薄化した接続助詞化したものと捉えている。詳細はレー(198

関係表示機能が希薄になることを指摘している。

- (51) 指紋押捺はこれまで五年ごとの登録切り替え時に求めているのを「原則一回」とするものの、市町村長が「人物の同一性に疑いがある場合」などについては押捺を重ねて命令できる。(レー 1988)

レー(1988)によると、(44)のように、「の」節における先行の底部が主題化(「指紋押捺は」のように)、あるいは無形化することにより、「の」の名詞性が喪失すると共に、格関係表示機能も希薄化し、「のを」は「対比」関係を持って節と節を結びつける接続助詞機能に近いものになると述べられている。

この点については、接続トコロヲ文においても適用できると思われる。むしろ、接続トコロヲ節におけるモダリティ的な意味の存在、文末表現との類似性などの特徴を考えると、「のを」における名詞性の喪失より更に格助詞機能が希薄化したものである可能性が考えられる¹⁷。

以上で、接続助詞として機能する「ところを」の「ところ」は、文末形式「ところだった」の「ところ」と同一のものとして捉えられることを指摘した。また、モダリティ的な特徴を持つ「ところ」は名詞性が低くなったものとして、後接する「を」については格助詞機能が希薄化したものとして捉えた。これらの特徴をまとめると、接続トコロヲは、名詞性の喪失した「ところ」と格助詞機能が希薄化した「を」が複合したものとして、接続助詞機能を担っていると考えられる。

5. まとめ

本章では、「ところを」が接続助詞として機能する場合の意味的な特徴を検討した。その特徴として接続トコロヲ節内に「当為性」、「事態未成立」といった特徴が存在することを確認し、これはモダリティ的な特徴であると捉えた。一方、接続トコロヲ節における特徴が、反事実を表す文末形式「ところだった」の意味的な特徴と共通していることを確認し、両方の「ところ」は同一なものであると

8)を参照。

¹⁷ 接続トコロヲ節の名詞性と、後接する「を」の格助詞性の希薄化については、第6章で詳細を検討する。

結論づけた。また、モダリティ的な特徴を持つ「ところ」は名詞性が喪失したものであり、後続する「を」は格助詞機能が希薄化したものと捉えられ、これらが複合した形で、接続助詞機能を持つと捉えた。一方、本章における接続トコロヲ節において形容詞述語が用いられている場合に限って行われる推論については、更に検討を要する部分であるので、今後の課題にしたい。

第6章

格助詞「を」の性質の希薄化の程度性について

1. はじめに

これまで検討した「中を」、「のを」、「ところを」の形式は、基本的に動詞と直接的な文法関係を示さない点、つまり、小野谷(1995)の言う「連語間の意味的な結びつきが緩くなる」ことで、本来の格助詞「を」の機能から逸脱しているものであった。

本研究の第3章から第5章においては、(1)～(3)のような「時間ナカヲ」、「(継起的・同時的)対比」を表す「接続助詞用法ノヲ」、「接続トコロヲ」の形式について、もはや格助詞として機能せず、それぞれ(1)は「状況成分」、(2)、(3)は「接続助詞」として機能することを指摘した。

- (1) 伝玄墨汁の読経が続く中を乗組員たちが順に席を立てて焼香しはじめた。

【時間ナカヲ】

- (2) 厳格なペースで貫かれているテンポをベートーヴェンが作品三十一の一の根底に置き、それを前提にして作曲しているのを、グルダは、このソナタにとっては特性となっている細部を暗示してみせしてくれそうにもみえる。

【接続助詞用法ノヲ】

- (3) というのも、ほんとうは次男坊ですから、「次郎」と名づけられるべきところを、七番めに生まれたということで「七郎」とつけられました。

【接続トコロヲ】

一方、空間ナカヲと他動関係を表す格助詞用法ノヲに関しては、本来の格助詞「を」の機能から変質はしているものの、それぞれ、「副詞格」、「格助詞用法」としての格助詞の機能は保持していることを確認した。

(4) 桜吹雪の中を公園を歩いた。 【空間ナカヲ】

(5) 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、
「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにゃ住所の控えはあるから」

【格助詞用法ノヲ】

本研究の立場に基づくと、(1)～(5)における「を」は用法を問わず、格助詞「を」の本質から希薄化したものと捉えられる。ただし、これらの形式はこれまで検討したように格助詞として機能しているものと他の機能に変化しているものがそれぞれ存在しており、それぞれ形式、用法における「を」の性質の希薄化にも程度性が見られると推測される。したがって、本章では、各形式ごとに、それぞれの文法的な振る舞いから格助詞性を検討し、格助詞「を」の希薄化に程度性が見られることと、複合助詞化について検討する。

2. 問題の所在

従来の格助詞を中心とした研究においては、これらの形式における格助詞「を」の性質がどのように残っているかが捉えられてきた。ここでは観点を変えて、これらの形式が全体としてどのように機能し、格助詞「を」の性質の希薄化がどのようにかわるかを検討したい。

2.1 複合形式における格助詞「を」の性質の希薄化の程度性

これまでの考察により、「中を」、「のを」形式においては、格助詞として機能するものと他の成分として機能するものに分けられることが確認された。ここで、これらの形式における用法間で、格助詞「を」の希薄化がどのように見られるかを検討したい。

まず、「中を」形式における空間ナカヲ、時間ナカヲの例を取り上げよう。第3章で述べたように、空間ナカヲは動詞の「移動性」という意味的な制約がかか

わっており、格助詞「を」の意味的な性質が残存している一方、時間ナカヲの場合は一つの動詞との関係に留まらず、後続節全体における「展開プロセス」解釈により成立が決まっている。この点と関連して、両方の「中を」が南(1974)で言うA類従属節の中に納まるかという現象を確認すると次のような違いが見られる。(＃は、対象の複合形式が従属節内にあるという解釈がしにくいことを示す)

- (6) a 雨の季節には、[いつも小雨の中を公園を歩きながら]、いろんなことを考えた。 【空間ナカヲ】
b #[伝玄墨汁の読経が続く中を乗組員たちが順に席を立てて焼香しながら]、静かに席に戻った。 【時間ナカヲ】

空間ナカヲの場合、(6 a)のようにA類従属節の中に納まることで動詞句内の要素になっているが、(6 b)の時間ナカヲは、A類従属節に納まらない。この点は、時間ナカヲ形式は動詞句内の要素ではないことを示しており、ここでの格助詞「を」は、構造的な位置づけ上、格助詞として機能しない。3節では、このような構造的な位置づけと格助詞性の希薄化について「のを」、「ところを」を含めて検討する。

一方、各形式における形式名詞の名詞性の問題についても考えたい。例えば、天野(2012)では、次のように並立助詞連結などの現象¹を検討し、完全な副詞節である(7 b)の「のに」より「のを」節の方が名詞性があると指摘している。

- (7) a ?多くの実験員が、結果が出ずやめようとするのや、時間がなくてあきらめようとするのを、室長は最後まで目標を捨てなかった。
b ??地域の民謡サークルになじめなかったのや、学校の音楽が嫌いだったのに、オペラに出会って突然音楽の神様が降りてきた。
(天野 2012)

¹ 天野(2012)では、「ノガ交替」、「ト連鎖(並立助詞連結)」、「とりたて助詞付加」、「の」節への連体修飾節付加」のテストを行って、「の」節の名詞性を検討している。この点に関しては本章の4節で詳細を述べる。

ただし、(7a)は第4章で検討した他動関係を表す「対抗動作」型文における格助詞用法ノヲ節である。これに反して、(8)のように「継起的対比」を表す接続助詞用法ノヲ節の名詞性は「のに」に近くなっている。

- (8) ??この時の保健大臣だったフラビエール氏も、環境団体の活動家だったのや、IRRM(国際農村復興運動)という主に地域開発の活動をしているNGOの代表だったのを、ラモス大統領によって任命されたばかりだった。

【接続助詞用法ノヲ】

(7a)と(8)の文法性の差により、他動的関係を表す「対抗動作」型の「の」節、対比関係を表す「(継起的・同時的)対比」型の「の」節における名詞性は異なっていることが言える。このような名詞性の喪失は、レー(1988)の指摘のように格関係表示機能の希薄化にかかわる問題であり、各形式とその用法ごとにこの点の検討が必要であると思われる。

最後に、これらの形式を構成する節が、どれだけ従属節としての独立性を有しているかを検討したい。第5章で述べたように、接続トコロヲは、接続助詞としての用法の他に、次のような述部用法があり、ここでの「ところ」は名詞的なものというより、モダリティ表現とかかわる文的な性質を持っていると考えられる。

- (9) a 家禄没収の上切腹を命ぜられるところを、甲斐の庇護によって救われた隼人としては、甲斐の命令は断れなかった。 【接続トコロヲ】
b 家禄没収の上切腹を命ぜられるところだった。

(9b)のように、この「ところ」節が文の性格を持つことは、節の独立性が認められることになり、ここに後接する「を」はもはや格助詞としての機能はなくなっていると捉えられる。

以上から、本研究で扱う形式においては、①構造的な位置づけ、②名詞性の喪失の程度性、③節の独立性において、各形式と用法ごとに、格助詞性の希薄化の程度性が見られること、形式全体の機能変化と関係していることが予測される。

2.2 複合助詞化について

「中を」、「のを」、「ところを」形式における時間ナカヲ、接続助詞用法ノヲ、接続トコロヲは、格助詞「を」の機能の希薄化の進展と共に、状況成分、接続助詞用法へ変化し、もはや格助詞として機能していない。したがって、このようなものに関しては、形式名詞と格助詞の性質が希薄化した「を」が複合した複合助詞として位置付けることが求められる。

藤田(2006)によると、複合辞とは「いくつかの語が一まとまりになって、その一まとまりが固有の「付属語」(辞)的な意味を担うものとして用いられる形式(藤田 2006:3)」と述べられている²。その内、複合助詞に関しては、「複数の語が結び合わさって、全体として1語の助詞に準する機能を果たすようになった連語のことである(砂川 1987:42)」という砂川(1987)の記述がある。上記の研究を含めて、複合助詞に関する先行研究では、その認定・概念規定に関する問題が議論になっている。特に、本研究の対象になるもの位置づけに関しては、松木(1990)の複合辞の分類の内、「第2種複合辞」にかかわっていると考えられる³。

(10) 第2種複合辞

本来「詞」である名詞のうち実質的意味が薄れている形式名詞を中心にして複合した複合辞。「ものだから」「ところで」「ことだ」などがここに属す。(松木 1990:31)

例えば、松木(1990)では、次の「ところで」は「たとえ～しても」の意味を表わしていると指摘している。

(11) この問題について、いろいろ説明したところで、理解してもらえないに違いない。(松木 1990)

² ここで、永野(1953)によると、複合辞は「複合助詞」、「複合助動詞」を一まとめにして捉えたものである。本研究では、主に「中を」、「のを」、「ところを」形式の「複合助詞」化について議論する。

³ 松木(1990)では、形態の上から、「第1種複合辞」、「第2種複合辞」、「第3種複合辞」の三種に分類している。詳細は松木(1990)を参照。

松木(1990)によると、(11)に関しては「仮定における完了を示す「た」に後続する名詞「ところ」には実質的意味は既になく、格助詞「で」も本来の格表示機能を失い、「ところで」全体で逆接仮定条件を示す複合助詞として機能している(松木 1990:32)」と述べられている。

この指摘は、時間ナカヲ、接続助詞用法ノヲ、接続トコロヲに対しても適用可能であると考えられる。本章では、対象になる形式の全体での文法的な性質を分析しながら、当該の形式における名詞性、格助詞「を」の機能がどのように失われているかを検討し、それぞれの形式における格助詞「を」の性質の希薄化の程度性と複合助詞化について議論する。

3. 構造的な位置づけによる格助詞「を」の性質の希薄化について

格助詞「を」の大きな性質としては、動詞句内の要素であることが取り上げられる。2.1節で述べたように、空間ナカヲと時間ナカヲは、A類従属節の中に納まるかといった点で異なっており、時間ナカヲは動詞句内の要素でないことが確認された。その点、「のを」、「ところを」形式についても検討したい。

まず、「のを」形式における格助詞用法ノヲ節は「対抗動作」型における「対抗動作性」を表す後続節を全体(波線の部分)を「遮る」のような述語とみなすと、「～ながら」に納まる。

- (12) a 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにや住所の控えはあるから」
(レー 1988)
- b [二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにや住所の控えはあるから」と言いながら]、店内に入った。

(12)の「対抗動作」型文に反して、(13)の「継起的対比」型、(14)の「同時的対比」型文における接続助詞用法ノヲ節は、「～ながら」節に納まらない。

- (13) a 失業率は、昨年6.3%まで至ったのを、雇用政策を行って今年は5.8%と低くなっている。
- b #[失業率は、昨年6.3%まで至ったのを、雇用政策を行って今年は5.8%と低くなりつつ]、改善されている。
- (14) a たとえば、ソニーがはじめてテレビに取り組んだとき、ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのを、うちだけはクロマトロン方式をとったのです。 [わが友本田宗一郎 1992]
- b #[ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのを、うちだけはクロマトロン方式をとりながら]、生産プロセスを考えたのです。

ここでは、「対抗動作性」の解釈の問題が関係している。(12)の「対抗動作」型においては、後続節の「対抗動作性」により「のを」節が対象として捉えられており、「～遮りながら」節に納まる。しかし、(13)の「継起的対比」型、(14)の「同時的対比」型文においては、後続節が「遮る」の解釈になっていないことから、「のを」節は後続節「～ながら」に納まっていない。したがって、(13)、(14)における「のを」は、後続節の「遮る」の意味を持つ動詞句内の要素ではない点で、対象として格助詞機能はないことが明らかになる。

また、接続トコロヲも、(15)のようにA類従属節内に納まらないことが確認できる。

- (15) a もう少しで優勝するところを、ミスして負けてしまった。
- b #[もう少しで優勝するところを、何回もミスして負けながら]、内のチームのリーダーは挫折した。

この接続トコロヲは、森田・松木(1989)で捉えられたように接続助詞機能が認められるもので、動詞句内の要素といった格助詞的な特徴は見られない。

以上から確認したように、時間ナカヲ、接続助詞用法ノヲ、接続トコロヲは、構造的に動詞句の外側に位置付けられる点で、格助詞の「を」の本質的な機能から離れていると考えられる。一方、空間ナカヲと他動関係を表す「対抗動作」型の格助詞用法ノヲは、動詞との直接的な関係を示さない点で、格助詞の「を」の

性質が希薄化したものと捉えられるが、動詞句内の要素として認められる点により、格助詞性が残存していると考えられる。

4. 各形式における名詞性の喪失の程度性について

2.1節で述べたように、「のを」における「の」節には、格助詞用法ノヲ節と接続助詞用法ノヲの名詞性の喪失の差が見られる場合があった。ここでは、天野(2012)における「の」節の名詞性の議論に基づいて、他の形式においても、このような名詞性の喪失が見られるかを検討する。天野(2012)では、名詞性の根拠となるものとして(16)の「ガノ交替」(天野(2012)では、「ノガ交替」)、(17)の「並立助詞連結」、(18)の「取り立て詞の付加」、(19)の「「の」節への連体修飾節付加」における「の」節の振る舞いを検討している。

- (16) a その日も、アドリアーナが/の送ってきてくれたのを、まだ時間があるから、このザッテレの河岸を散歩しようとするようになったのだった。
- b アドリアーナが/??の送ってきてくれたので、夜道が怖くなかった。
- (17) a ?多くの実験員が、結果が出ずやめようとするのや、時間がなくてあきらめようとするのを、室長は最後まで目標を捨てなかった。
- b ??地域の民謡サークルになじめなかったのや、学校の音楽が嫌いだったのに、オペラに出会って突然音楽の神様が降りてきた。
- (18) a 体調が悪いからと固辞するのをさえ/も、社長は無理矢理グラスを満たした。とにかく酒を強要する人なのだ。
- b *体調が悪いからと固辞するのでさえ/も、社長はグラスを満たさなかった。
- (19) a 気がかりだった、生徒が諦めようとするのを、教員たちは何度も励ましのことばをかけた。
- b *気がかりだった、生徒が諦めようとするので、教員たちは励ましのことばをかけた。
- (天野 2012)

天野(2012)では、(16)～(19)の(a)における接続助詞的な「のを」節が完全な副

詞節であるそれぞれの(b)の「のに」、「ので」節より、名詞性が高いことが指摘されている。

ただし、上述した「のを」節の文においては、(16a)の文を除くと、本研究で言う「対抗動作」型における格助詞用法ノヲの名詞性だけが検討されている。つまり、本研究で言う「(継起的・同時的)対比」型の接続助詞用法については、この章で改めて検討する必要があると考えられる。2.1節の「の」節の名詞性の観察に加えて、以下、(20)の「並立助詞連結」、(21)の「とりたて助詞付加」、(22)の「の」節への連体修飾節付加の順で検討する⁴。

- (20) a ?多くの実験員が、結果が出ずやめようとするのや、時間がなくてあきらめようとするのを、室長は最後まで目標を捨てなかった。

(天野 2012) 【格助詞用法ノヲ】

- b *この時の保健大臣だったフラビエール氏も、環境団体の活動家だったのや、IRRM(国際農村復興運動)という主に地域開発の活動をしているNGOの代表だったのを、ラモス大統領によって任命されたばかりだった。 【接続助詞用法ノヲ】

- c *日本ではあまり個人の意見を言わないように指導しているのや、中国でもみんなの意見を重視しているのを、欧米では自分の意見を積極的に述べるように教育している。 【接続助詞用法ノヲ】

- (21) a 体調が悪いからと固執するのを{さえ/も}、社長は無理矢理グラスを満たした。とにかく酒を強要する人なのだ。(天野 2012⁵)

【格助詞用法ノヲ】

- b *これまでロシア経由であったのを{さえ/も}、今回の旅では初めてウィーンを経由(往途、帰途とも宿泊)することになった。

⁴ 「ガノ交替」に関しては、井上(1976)の指摘のように、「が」と述語の間に他の要素の介在が、許容度に影響を与える場合がある。i)の「継起的対比」型文の「のを」節では、「弁護士事務所」のような要素の介在により、非文法的な文になる可能性も考えられる。

i) 彼{が/*の}弁護士事務所で働いているのを、契約の専門職にとアスレックスにさそわれ、四十代初めでGMになった。 【接続助詞用法ノヲ】

i)の接続ノヲ節を含め、本研究で扱う形式における節は内容上「が」と述語の介在要素が含まれるものが多く、名詞性の検討のための「ガノ交替」テストは不適切であると判断して用いない。

⁵ 本文の(20a)、(21a)のとりたて助詞付加の文に判定は天野(2012)による。

【接続助詞用法ノヲ】

- c *実際の鶴ヶ岡城は平城であったのを{さえ/も}、五層の天守閣と立派になっている。

【接続助詞用法ノヲ】

- (22) a 気がかりだった、涙声になるのを、相手が佐穂だとやはり遠慮があり、立って鼻をかんでくると、あらためて佐穂に意見を求めた。

【格助詞用法ノヲ】

- b *気がかりだった、以前は出来あがりをAMGに持って行って改造してたのを、製造途中にAMGが手をつけることでかなーりAMGチューンの価格が安くなったのです。

【接続助詞用法ノヲ】

- c *気がかりだった、ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのを、うちだけはクロマトロン方式をとったのです。

【接続助詞用法ノヲ】

上記のように、「並立助詞連結」、「とりたて助詞付加」、「「の」節への連体修飾節付加」の現象において、格助詞用法ノヲと接続助詞用法ノヲの名詞性には差が見られる。(20a)、(21a)、(22a)の格助詞用法ノヲは、天野(2011)において他動的な構文における対象のように解釈されるもので、天野(2012)での指摘のように名詞性が残存している点で、格助詞「を」の性質が残っていると考えられる。一方、(20b、c)、(21b、c)、(22b、c)の接続助詞用法ノヲに関しては、「の」の名詞性が格助詞用法ノヲより低く、むしろ、(17b)、(18b)、(19b)のような接続助詞「ので」、「のに」の「の」に近い名詞性が見られる。

一方、「中を」についても、(23)から順に「並立助詞連結」、「とりたて助詞付加」、「「の」節への連体修飾節付加」を検討すると、空間ナカヲにおいては名詞性が残っているのに対して、時間ナカヲにおいては名詞性が喪失していることが確認される。

- (23) a 太郎はいつも雨の中や、吹雪の中を公園を走った。 【空間ナカヲ】

- b ??観衆の声援の中や、国歌が流れている中を、涙を流しながら(感動して)メダルに見入った。 【時間ナカヲ】

- (24) a 桜吹雪の中を{さえ/も}公園を歩きたくなかった。 【空間ナカヲ】

- b *桜吹雪の中を{さえ/も}落ちる花びらを(ゆっくりと)眺めたくなかった。【時間ナカヲ】
- (25) a 気がかりだった、雨の中をグラウンドを走った。【空間ナカヲ】
- b ??気がかりだった、二人の女性が感心して見つめる中を、ジョシュアは三皿も平らげてから椅子に反り返った。【時間ナカヲ】

一方、接続トコロヲに関してはこれらの現象における名詞性は喪失している。

- (26) a *もう一発で得点するところや、もう少しで優勝するところを、ミスして負けました。
- b *ほんとうは次男坊ですから、「次郎」と名づけられるべきところを{さえ/も}、七番めに生まれたということで「七郎」とつけられました。
- c *気がかりだった、私たちの命{が/??の}なくなるはずのところを、こういう形ですっきり収めるということで、命乞いをしたんです。

以上から、各形式において、格助詞的な用法では名詞性がある程度残っていること、状況成分と接続助詞用法では更に名詞性が喪失していることが確認される。この名詞性の喪失の程度性は、節の文的な性質と関係しており、後接する助詞「を」の格助詞性の希薄化の程度性にも影響を与えられられる。

5. 節の独立性について

第5章で述べたように、接続トコロヲ節においては、節内に「当為性」を表すモダリティ表現「べき」、「はず」などが含まれる特徴が見られた。接続トコロヲは、このような節内のモダリティ的な性質により、述部用法を持つ。この点に関連して、他の形式においても述部用法を持つかどうかを検討する(ただし、「中を」の場合、「二人の女性が感心して見つめる中だ」のような文は存在しないので、検討しない)。

まず、「のを」形式における述部用法の可能性について検討する。大島(2010)

では、「の⁶」節における「の」について、文末表現「のだ」における「の」と同一要素である可能性が示されている。大島(2010)では、大島(1995)を引用し「「Pノダ」の機能は、ある命題表現「P」を別の命題(もしくは非言語的状況)に関連するものとして提示することである。(大島 1995:110)」と述べられている。この指摘に基づくと、(27)の「対抗動作」型文における格助詞用法ノヲ、(28)の「同時的対比」型文における接続助詞用法ノヲは、基本的に「だ」が後接した表現が可能である。

- (27) a 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手を振って…
b 二人がそれを手帳に写しとろうとするのだ。
- (28) a ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのを、うちだけはクロマトロン方式をとったのです。
b ソニー以外は世界中がみなシャドウマスク方式だったのです。

この文末表現の「のだ」は、庵(2001)では「関連付け」の用法⁷として捉えており、野田(1997)では、ムードの「のだ」用法⁸とされているものである。ここでは、このような文末表現「のだ」のモダリティ的な意味に注目し、格助詞用法ノヲと複合助詞用法ノヲにおいてこの意味が存在するかを確認したい。この点の確認のために、両者が用いられるそれぞれの文のタイプにおいて、文末表現「のだ」と逆接の「が」によって節を連結した文の意味を検討する。この逆接「～のだが」は、野田(1997)で指摘された従属節におけるムードの「のだ」の用法である。

- (29) a 私はドイツ語もできるが、中国語もできる。
b 私はドイツ語もできるのだが、中国語もできる。 (野田 1997)

⁶ 大島(2010)では、「Sの」形式を「ノ型補文」と呼んでいる。本稿の「のを」節も「Sの」形式として捉えられている。

⁷ 庵(2001)では、関連付け「のだ」について、「(先行文)P。Qのだ」という形式に基づいて、「QがPの理由を説明している場合」、「QがPの言い換えである場合」、また、状況と結びつける「話し手の解釈」「発見」の用法が取り上げられている。

⁸ 野田(1997)では、ムードの「のだ」について「文を名詞文に準じる形にすることによって、話し手の心的態度を表すもの(野田 1997:104)」と定義している。

野田(1997)では、(29b)のように「のだが」が用いられると従属節の事態と主節の事態との矛盾・対立、話し手の意外性や不満を強く示すという性質により、「のに」との類似性が見られることが指摘されている。

以上の点を考慮しながら、次の格助詞用法ノヲと逆接「～のだが」の交替の例を参照されたい。(＃は、文末表現「のだ」と「のを」における「の」が同一な解釈ではないことを示す)

- (30) a 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにや住所の控えはあるから」
- b ??二人がそれを手帳に写しとろうとするのだが、じれったそうに手をふって「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにや住所の控えはあるから」
- (31) a 普通なら辛くて、逃げ出しかノイローゼになるのを、じっとその重みに堪えて頑張ってるんだわ。
- b #普通なら辛くて、逃げ出しかノイローゼになるのだが、じっとその重みに堪えて頑張ってるんだわ。

(30b)の許容度が低くなる原因は、「の」節内の事態が「る」形になっていることにある。つまり、「写しとろうとしたのだったが」のように「た」形であれば文法的な文になると思われる。また、(31a)の格助詞用法ノヲは後続節との他動的な解釈が読みとられるもので、(31b)のムードの「のだ」のような心的態度を表すという意味は持っていないと考えられる((30b)を「{している/した}のだが」に置き換えた場合も同様であると思われる)。この点は、(30a)、(31a)の「の」節がそのまま、「のに」に置き換えられない点からも確認できる。

- (32) a ??二人がそれを手帳に写しとろうとするのに、じれったそうに手をふって、「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにや住所の控えはあるから」

- b 二人がそれを手帳に写しとろうと{している/した}のに、じれったそうに手をふって、「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにや住所の控えはあるから」
- (33) a ??普通なら辛くて、逃げ出すかノイローゼになるのに、じっとその重みに堪えて頑張ってるんだわ。
- b 普通なら辛くて、逃げ出すかノイローゼになるはずなのに、じっとその重みに堪えて頑張ってるんだわ。

これらの「のを」節が「のに」節に置き換えられるためには、(32b)の「している/した」のようなアスペクト・テンス表現、(33b)の「はず」のようなモダリティ表現が必要であるが、これらの文末表現であり、文的な性質に関わるものである。

一方、接続助詞用法ノヲにおける「～のだが」の交替文も参照されたい。

- (34) a はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉だったのを、父母や祖父母と一緒に口ずさんでいるうち、いつか、生活責任者・保育者としての心情も移しこめるようになったのだと思うのです。
- b はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉だったのだが、父母や祖父母と一緒に口ずさんでいるうち、いつか、生活責任者・保育者としての心情も移しこめるようになったのだと思うのです。
- c はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉だったのに、父母や祖父母と一緒に口ずさんでいるうち、いつか…
- (35) a 厳格なペースで貫かれているテンポをベートーヴェンが作品三十一の一の根底に置き、それを前提にして作曲していたのを、グルダは、このソナタにとっては特性となっている細部を暗示してみせしてくれそうにもみえる。
- b 厳格なペースで貫かれているテンポをベートーヴェンが作品三十一の一の根底に置き、それを前提にして作曲していたのだったが、グルダは、このソナタにとっては特性となっている細部を暗示してみせしてくれそうにもみえる。

- c 厳格なペースで貫かれているテンポをベートーヴェンが作品三十一の一の根底に置き、それを前提にして作曲していたのに、グルダは、このソナタにとっては…

(34)、(35)の接続助詞用法ノヲ節においては、それぞれの(b)のように「のだが」との置き換えが可能な上、(c)の「のに」との置き換えもできる点で、野田(1997)で捉えたムードの「のだ」の意味が存在しており、文的な性質を有していると判断される。上記の議論から、接続助詞用法ノヲ節は節として独立性が高く、後接する「を」も格助詞機能がなくなっており、「のだが」、「のに」に近い機能になっていると考えられる。

一方、接続トコロヲについては、述部用法を持つ上に、終助詞的に用いられる現象が挙げられる。

- (36) a 本来なら、私たちの命がなくなるはずのところを、こういう形ですっきり収めるということで、命乞いをしたんです。
b 本来なら、私たちの命がなくなるはずのところを…
(37) a ほんとうは次男坊ですから、「次郎」と名づけられるべきところを、七番めに生まれたということで「七郎」とつけられました。
b ほんとうは次男坊ですから、「次郎」と名づけられるべきところを…

(36)、(37)のように、接続トコロヲ節は、終助詞用法で用いることができる。これは、関連付けの述部用法を持つ接続ノヲ節の「継起的対比」、「同時的対比」型における接続助詞用法ノヲ節が次のように、終助詞用法として用いられないことと対照的である。

- (38) a はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉だったのを、父母や祖父母と一緒に口ずさんでいるうち、いつか、生活責任者・保育者としての心情も移しこめるようになったのだと思うのです。
b *はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉だったのを…

- (39) a 『暗殺の年輪』で紹介されているところを引用すると……中略……実際の鶴ヶ岡城は平城であったのを、五層の天守閣と立派になっている。
b *実際の鶴ヶ岡城は平城であったのを…

ここで、接続トコロヲにおける(36)、(37)の終助詞用法の存在から、この節の独立性が高いことが言える。この接続トコロヲの終助詞用法は、森田・松木(1989)で取り上げられた「ものを」の終助詞用法に類似していると考えられる。

- (40) 「それほどに思い合ってる仲と知ったらあんなに勧めはせぬものを」
(森田・松木 1989)

森田・松木(1989)では、この用法について「逆接条件を示し接続助詞的用法の「もの」であり、そこから後件が省略されたと考えることができる(森田・松木1989:158)」と述べられている。この指摘に基づくと、接続トコロヲについては、節としての独立性を持つことで、これに後接する「を」は格助詞としての性質がなくなっていると捉えられる。一方、「のを」の場合、関連付けの「のだ」という述部用法を持っているが、「のを」節のままで、後続節の省略はできない点で、格助詞機能の希薄化においては、接続トコロヲの「を」までは進んでいないと考えられる。

6. 格助詞「を」の性質の希薄化の程度性と複合助詞化について

これまで、「中を」、「のを」、「ところを」形式における文法的な性質と、それぞれの形式における格助詞「を」機能の希薄化について検討した。本研究の立場に基づくと、これらの形式における助詞「を」は、動詞と直接的に関係しない点で、全体的に本来の格助詞の性質が希薄化されているものである。しかし、複合形式としての文法的な振る舞いを検討すると、空間ナカヲ、格助詞用法ノヲでは格助詞的な性質が残っているが、時間ナカヲ、接続助詞用法ノヲ、接続トコロヲでは格助詞性の希薄化が更に進んでいることが確認できた。

本章で検討した現象において、各形式における格助詞「を」の性質の希薄化にかかわる特徴は次のようにまとめられる。

(41) 「中を」、「のを」、「ところを」形式における

格助詞「を」の性質の希薄化とかかわる文法的な振る舞い

	①構造的な 位置づけ	②名詞性の喪失 の程度性	③節の独立性 文的性質の有無	*終助詞的 用法の有無
空間ナカヲ	動詞句内	残存		
時間ナカヲ	動詞句外	喪失		
格助詞用法ノヲ	「対抗動作性」 の動詞句内	残存	無し	
接続助詞用法 ノヲ	動詞句外	喪失	有	
接続トコロヲ	動詞句外	喪失	有	

(41)の表では、各形式と用法の振る舞いにより、どのように格助詞「を」の性質が希薄化しているかが示されている。各現象(横軸)の項目で、太字で示されているものが格助詞性の希薄化にかかわる性質である。


まず、時間ナカヲは、動詞句の外側に位置付けられており、名詞性の喪失も見られる点で、もはや格助詞としては機能していないと考えられる。ただし、述部用法は持っていない点で、節として独立性は高くない。

一方、「継起的対比」、「同時的な対比」型文の接続助詞用法ノヲは、動詞句の外側に位置付けられており、名詞性の喪失、述部用法「のだ」との交替が可能で文的な性質を持っている点で、節の独立性が高いと考えられる。

また、接続トコロヲは、構造的に動詞句の外に位置付けられ、名詞性の喪失の上、モダリティ的な意味を持つ述部用法がある。更に終助詞用法として用いられる点を考えると、節の独立性が最も高く、ここでの格助詞「を」の性質も最も希薄化しているものと捉えられる。

以上の考察から、各形式において格助詞「を」性質の希薄化の程度性は次のようになると考えられる。

(42) 格助詞「を」の性質の希薄化の強弱

強  弱

空間ナカヲ 時間ナカヲ 接続助詞用法ノヲ 接続トコロヲ
格助詞用法ノヲ

(42)で太字で示した用法は希薄化の程度性は見られるが、文法的に格助詞としての機能が失われており、それぞれ、状況成分(時間ナカヲ)、接続助詞(接続助詞用法ノヲ、接続トコロヲ)、終助詞(接続トコロヲ)の機能を持ち、複合助詞化しているものと考えられる。

以上から、第3章から第5章に渡って検討した各形式の機能の違いが、この章で検討した格助詞「を」の性質の希薄化の程度性と相関していることが明らかになった。ここで、時間ナカヲ、接続助詞用法ノヲ、接続トコロヲについては、形式名詞の実質的な意味だけではなく名詞性そのものが喪失している点、また、接続助詞用法ノヲと接続トコロヲについては、第4章と第5章で分析したように、形式全体として、「対比」や「逆接」関係を示すといった独自の意味が生じて機能している点で、松木(1990)で言う「第2種複合辞」の特性が見られると判断され、複合助詞としてみなしてもよいと考えられる。更に、接続トコロヲは、終助詞用法として用いられる点で、最も複合助詞化が進んでいるものと捉えられる。

一方、空間ナカヲ、格助詞用法ノヲに関しては、本研究の立場としての格助詞の「を」の典型から変質した機能を持っていると捉えられるが、一部格助詞の性質が残存している。ここでの形式名詞「中」と「の」は、実質的な意味は持っていないが、名詞性が残っており、格助詞「を」と結合しているものであると考えられる。したがって、これらの用法の「を」は、典型的な格助詞「を」が希薄化したものではあるが、複合助詞化までは至っていないものと判断される。

7. まとめ

以上で、「中を」、「のを」、「ところを」について、複合した形としての文中の振る舞いを検討し、格助詞的なものとそれ以外のものにおける格助詞「を」の希薄化の程度性を捉えた。これらの形式において、格助詞「を」は、動詞と直接的な関係を持たない点で本来の機能が希薄化したものであるが、形式全体の文

法的機能において、格助詞と、状況成分、接続助詞に分けられる点においては、この希薄化にも程度性があると考えられる。この章では、それぞれの形式における機能変化に格助詞性の希薄化の程度性がかかわっていることが明らかになった。また、以上の議論から時間ナカヲ、接続助詞用法ノヲ、接続トコロヲについては、複合助詞として捉えられることを提示した。

第7章 結論

1. 本研究の問題意識と各章のまとめ

本研究では、形式名詞と助詞「を」が複合した形式「中を」、「のを」、「ところを」における各用法の区分け、また、それぞれの形式と用法における格助詞「を」の希薄化の程度性と複合助詞化について議論した。これらの形式に関する従来の研究では、主に「中を」、「のを」に後続する「を」の格助詞の性質に基づいて捉えられたものが多く、複合助詞として別の用法を検討したものは、一部の研究にしか見当たらなかった。また、「ところを」に関しても、複合辞の接続助詞用法として意味・記述が行われている一方、後続する「を」との関係を捉えた研究は少なかった。

本研究では、まず、格助詞「を」について、名詞と動詞との文法的な関係を必須項として示すという性質を典型的なものとみなした。このような格助詞「を」の典型を設定した上で、本研究で対象とした形式は、基本的にこの典型から逸脱しているものとした。第3章から第5章までは、先行研究の指摘を参考にしながら、これらの形式が用いられる文において、各形式の用法ごとの意味的な違い、機能的な違いを検討し、格助詞として機能しない形式の特徴を明らかにした。また、第6章では、格助詞「を」の性質の希薄化の程度性を検討し、格助詞として機能する形式と格助詞として機能しない形式の違いを明らかにした。このような分析に基づいて、格助詞として機能しない時間ナカヲ、接続助詞用法ノヲ、接続トコロヲの形式については複合助詞として位置付けられることを議論した。

以下、第3章以降の議論についてまとめる。

第3章では、移動格の「を」、期間ヲ、「中を」形式における共通性とずれを分析し、それぞれの用法における特徴と機能を検討した。結果として、期間ヲ①は動詞「過ごす」などの項としての必須格、期間ヲ②は副詞格と捉えられ、空間ナカヲも副詞格としての性質が見られた。これは、動詞との文法的関係は示さないが、語彙的な意味に依存し生起する点、二重ヲ格の可能な点により、副詞格としての格助詞「を」の機能を認めた上での位置づけである。また、時間ナカヲの場合は、状況成分化により後続節の全体との関係を示す機能に変化し、格助詞機能が失われていることが明らかになった。以上のように、出来事の修飾を受ける形式名詞「中」と「を」の結合は、空間ナカヲ、時間ナカヲにおける格助詞機能の変質のきっかけになっていると考えられる。

第4章では、複合助詞ノヲの用法について、「対抗動作性」と接続関係を考慮し、接続ノヲ文のタイプを、「対抗動作」型、「継起的対比」型、「同時的対比」型の3つに分けた。それぞれのタイプは、他動的な意味である「対抗動作性」が含まれ、両事態が連結されているが、「継起的対比」型、「同時的対比」型においては、他動性が弱められ、接続関係により結び付けられている。この点から、複合助詞ノヲの用法においては、「他動性の強弱」を基準とした格助詞用法と接続助詞用法の連続性が捉えられることが明らかになった。

第5章では、「ところを」が接続助詞として機能する場合の意味的な特徴を検討した。その特徴として接続トコロヲ節内に「当為性」、「事態未成立」といった特徴が存在することを確認し、これはモダリティ的な特徴であると捉えた。一方、接続トコロヲ節における特徴が、反事実を表す文末形式「ところだった」の意味的な特徴と共通していることを確認し、両方の「ところ」は同一のものであると結論づけた。また、モダリティ的な特徴を持つ「ところ」は名詞性が喪失したものであり、後続する「を」は格助詞機能が希薄化したものと捉えられ、これらが複合した形で、接続助詞機能を持つことを示した。

第6章では、「中を」、「のを」、「ところを」について、複合した形としての文中の振る舞いを検討し、格助詞的なものとそれ以外のものにおける格助詞「を」の希薄化の程度性を捉えた。これらの形式において、助詞「を」は、動詞と直接的な関係を持たない点で本来の機能が希薄化したものであるが、形式全体の文法的機能において、格助詞と、状況成分、接続助詞に分けられる点からは、

この希薄化にも程度性があると考えられる。この章では、それぞれの形式における機能変化に格助詞性の希薄化の程度性がかかわっていることを明らかにした。また、以上の議論から時間ナカヲ、接続助詞用法ノヲ、接続トコロヲについては、複合助詞として捉えられることを提示した。

2. 本研究の意義と今後の課題

本研究では、格助詞「を」の典型的な特徴を設定した上で、例外とみなされるものを分析し、その典型から区分し、別の位置づけを試みた。このような分析は、助詞「を」の統一的な特徴を捉えることには反しているものと見えるかもしれない。しかし、本研究で扱った形式については、格助詞としての「を」だけを問題にせず、形式名詞との複合、形式全体としての文法的な振る舞いを問題にした上で、格助詞「を」の希薄化を捉えている。つまり、格助詞「を」の典型的な性質の希薄化にかかわるさまざまな現象を分析し、その典型から例外まで幅広く捉えようとしたものである。

本研究は、このような分析を通して、従来の格助詞「を」の典型的な枠組の中で説明が難しい周辺のものを位置づけるための一つの手がかりとなるものであると言える。また、これまでの格助詞の「を」を重点においた観点から、複合形式の構成要素としての「を」の特徴を捉えることで、「を」とは何かを見直す可能性を提示したと思う。

一方、このような立場からは、多くの課題も残すことになる。まず、格助詞用法と他の用法との明確な区切りが可能なのかという点が挙げられる。例えば、第4章で「対抗動作」型、「継起的対比」型、「同時的対比」型において、「他動性の強弱」により、格助詞用法ノヲと接続助詞用法ノヲが連続していると捉えたが、「継起的対比」型文は「対抗動作性」という他動的意味と「対比」関係を表すような特徴を同時に持つ中間的なものである。第6章では、「継起的対比」型の接続助詞用法ノヲを複合助詞化したものと捉えたが、その中間的な特徴が見られるものについては、更に文法的な位置づけを検討する必要があると考えられる。

また、本研究では、周辺のものの分析に集中したため、格助詞の本質について厳密に立ち入らなかった面もあった。格とは何か、また格助詞とは何かについては様々な立場があり、その典型というのは形式的なものか、意味的なものか、

機能的なものかといった面から再検討した上で、格助詞「を」の希薄化を論じることが今後求められる。

一方、本研究では時間ナカヲ、接続助詞用法ノヲ、接続トコロヲについて、格助詞「を」の性質の希薄化が進んでおり、複合助詞化したものと捉えているが、複合助詞としての位置づけについても更に検討する必要があると思われる。つまり、複合助詞研究においては、これらの形式がどう位置付けられるかという観点からも検討が必要であり、他の複合助詞との意味的・機能的な共通点、相違点などを厳密に検討することが求められる。

今後は他の格助詞と複合助詞化に関する問題にも研究対象を広げて、その位置づけを明らかにする方向性で、より発展的に研究を進めていきたい。

参考文献

- 天野みどり(2008)「状況のヲ句について」『和光大学表現学部紀要』8、和光大学、pp. 1-13.
- 天野みどり(2010)「現代語の接続助詞的なヲの文について—推論による拡張他動性の解釈—」『日本語文法』10-2、pp. 76-92.
- 天野みどり(2011)『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院.
- 天野みどり(2012)「名詞節か副詞節か—「の」節の名詞性・節性検討—」『国立国語研究所共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」公開シンポジウム』国立国語研究所、pp. 1-8.
- 庵功雄(2001)『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク.
- 伊藤創(2013)「二つの主部内在型関係節構文—産出の動機づけから見た同構文の分類と成立条件—」『日本語文法』13-2、pp. 88-104.
- 井上和子(1976)『変形文法と日本語(上)』大修館書店.
- 宇都宮裕章(1998)「ヲ格の境界性—「範囲」を定める格としての認定—」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)』48、静岡大学、pp. 17-32.
- 大島資生(1995)「応答句「そうです」の機能について」『日本語研究』11、東京都立大学、pp. 109-119.
- 大島資生(2010)『日本語連体従属節構造の研究』ひつじ書房.
- 奥田靖雄(1983)「を格名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究(編)『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房、pp. 21-149.
- 影山太郎(2002)「概念構造の拡充パターンと有界性」『日本語文法』2-2、くろしお出版、pp. 29-45.
- 影山太郎(2010)「動詞の文法から名詞の文法へ」『日本語学』29-11、明治書院、pp. 16-23.
- 加藤重広(2006)「対象格と場所格の連続性—格助詞試論(2)—」『北海道大学文学研究科紀要』118、北海道大学、pp. 135-182.

- 加藤理恵(2010)「小説における「ところ」節の使用傾向とその特徴について」
『国際人間学部紀要』16、鹿児島純心女子大学、pp. 31-44.
- 金水敏・今仁生美(2000)『意味と文脈』岩波書店.
- グループ・ジャマシイ(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版.
- 黒田成幸(2005)「主辞内在関係節」『日本語からみた生成文法』岩波書店.
- 国立国語研究所(1997)『日本語における表層格と深層格の対応関係』秀英出版.
- 小矢野哲夫(1995)「格くずれ—ひとえ文とあわせ文のあいだ—」仁田義雄(編)
『複文の研究(上)』くろしお出版、pp. 1-26.
- 近藤純子(1999)「複合辞「ところを」についての論考」『日本語教育』103、pp. 1
1-20.
- 佐伯暁子(2013)「現代語における状況を表す「～(の)中を」「～(の)中φ」につ
いて」『日本語文法』13-2、pp. 54-70.
- 城田俊(1993)「文法格と副詞格」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐる』くろし
お出版、pp. 67-94.
- 申義植(2012)『状況の「ヲ」に関する研究—動詞依存性と出来事性について—』
筑波大学大学院博士課程 人文社会科学研究科中間評価論文.
- 杉本武(1986)「格助詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武(著)『いわゆる日本語助
詞の研究』凡人社、pp. 227-380.
- 杉本武(1991)「二格をとる自動詞—準他動詞と受動詞—」仁田義雄(編)『日本
語のヴォイスと他動性』くろしお出版、pp. 233-250.
- 杉本武(1993)「状況の「を」について」『九州工業大学情報工学部紀要(人文・社
会篇)』6、九州工業大学、pp. 25-37.
- 杉本武(1994)「「警察はその泥棒が逃げて行くところを捕まえた」再考」『九州
工業大学情報工学部紀要』7、九州工業大学、pp. 109-132.
- 杉本武(1994)「日本語動詞の他動性と格助詞」『日本語シンポジウム「言語理論
と日本語教育の相互活性化」予稿集』、津田日本語教育センター、pp. 26-36.
- 杉本武(2009)「格助詞『を』再考」『日語日文学研究』71-1、韓国日語日文学会、
pp. 3-12.
- 杉本武(2013)「複合助詞の品詞性について—名詞を構成要素とする複合助詞を例
に—」藤田保幸(編)『形式語研究論集』和泉書院、pp. 87-103.

- 砂川有里子(1987)「複合助詞について」『日本語教育』62、pp. 42-55.
- 高井岩生(2012)「期間を表すヲ格名詞句の生起条件」『九州大学言語学論集』33、九州大学、pp. 69-79.
- 田中寛(1996)「トコロ節>における意味の連鎖性」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』8、早稲田大学、pp. 1-58.
- 田中寛(2010)『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房.
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 第I巻』くろしお出版.
- 寺村秀夫(1983)「「付帯状況」表現の成立の条件—「XヲYニ…スル」という文型をめぐって—」『日本語学』10-2、明治書院、pp. 38-46.
- 中尾有岐(2012)「全てのヲは格助詞か」『大阪大学世界言語研究センター論集』7、大阪大学、pp. 75-88.
- 永野賢(1953)「表現文法の問題—複合辞の認定について—」(金田一博士古稀記念論文集刊行会(編)『金田一博士古稀記念言語民族論叢』三省堂、その後、永野賢(1970)『伝統論に基づく日本語文法の研究』東京堂出版、永野賢(1986)『文章論総説』朝倉書店に再録)
- 中村暁子(2003)「現代語における二重ヲ格について」『岡大國文論稿』31、岡山大学文学部、pp. 113-122.
- 仁田義雄(1993)「日本語の格をめぐって」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐって』くろしお出版、pp. 1-37.
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版.
- 仁田義雄(2014)「日本語モダリティの分類」澤田治美(編)『ひつじ意味論講座3モダリティ I : 理論と方法』ひつじ書房、pp. 63-83.
- 日本語記述文法研究会(編)(2003)『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版.
- 丹羽哲也(1998)「逆接を表す接続助詞の諸相」『人文研究：大阪市立大学文学部紀要』5-10、大阪市立大学、pp. 91-125.
- 野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版.
- 馬場俊臣(2006)「複合辞「うえで」について—特に動詞の基本形に接続する「うえで」の特徴—」藤田保幸・山崎誠(編)『複合辞研究の現在』和泉書院、pp. 41-59.

- 藤田保幸(2006)「複合辞研究の展開と問題点」藤田保幸・山崎誠(編)『複合辞研究の現在』和泉書院、pp. 3-40.
- 益岡隆志・田窪行則(1987)『日本語文法セルフマスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『改訂版基礎日本語文法』くろしお出版.
- 益岡隆志(1995)「時の特定、時の設定」仁田義雄(編)『複文の研究(上)』くろしお出版、pp. 149-166.
- 松井夏津紀・影山太郎(2009)「副詞と二次述語」影山太郎(編)『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店、pp. 260-292.
- 松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度認定の試み」『早稲田大学日本語教育センター紀要』2、早稲田大学、pp. 27-52.
- 三井正孝(2006)「格助詞らしからぬ複合格助詞」一ニツイテ、ニトツテ、ヲモツテ、トシテの場合一 藤田保幸・山崎誠(編)『複合辞研究の現在』和泉書院、pp. 113-135.
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店.
- 三原健一(2006)『新日本語の統語構造』松柏社.
- 三原健一(1997)「動詞のアスペクト構造」中右実(編)『ヴォイスとアスペクト』研究社出版、pp. 108-186.
- 三宅知宏(1995)「ヲとカラー起点の格表示」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版、pp. 67-73.
- 三宅知宏(1996)「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110、pp. 143-168.
- 村木新次郎(2012)『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房.
- 森田良行・松木正恵(1989)『日本語表現文型』アルク.
- 森田良行(2002)『日本語文法の発想』ひつじ書房.
- 森山新(2008)『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得—日本語教育に生かすために—』ひつじ書房.
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
- ヤコブセン, ウェスリー・M(1989)「他動性とプロトタイプ論」久野暁・柴谷方良(編)『日本語学の新展開』くろしお出版、pp. 213-248.

- 横田淳子(2006)「「に対して」の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』32、東京外国語大学、pp. 19-31.
- 渡部学(1995)「形式名詞と格助詞の相関単文と複文をめぐって」 仁田義雄(編)『複文の研究(上)』くろしお出版、pp. 27-54.
- レー・バン・クー(1988)『「の」による文埋め込みの構造と表現の機能』くろしお出版.
- Harada, S. I. (1973) "Counter Equi NP Deletion" *Annual Bulletin* 7, University of Tokyo, pp. 113-147.
- Homma, Shinsuke(2001) "A Note on Traversal Objects" 中右実教授還暦記念論文編集委員会(編)『意味と形のインターフェイス(下巻)』くろしお出版、p. 751-761.
- Hopper, Paul J. & Sandra A. Thompson. (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse" *Language* 56:2, pp. 251-299.

用例出典

『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』、(中納言を使用)、国立国語研究所.

各章と既発表論文との関係

第1章 序論

新規執筆

第2章 先行研究と問題の所在

新規執筆

第3章 移動格の「を」と「中を」形式におけるずれと機能変化について

申義植(2012)『状況の「ヲ」に関する研究—動詞依存性と出来事性について—』

筑波大学大学院博士課程 人文社会科学研究科中間評価論文、(一部)。

申義植(2014)「状況の「を」句文成立の意味的な制約について—時間的状況における展開プロセス—」『筑波応用言語学研究』21、筑波大学応用言語学研究室、pp. 82-95.

第4章 複合助詞ノヲにおける格助詞用法と接続助詞用法の連続性について

申義植(投稿中)「複合助詞ノヲにおける格助詞用法と接続助詞用法の連続性について」

第5章 接続助詞として機能する「ところを」について

申義植(2016)「接続助詞として機能する「ところを」について」『日語日文学研究』97、pp. 81-99.

第6章 格助詞「を」性質の希薄化の程度性について

申義植(2016)「形式名詞と結合する格助詞「を」の性質の希薄化と複合助詞化について—「中を」「のを」「ところを」を中心に—」『第13回筑波大学応用言語学研究会』

申義植(近刊)「格助詞「を」の性質の希薄化の程度性について―「中を」「のを」「ところを」形式を中心に―」『言語学論叢』オンライン版9(通巻35号)、筑波大学一般・応用言語学研究室.

第7章 結論

新規執筆